

八田奈呂遺跡

四国横断自動車道（伊野～須崎）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年3月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



仁淀川と八田地区



調査区完掘状況全景



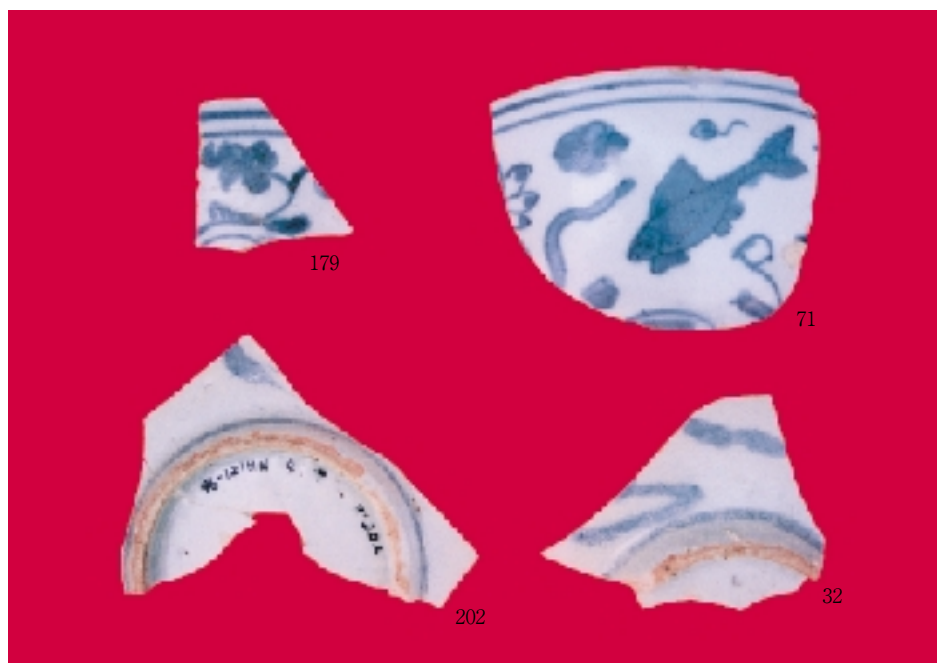
1～3区完掘状況



4・5区完掘状況（第1検出面）



4・5区完掘状況（第2検出面）



染付



青磁

序

本州四国連絡橋は3ルートが完成し、四国四県の県都もエクスハイウェイという形でむすばれ、高速交通体系における高速道路の持つ意義はさらに大きなものとなってきました。高知県内でも南国～伊野間が開通し、さらに伊野～須崎、～窪川へと西伸びつつ、それに伴い発掘調査も順次実施されています。

四国横断自動車道建設工事に伴う数々の埋蔵文化財の発掘調査では貴重な発見が相次ぎ、高知県の古き歴史を解き明かすうえでも大きな成果を得ています。八田奈呂遺跡の調査においても同様に貴重な成果を得ることができました。八田奈呂遺跡の調査では中世から近世にかけての生活状況を示す多数の資料が出土し、その時代の集落跡を主とする遺跡の存在が確認されました。これにより、これまで文献等のみにより語られてきた事が、物によって証明され、地域の歴史をより明らかに振り返ることができました。

発掘調査による成果は、今、そして将来の人間がより豊かに生きていくための糧とするため、高知県の諸地域の歴史を解明していくうえでかけがえのない文化遺産として、伝えられなければいけません。本報告書により、埋蔵文化財をはじめとする歴史を知ることに対する理解と関心が一層深められれば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査を実施するにあたり、御配慮、御協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

2000年3月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 河崎 正幸

例 言

1. 書名

本書は、高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成7年度・8年度・9年度に実施した四国横断自動車道建設に伴う八田奈呂遺跡発掘調査の、調査区1区～6区に関する発掘調査報告書であり、書名を『八田奈呂遺跡』とする。なお、八田奈呂遺跡の調査区1区～6区以外については報告書『八田奈呂遺跡』において発掘調査の報告を行っている。

2. 遺跡の所在

八田奈呂遺跡は、高知県吾川郡伊野町八田に所在する。

3. 調査期間

試掘調査は平成8年1月～平成8年3月まで、本調査は平成8年4月～平成9年5月まで実施した。

4. 調査面積

試掘調査525m²、平成8年度調査29,000m²、平成9年度調査4,000m²。

5. 調査主体

発掘調査は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。

6. 調査体制

(1)八田奈呂遺跡に該当する部分の八田地区試掘調査の担当

江戸秀輝（高知県文化財団埋蔵文化財センター 主任調査員）

坂本憲昭（高知県文化財団埋蔵文化財センター 調査員）

(2)本発掘調査の担当

大野佳代子（高知県文化財団埋蔵文化財センター 専門調査員）

江戸秀輝（ 同 主任調査員）

(3)試掘及び本発掘の総務の担当

吉岡利一（高知県文化財団埋蔵文化財センター 主幹）

大原裕幸（ 同 主幹）

7. 本報告書の執筆と編集

執筆及び編集は大野・江戸の共同で行った。執筆分担は以下のとおりである。第1章（江戸）、第2章（江戸）、第3章（大野）、第4章1（大野）、第4章2（江戸）。

8. 本報告書に関わる出土遺物について下記の諸氏に貴重な御教示をいただいた。記して深く感謝の意を表したい。（敬称略）

大橋康二（佐賀県教育庁文化財課）、橋本久和（高槻市立埋蔵文化財センター）、満塩大洗（高知大学理学部教授）。

9. 発掘調査及び整理作業に参加した作業員の方々は、以下のとおりである。記して感謝したい。（敬称略）

発掘現場作業員は下記の方々である。

浅井美枝 板原史明 今村重臣 上野太一郎 梅原美智 大賀幸子 大塚耕平 岡田晃 岡林千代亀 岡本まみ 岡本美恵子 産田康子 笠原郁子 加志崎悦子 川埜龍三 川端章江 国沢英子 国沢和代 国沢節子 窪内笑 小泉響子 小路口聡 佐々木智文 末政淑子 末政則幸 仙頭洋子 高橋初 滝沢昭子 田中克佳 田中友紀子 近沢美恵子 近沢洋子 土居隆弘 土居敏江 徳平真也 徳弘匠 友松貴史 中岡きよ 長沢健太 西尾正盛 西田成美 西村信一郎 西村説子 西村里津子 花田洋通 浜田克子 弘田恵子 藤岡京子 藤本和 細井裕介 本田壮史 前田和彦 松井英晃 松本明美 松本純子 松本忠雄 松本恵 宮崎歩 宮崎雅和 宮地紀子 邑中三代市 本山みどり 森沢健次郎 山本智子 横川香代 吉井裕子 吉村政之 吉本善子

(重機操作運転は国沢工業の皆さん)

遺物整理・報告書作成に関する作業員は下記の方々である。

岩貞泰代 岩本須美子 大原喜子 尾崎富喜 小野山美香 川久保香 楠瀬憲子 久万公子 小松経子 高橋千代 田村美鈴 橋田美紀 浜田雅代 東村知子 前田玲子 松木富子 山本裕美子 山本由里 矢野雅

10. 発掘調査及び報告書作成に際して、以下の諸氏に御協力いただいた。記して感謝したい。(敬称略)

調査・測量については、国沢清二(国沢工業) 出原恵三・松村信博・下村裕・山本純代(高知県文化財団埋蔵文化財センター)に協力を得た。また報告書作成にあたっては出原恵三・浜田恵子・藤方正治・松村信博・武吉眞裕はじめ高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏に協力を得た。

また、調査中様々な御協力をいただいた地元の方々、諸般の御協力をいただいた関係各位に対して感謝の意を表したい。

11. 報告書作成にあたって、地元、伊野町八田在住の森秀樹氏著作の『八田のことども』を活用させていただいた。また、森氏には、発掘調査中より貴重な御教示、御助言をいただいた。あらためて感謝の意を表したい。

12. 資料の保管

試掘調査と本調査で出土した遺物および記録図面・写真等の資料は、高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

1. 報告書に用いた高度は海拔高であり、北方位については真北を用いた。
2. 本報告書における遺構名称については、調査区1区～6区で統一した呼称を用いている。遺構番号については調査区1区～6区の中で重複しない。
3. 遺物の図版番号は、本報告書における遺物全体について、通し番号とした。
4. 遺構図版の縮尺は、それぞれの内容に応じて設定し、個々の図面にスケールを付した。
5. 遺物図版の縮尺は、遺物の種類等に応じて、1/1・1/3・1/4の縮尺を使い分け、それぞれにスケールを付した。

本文目次

第 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	3
第 章 調査に至る経過と調査の方法	7
1. 調査に至る経過	7
2. 調査の方法	8
第 章 調査成果	9
1. 調査区の概要と基本層序	11
2. 検出遺構と出土遺物	11
(1) 5区	17
土坑	17
溝	26
ピット	26
遺構間接合の遺物	29
遺構外出土の遺物	29
(2) 6区	33
(3) 4区	34
土坑	34
溝	38
ピット	39
性格不明土坑	40
石列	41
遺構外出土の遺物	41
(4) 1～3区	48
第1検出面(近世～)	48
第2検出面(中世～近世)	48
第3検出面(～中世)	55
3. 1～6区出土遺物観察表	57
第 章 考察	69
1. 八田奈呂遺跡出土遺物について～まとめ～	69
2. 八田奈呂遺跡の文献に見える情勢と調査成果との検証	75

挿図目次

図1	八田奈呂遺跡位置図	1
図2	八田奈呂遺跡周辺の遺跡分布図	2
図3	八田奈呂遺跡位置図	10
図4	調査区試掘位置図	12
図5	調査区位置図	13
図6	土層断面図(1 ~ 3 区)	14
図7	5 区検出遺構全体図(第 1 検出面)	15
図8	5 区検出遺構全体図(第 2 検出面)	16
図9	S K 1 ~ 3 平面図・エレベーション図及び S K 3 出土遺物実測図	17
図10	S K 4 ~ 6 平面図・エレベーション図及び S K 6 出土遺物実測図	18
図11	S K 7・8 平面図・エレベーション図及び S K 8 出土遺物実測図(1)	20
図12	S K 8 出土遺物実測図(2)	21
図13	S K 9 ~ 11 平面図・エレベーション図及び S K 10(29)、S K 11(21 ~ 28・30) 出土遺物実測図	22
図14	S K 12・13 平面図・エレベーション図及び S K 12(37)、S K 13(31 ~ 36) 出土遺物実測図	23
図15	S K 14 ~ 19、P 33・34 平面図・エレベーション図及び S K 18 出土遺物実測図	25
図16	S D 1・2 平面図・エレベーション図及び S D 1 出土遺物実測図	27
図17	P 24(44)、P 33(45)、P 36(46)、P 37(47) 出土遺物実測図	27
図18	5 区遺構外出土遺物実測図(1)	30
図19	5 区遺構外出土遺物実測図(2)	31
図20	5 区遺構外出土遺物実測図(3)	32
図21	6 区遺構外出土遺物実測図	33
図22	4 区検出遺構全体図(第 1 検出面)	35
図23	4 区検出遺構全体図(第 2 検出面)	36
図24	S K 21 ~ 29、S D 11 平面図・エレベーション図	37
図25	S K 22(127・128)、S K 24(118・119・125)、S K 25(117)、S D 11(120 ~ 124・126) 出土遺物実測図	38
図26	S X 1(集石含む) 平面図・エレベーション図	40
図27	S W 1・2 平面図・エレベーション図	42
図28	4 S 区遺構外出土遺物実測図(1)	43
図29	4 S 区遺構外出土遺物実測図(2)	44
図30	4 N 区遺構外出土遺物実測図	45
図31	4 区遺構外出土遺物実測図(1)	46
図32	4 区遺構外出土遺物実測図(2)	47

図33	1・2区検出遺構全体図(第2検出面).....	49
図34	1・2区検出遺構全体図(第3検出面).....	50
図35	3区検出遺構全体図(第2検出面).....	51
図36	3区検出遺構全体図(第3検出面).....	52
図37	1～3区エレベーション図・断面位置図(第2検出面).....	53
図38	1～3区エレベーション図・断面位置図(第3検出面).....	53
図39	S R 1～3復元推定位置図(1～3区).....	56
図40	1区(217・218)、2区(219)遺構外出土遺物実測図.....	56

写真図版

- PL. 1 仁淀川と八田地区
- PL. 2 調査区完掘状況全景・1～3区完掘状況
- PL. 3 4・5区完掘状況(第1検出面)・同(第2検出面)
- PL. 4 4・5区出土遺物 輸入陶磁器(染付・青磁)
- PL. 5 1～5区土層断面
- PL. 6 4・5区調査状況
- PL. 7 5区遺物出土状況
- PL. 8 4・5区遺物出土状況
- PL. 9 4・5区出土遺物 白磁・東播系須恵器
- PL.10 4・5区出土遺物 陶器(播鉢)外面・内面
- PL.11 4・5区出土遺物 土師器(小皿・杯皿)
- PL.12 4・5区出土遺物 土師器(杯)・瓦器(杯)
- PL.13 5区出土遺物 須恵器・石製品(石鍋)・磁器
- PL.14 1・5区出土遺物 陶器・磁器
- PL.15 5区出土遺物 陶器
- PL.16 4・5区出土遺物 土師器(鍋)・陶器
- PL.17 5区出土遺物 金属製品・石製品(砥石)
- PL.18 4区出土遺物 金属製品・石製品・古銭
- PL.19 4・5区出土遺物 灰釉陶器
- PL.20 4・5区出土遺物 陶器・磁器(能茶山産)
- PL.21 4・5区出土遺物 陶器(肥前系)

第 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

1 . 地理的環境

八田奈呂遺跡の所在する高知県吾川郡伊野町は、高知県の中央部、吾川郡の中央に位置する。東は土佐郡鏡村と高知市、南は吾川郡春野町と土佐市、南西は高岡郡日高村、西は高岡郡越知町に、北は吾川郡吾北村に接する。仁淀川が西から南西縁にそって蛇行しながら南東に流れた後、町の中心部をなす南東部の中央を南流する。北部は鷹羽ヶ森をはじめとする標高1,000m以下の山々が連なり、南部には丘陵と、東西方向の標高15~20mの沖積層である低地がある。全体として仁淀川及びその支流である勝賀瀬川・小野川・早稲川・宇治川・奥田川などの河谷や低地に集落が立地する。暖温帯の照葉樹林に町域のほとんどが覆われているが、北部山地の高所は冷涼帯で落葉樹林をみる。冬は温和で、かつて製紙の天日乾燥に役立ったが、台風等による集中豪雨は古来しばしば洪水の害をもたらした。特に増水した仁淀川本流が南部低地に逆流して帯水の害を与え、また北部山地では山腹斜面・溪谷の崩壊などの被害が起こった。自然災害については改善されつつも、まだ十分ではない。

遺跡の所在地である八田は、伊野町の南東部、仁淀川の左岸、町の中心部の南方に位置する。仁淀川の支流奥田川が南西流する。西は弘岡井筋と仁淀川がほぼ平行して南流し、比較的平野の多い所である。

八田堰については、近世初頭、八田村（現伊野町八田）から仁淀川対岸の大内村（現伊野町大内）に向かって設けられた堰で、その河水は弘岡井筋を通じて、下流左岸域を灌漑した。昭和初期にコンクリート化され、現在も機能している。

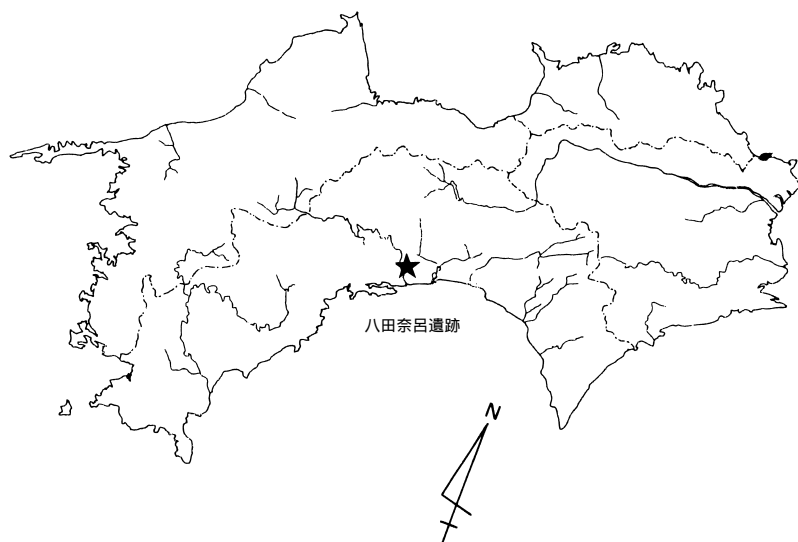


図1 八田奈呂遺跡位置図

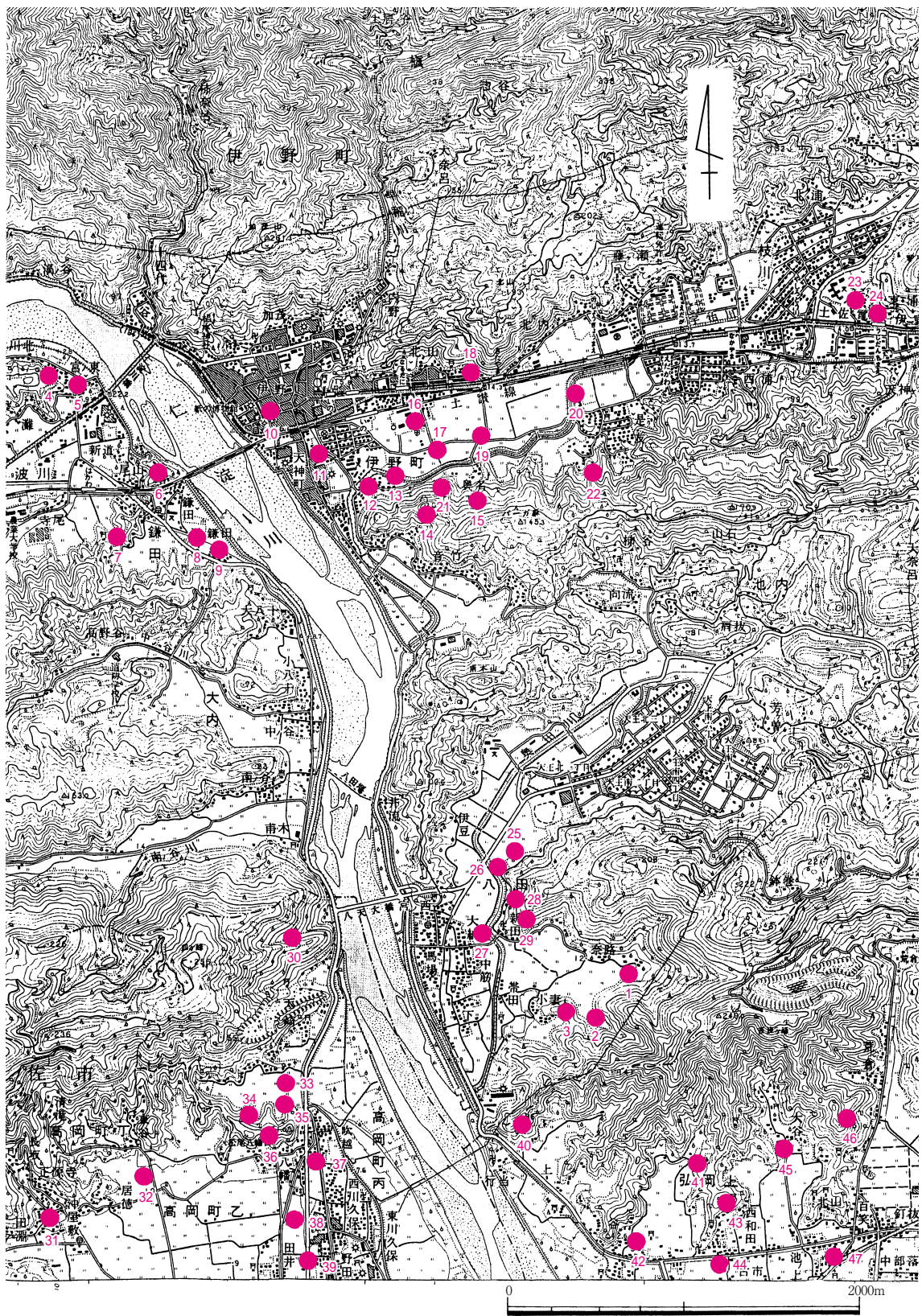


図2 八田奈呂遺跡周辺の遺跡分布図

2. 歴史的環境

次に、歴史的環境について、伊野町を中心にみていくと、古くは字塔ノ向から縄文前期の土器、字盗田からも同時期の土器が出土、宇治川左岸の奥名からは多くの縄文中期中葉の土器が発見された。大デキでは縄文後期・晩期の土器の出土、八田神母谷では縄文後期から、八田栃谷では縄文晩期の磨製石斧や弥生中期の弥生土器および石包丁も出土し、バーガ森北斜面でも弥生時代の石包丁が発見された。そして弥生中期後半の竪穴住居が発見され、高地性集落の存在も確認された。弥生後期の遺跡は寺門から壺・甕・高杯などの土器が発見され、天神溝田では弥生終末期の土器のほかに、銅剣・銅戈・敲石なども出土した。

古墳時代になると、大デキ、波川の城戸での遺物の出土がある。古墳は、枝川古墳群として3基の横穴式石室墳がみられ、八田には1基の後期古墳があった。いずれも小型の円墳で、内部に横穴式石室をもつ6～7世紀代のものである。

八田の岩瀧ノ鼻遺跡については、仁淀川の支流奥田川に沿う平野の山麓近くにある2箇所の遺跡で、標高は15m前後。岩瀧ノ鼻で発見された細形銅剣出土遺跡（岩瀧ノ鼻A地点遺跡）と、奥田川河川敷で発見された古墳時代中期の遺物出土遺跡（岩瀧ノ鼻B地点遺跡）で、両遺跡は距離的に150mほどしか離れていない。なおA地点遺跡は岩瀧遺跡ともいわれ、昭和31年（1956）に発見。B地点遺跡はそれ以前、奥田川の河川工事に伴って発見され、八田遺跡とも言われる。B地点遺跡を350m下った八田新田の奥田川河川敷からは、これも奥田川改修工事に伴って須恵器と丸

	名 称	種 別	時 代		名 称	種 別	時 代
1	八田奈呂遺跡	集落跡	弥生・古代～近世	25	岩瀧ノ鼻遺跡A	散布地	弥生
2	八田栃谷遺跡	散布地・祭祀跡	弥生～近世	26	岩瀧ノ鼻遺跡B	散布地	古墳
3	八田神母谷遺跡	祭祀跡・集落跡	縄文～近世	27	新田遺跡	散布地	古墳
4	波川北遺跡	散布地	弥生	28	観音ノ鼻遺跡	散布地	古墳
5	宮ノ東遺跡	散布地	弥生	29	観音ノ平遺跡	散布地	古墳
6	鎌田城跡	城館跡	中世	30	清滝愛宕山遺跡	散布地	古墳
7	月田上神社遺跡	祭祀遺跡	近世	31	東灘沖屋敷遺跡	散布地	古墳・中世
8	八ギ原遺跡	散布地	中世	32	居徳遺跡群	祭祀跡・集落跡	縄文～古代
9	門田遺跡	散布地	中世	33	天崎遺跡	集落跡	弥生～中世
10	寺門遺跡	散布地	弥生	34	曾我山城跡	城館跡	中世
11	次郎丸遺跡	散布地	弥生	35	人麻呂様城跡	城館跡	中世
12	天神遺跡	散布地	中世	36	八幡遺跡	散布地	古墳
13	天神溝田遺跡	散布地	弥生	37	御太子宮遺跡	散布地	中世
14	音竹城跡	城館跡	中世	38	八幡光本遺跡	散布地	古代
15	バーガ森北斜面遺跡	集落跡	弥生・中世	39	野田遺跡	散布地	縄文～中世
16	高海老遺跡	散布地	弥生	40	八田城跡	城館跡	中世
17	塔の向遺跡	散布地	弥生	41	奥谷遺跡	散布地	弥生
18	北山前遺跡	散布地	古墳	42	巖島遺跡	散布地	古代～中世
19	大デキ遺跡	散布地	縄文～古墳	43	八幡宮西ノ城跡	城館跡	中世
20	サジキ遺跡	散布地	弥生～中世	44	古市遺跡	散布地	中世
21	奥名遺跡	散布地	縄文	45	吉良屋敷跡	散布地	弥生
22	坂口遺跡	散布地	弥生	46	吉良城跡	城館跡	弥生
23	枝川3号古墳	古墳	古墳	47	西ノ芝遺跡	散布地	弥生
24	枝川2号古墳	古墳	古墳				

木舟が発見され新田遺跡と呼ばれている。

律令制の支配が進められ郡郷制が施行されると、この伊野町の多くは吾川郡の管轄下に入ったと見られる。当初吾川郡は8郷からなり、仁淀川の両側に拡大したが、承和8年(841)に折半され、仁淀川左岸が吾川郡、右岸が高岡郡とされた。「和名抄」に見える郷のうち、伊野町域の大半は吾川郡大野郷に属したと思われるが、西岸の波川付近は高岡郡の吾川郷に属したと考えられ、南部の八田地区を吾川郡桑原郷に入れる説も有る。枝川・池内は土佐郡朝倉郷に属したと見られる。

仁淀川沿いの自然堤防上に主として集落が発達すると、その核として神社が祀られる。神谷の天岩戸別安国玉主天神社は延喜式内社と推定され(土佐国式社考)、梶本神社の勧請は延暦12年(793)と伝えられる。

文治元年(1185)源頼朝の守護・地頭設置により、吾川郷は京都六条若宮八幡の別当職付属の所領とされた。吾川郷のうち、大野・仲村両郷は室町期以後、六条若宮八幡を管轄する京都の醍醐寺三宝院門跡の所領であった。弘長3年(1265)梶本神社に造立、奉納された八角形漆塗神輿には銘文が記され、国司・将軍家・領家・預所とその代官の繁栄を祈るためであった。

南北朝期には当地の在地領主層が二分して分裂抗争をしていた状況がある。南北朝の動乱を通じて、名主層はそれぞれ成長したが、室町期に守護領国制が崩壊すると、蓮池城(現土佐市)の大平氏が南部から勢力をのぼし、後本山郷(現本山町)の本山氏が勢力を南下させ、この地を支配するに至った。本山氏は朝倉城(現高知市)を拠点とし、弘治~永禄年間(1550~70)頃には、高岡郡東部・吾川郡南部の仁淀川沿岸地域を支配化に組み入れた。本山氏は天文9年(1540)に弘岡(現春野町)の吉良氏を滅ぼし、蓮池を本拠とする大平氏を圧迫して仁淀川下流を占領した。長宗我部氏が本山氏を永禄6年(1563)朝倉城より本山郷に駆逐してからは、当地も長宗我部氏の支配化に組み入れられ、長宗我部元親の弟吉良親貞の所領となった。

長宗我部氏は天正16~19年(1588~1591)にかけて当地方の検地を行い、吉良氏の滅亡後に伊野村・八田村・下分の再検地を慶長2年(1597)に行っており、同年の大野郷伊野村・八田之村・下分・楠瀬村・神谷村・小野村・勝賀瀬村の各地検帳が残っている。

江戸時代になると、寛保3年(1743)の郷村帳に見える伊野町域の村々は、吾川郡伊野・八田・神谷・賀田・小野・鹿敷・柳ノ瀬・柏原・楠ノ瀬・勝賀瀬、土佐郡真木(槇)・枝川・池ノ内・中追・成山、高岡郡鎌田・大内・波川の18ヶ村を数える。開発事業では野中兼山による鎌田堰・八田堰の構築がある。仁淀川本流をせき止め、高岡井筋・弘岡井筋に導いた。伊野町域は仁淀川の上流に位置するため、兼山の事業は伊野に集中していたが、用水の恩恵はほとんど当地域にはなかった。

中世から近世にかけての、これら社会情勢の変化が、八田奈呂遺跡における集落構成にも大きく影響を与えている。

〔参考文献〕

『高知の地名』日本歴史地名大系40巻 平凡社 1983年

『39 高知県』角川日本地名大辞典 角川書店 1986年

『伊野町史』 1973年

第 章 調査に至る経過と調査の方法

1 . 調査に至る経過

四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設工事に伴い、事前に高知県教育委員会事務局文化振興課（現、文化財保護室）と日本道路公団高松建設局（現、四国支社）高知工事事務所との間で、工事範囲内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議・調整が行われ、伊野町・土佐市・須崎市の建設工事予定地内について必要と判断される場所について試掘調査を実施することとなった。

伊野町八田地区については、平成7年4月1日付けで、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターと日本道路公団高松建設局との間で、「平成7年度四国横断自動車道（南国～伊野及び伊野～須崎）埋蔵文化財発掘調査委託契約」が締結された。

伊野町八田地区は、調査の都合上、伊野町八田地区1区（現、八田奈呂遺跡）、八田地区2区（現、八田栃谷遺跡）、八田地区3区（現、八田神母谷遺跡）、八田地区4区の計4箇所について、試掘調査が計画された。

平成7年8月21日から試掘調査に関する事前の現地調査が行われ、平成7年9月4日から八田地区試掘調査準備が現地で始まり、平成7年9月20日から八田地区試掘調査機械掘削が開始された。この段階で、八田地区4区については、諸事情により試掘は実施できず、調査時期を次年度とし、八田地区3区から試掘調査に着手した。

平成7年12月、八田地区3区については一部を除き試掘調査を実施、完了し、協議・調整の結果、工事との関係から、先行して本調査を実施することになった。

平成7年12月15日八田地区3区本調査着手、平成7年12月18日八田地区3区本調査掘削開始。

八田地区3区の本調査と同時に並行して、八田地区2区、八田地区1区の試掘調査も実施された。

以上の試掘調査の結果、各調査区いずれからも遺構及び遺物が発見され、八田地区1区は「八田奈呂遺跡」、八田地区2区は「八田栃谷遺跡」、八田地区3区は「八田神母谷遺跡」ということで遺跡に指定された。八田地区4区については、後の試掘調査の結果、遺跡の存在は認められず、本調査の必要はないということになった。

八田神母谷遺跡の本調査及び八田栃谷遺跡、八田奈呂遺跡の試掘調査は続けて実施し、平成8年3月31日終了し、平成8年4月1日付けの「平成8年度四国横断自動車道（南国～伊野及び伊野～須崎）埋蔵文化財発掘調査委託契約」により、平成8年4月より、八田奈呂遺跡・八田栃谷遺跡・八田神母谷遺跡について本調査が実施された。八田栃谷遺跡については工事との関係上、試掘調査の際に拡張して調査を実施し、本調査の多くをほぼ完了した。八田神母谷遺跡の本調査は平成9年2月28日終了した。八田奈呂遺跡の本調査は平成9年3月31日まで実施し、一部次年度へ継続して行うこととなった。平成9年4月1日付けの埋蔵文化財調査委託契約により、平成9年4月より平成9年5月26日まで実施し調査を完了した。

2 . 調査の方法

八田奈呂遺跡は、当初、調査範囲である伊野町八田地区を4地区に設定して、それぞれの調査区について試掘調査を実施した。まず、試掘調査については、基本的には一つが5 m × 5 mの試掘トレンチとし、現地の地形等の諸条件に応じたトレンチを設定し、パワーショベル及び人力により表土を除去した後、人力により遺物包含層の掘削及び遺構の検出・掘削を行った。検出遺構・遺物の出土状況及び土層については写真撮影を行い、測量により平面図・断面図を作成した。これらの試掘調査の成果を基礎資料とし本調査の範囲を設定し、本調査を実施した。

本調査については、調査範囲に調査区を設定し区分したうえで、それぞれ、除草・伐採を行い、表土等をパワーショベルにより掘削した後、遺構包含層を人力により掘り下げ、遺構・遺物の検出作業を進めた。検出遺構の完掘、出土遺物の取り上げを行い調査を進めた。検出遺構・遺物出土状況・土層は写真撮影を行い、測量により平面図・断面図を作成することにより、写真・図面の形で記録を残した。

測量については、試掘は既存する基準点・水準点を利用して、公共座標を基に、また、本調査ではさらに、それぞれの調査区内に新たに基準点を設置し公共座標を基本に実施した。

なお、調査は、調査範囲全体について各調査区の状況に応じて、調査区ごとに、基本的に第1次の検出作業を実施し大部分の調査区において調査が終了した段階で、さらに下層の第2次の検出作業を実施し第1検出面同様に調査を進め、その後その下層の第3次の検出作業を実施し、第3検出面の調査を進めた。その他部分的に確認的な調査を実施した。

第 章 調査成果





图3 八田奈呂遺跡位置图

第 章 調査成果

1. 調査区の概要と基本層序

八田奈呂遺跡は仁淀川の東岸、吾川郡伊野町と吾川郡春野町の町境になる山の北側で、谷地形部分の緩斜面に所在する。南北両側を谷に挟まれた尾根部から低湿地にかけて展開している。当遺跡は伊野町八田地区1区・2区試掘調査における八田地区1区であり、38箇所を試掘トレンチの内21箇所が該当する。これらの試掘調査の結果、本調査が必要と考えられる部分について調査区を設定し本調査を実施した。

調査は調査区内の植物の伐採・除草を行い、その後現地の現在地形を基本にし、調査区1～6区の6箇所の調査区、調査区11～26区の16箇所の調査区、調査区31区の計23箇所の調査区を設定し本調査を開始した。その内、調査区11～26区と31区の調査成果については、既に平成11年3月に調査報告書『八田奈呂遺跡』を刊行しており、従って本報告書では1～6区の6箇所の調査区についての調査成果を報告する。

調査区1～6区は全調査区の中央部より北側に位置し、標高は調査区上部では海拔約27m、下部では約16mを測る。基本層序は、まず表土（耕作土）・旧耕作土等、次に灰褐色土となる。調査区上部は比較的堆積が少なく、また耕作の為の掘削等により遺構面が掘削されて、場所によればこの次に直に検出面が現われる部分も見られた。調査区下部ではこの下層に暗灰褐色土があり、微妙な色調の変化があった。調査区上部は以上の土層の下層に、地山あるいは黄褐色系の砂礫を多量に含む堆積の繰り返しが見られた。下部ではこの黄褐色系の土層は徐々に深い部分に潜り込んでいく。上部で茶褐色の検出面に見られた遺構は、下部では暗灰褐色系小礫混じりの場所に多く、土坑・溝・ピット等の遺構を検出した。

以下、各調査区ごとに遺構の検出状況並びに出土した遺物について記す。

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 5区

当調査区では、中世の遺構面を2面検出した。近世検出面については、近代の土地造成等により消滅し、検出できなかった。そのため、上層の中世遺構面については、さらに上層の生活面からの掘り込み遺構と共に同一面で検出し、同時に異なる時期の遺構を掘削することになった。遺構としては、土坑、溝、ピット等が存在し、自然の落ち込みと考えられる部分も見られた。下層の中世遺構面については、南北にトレンチを設置し調査した結果、遺構は希少であり遺物も含まれていないことや時間的な制約もあり、全面を開けての検出は断念した。さらに下層の調査については、当調査区中央部から南隣の6区に向かって深く落ち込んでおり、調査が困難な状況であり実施できていない。

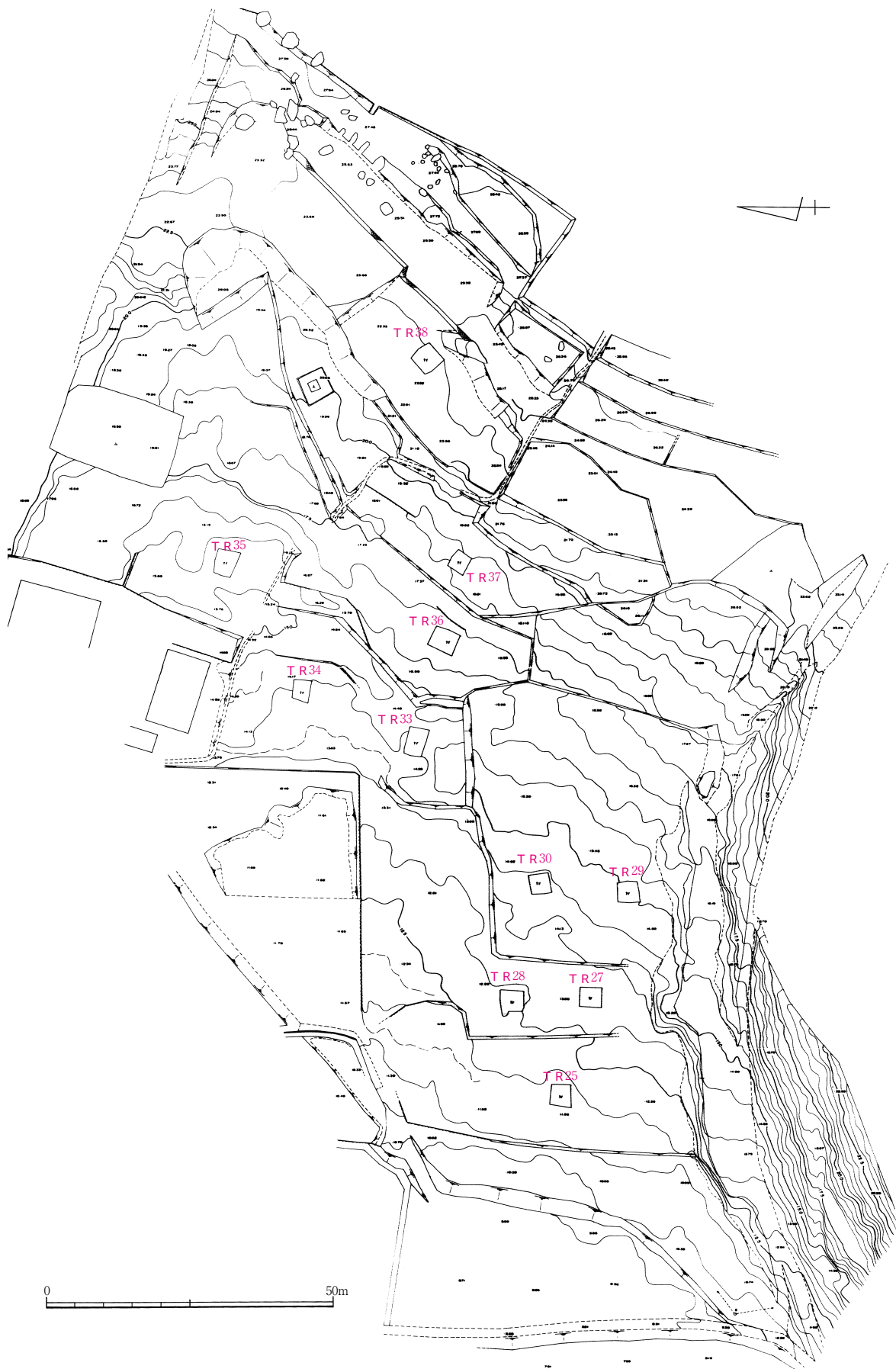


図4 調査区試掘位置図

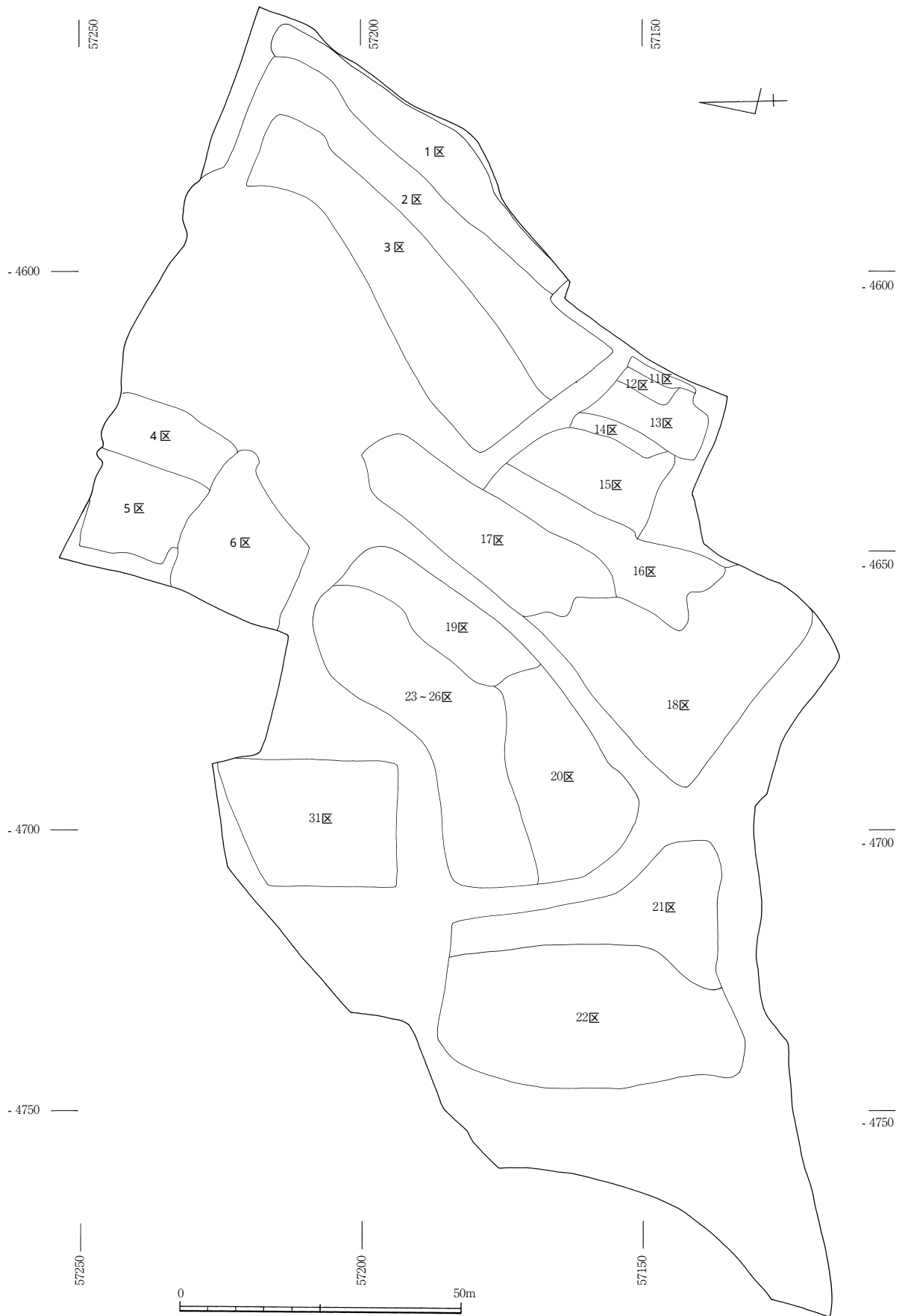
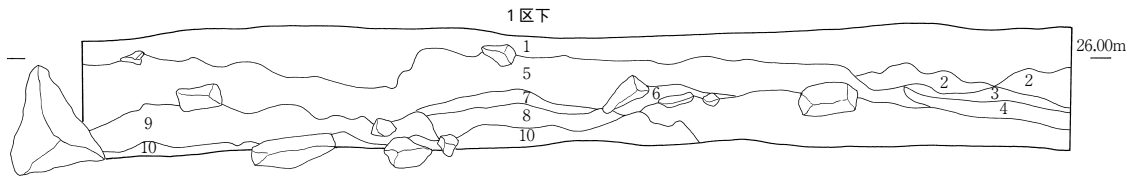
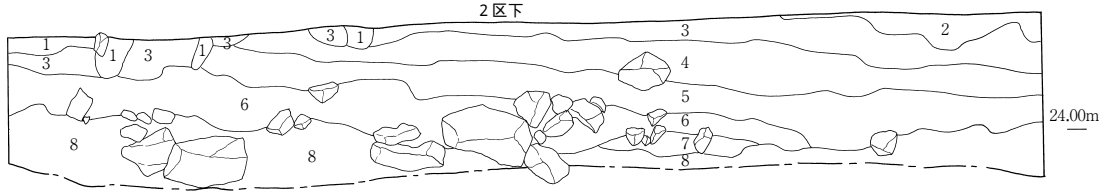


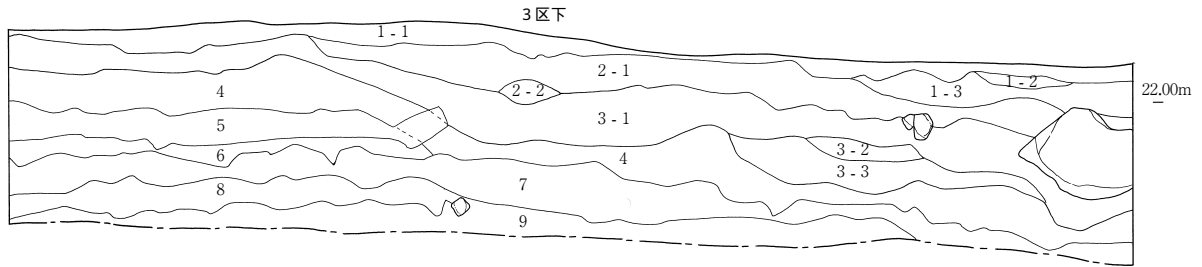
図5 調査区位置図



- | | |
|------------------|--------------|
| 1 灰褐色土 (黄色砂岩小礫混) | 6 暗灰褐色土 |
| 2 茶灰褐色土 | 7 暗茶灰褐色土 |
| 3 黑色土 | 8 暗茶色土 |
| 4 黑茶色土 | 9 明茶色土 |
| 5 灰褐色土 | 10 明茶色土 (礫混) |



- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 明褐色土 | 5 黑灰茶色土 (黄色砂岩小礫混) |
| 2 灰褐色土 | 6 茶灰褐色土 (石灰岩小礫混) |
| 3 褐色土 | 7 茶褐色土 (石灰岩小礫混) |
| 4 黑灰褐色土 (黄色砂岩小礫混) | 8 明茶色礫土 |



- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1-1 暗灰褐色土 | 4 灰褐色土 (石灰岩等小礫多混) |
| 1-2 黑灰褐色土 | 5 灰褐色土 |
| 1-3 褐色土 | 6 明褐色土 |
| 2-1 暗灰色土 (茶色小粒砂岩風化礫混) | 7 黑色土 (茶色砂岩小礫少混) |
| 2-2 灰色礫土 | 8 淡茶灰色土 (黄色砂岩少礫混) |
| 3-1 灰褐色土 (茶色小粒砂岩多混) | 9 淡茶灰色土 |
| 3-2 灰褐色土 (粘性有) | |
| 3-3 灰褐色土 (小礫小粒砂岩混) | |



图6 土层断面图 (1~3区)



图 7 5区検出遺構全体図(第1検出面)

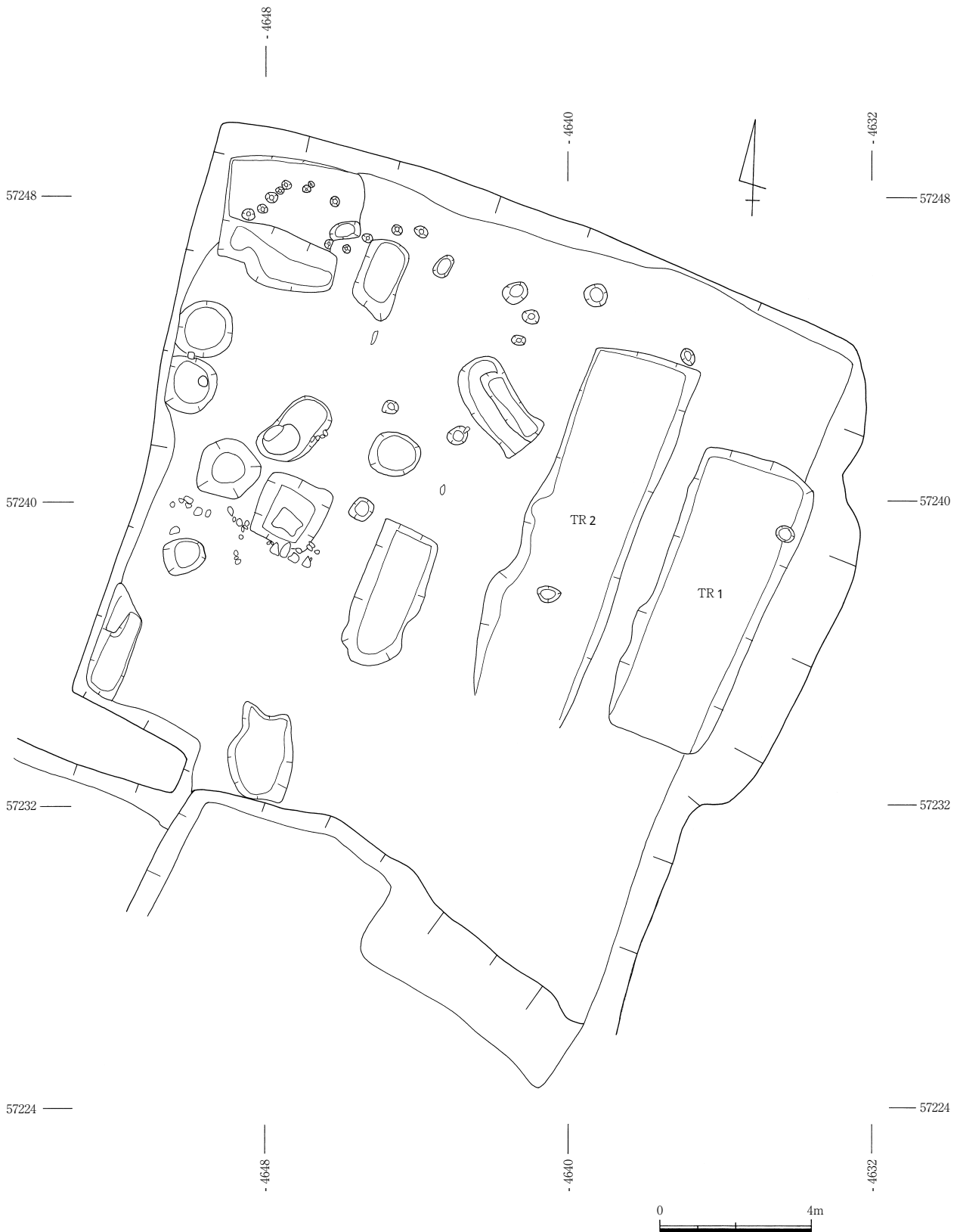


図8 5区検出遺構全体図(第2検出面)

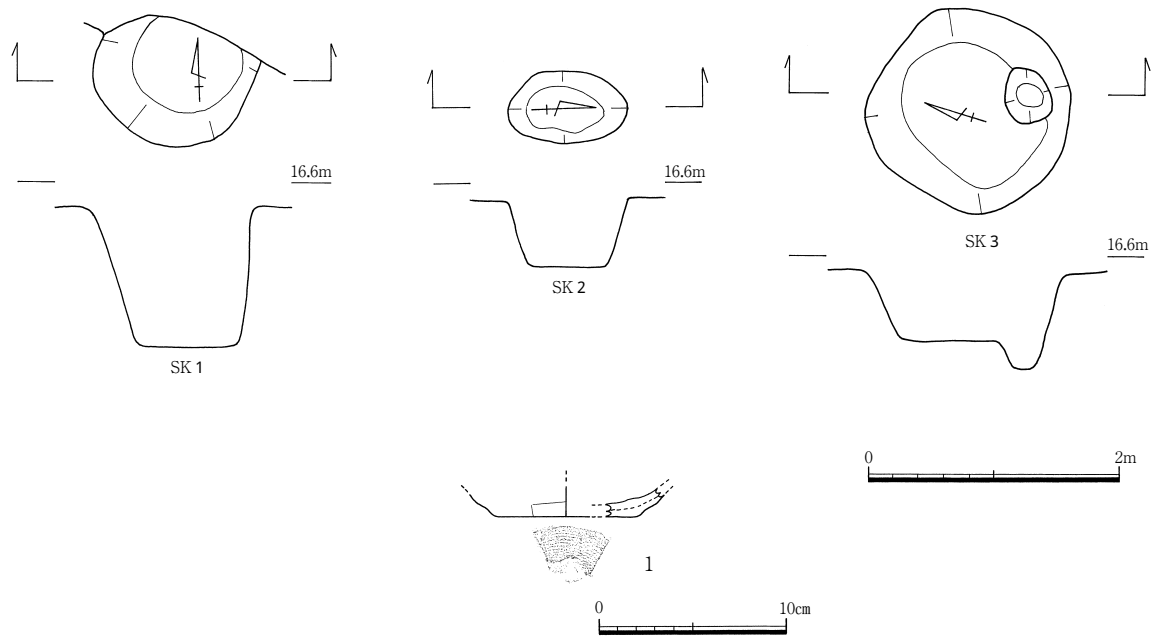


図9 SK 1～3平面図・エレベーション図及びSK 3出土遺物実測図

遺構埋土については、後世の削平、造成等の影響を受けて、検出面直上の遺物包含層と同質土で構成されており、ほぼ単一層である。

5区の出土遺物は、細片を含めて総点数約3200点である。内訳は、中世～近世の土器（土師質、須恵質、瓦質）2300点、輸入陶磁器31点、国産陶磁器830点、石製品15点、金属製品31点、その他（瓦片等）50点であるが、細片が多数で図示できたのは5区では113点に留まる。とりわけ包含層からの出土が多い。遺構からの出土遺物は、遺構によってバラつきがあるが、SD 1やSK 6・8・11・13では比較的まとまった量の出土が見られる。

土坑

SK 1

調査区中央部の北端やや東寄りに位置し、北側の一部が調査区外に出ている。全体の形は不明であるが、直径1.16m前後の円形に近い平面形を呈するものと予想される。深さは約1.10mを測る。断面形は逆台形で、壁は急に立ち上がる。黄褐色の岩盤状の面を掘り込んで存在する。

出土遺物はない。

SK 2

調査区東端中央部に位置する。平面形は長軸0.92m、短軸0.56mの不整楕円形を呈する。長軸方向はほぼ北方向で、深さは52cmを測る。

出土遺物は磁器染付口縁部2点、鉄釉陶器底部1点、同細片2点が出土している。

SK 3

調査区東部に位置し、SK 2の北にある。長軸1.52m、短軸1.44mの円形に近い平面形で、深さは54cmを測る。床面は平坦である。断面形は逆台形を呈し、南端でピットと切り合っているが、先後関係は不明である。

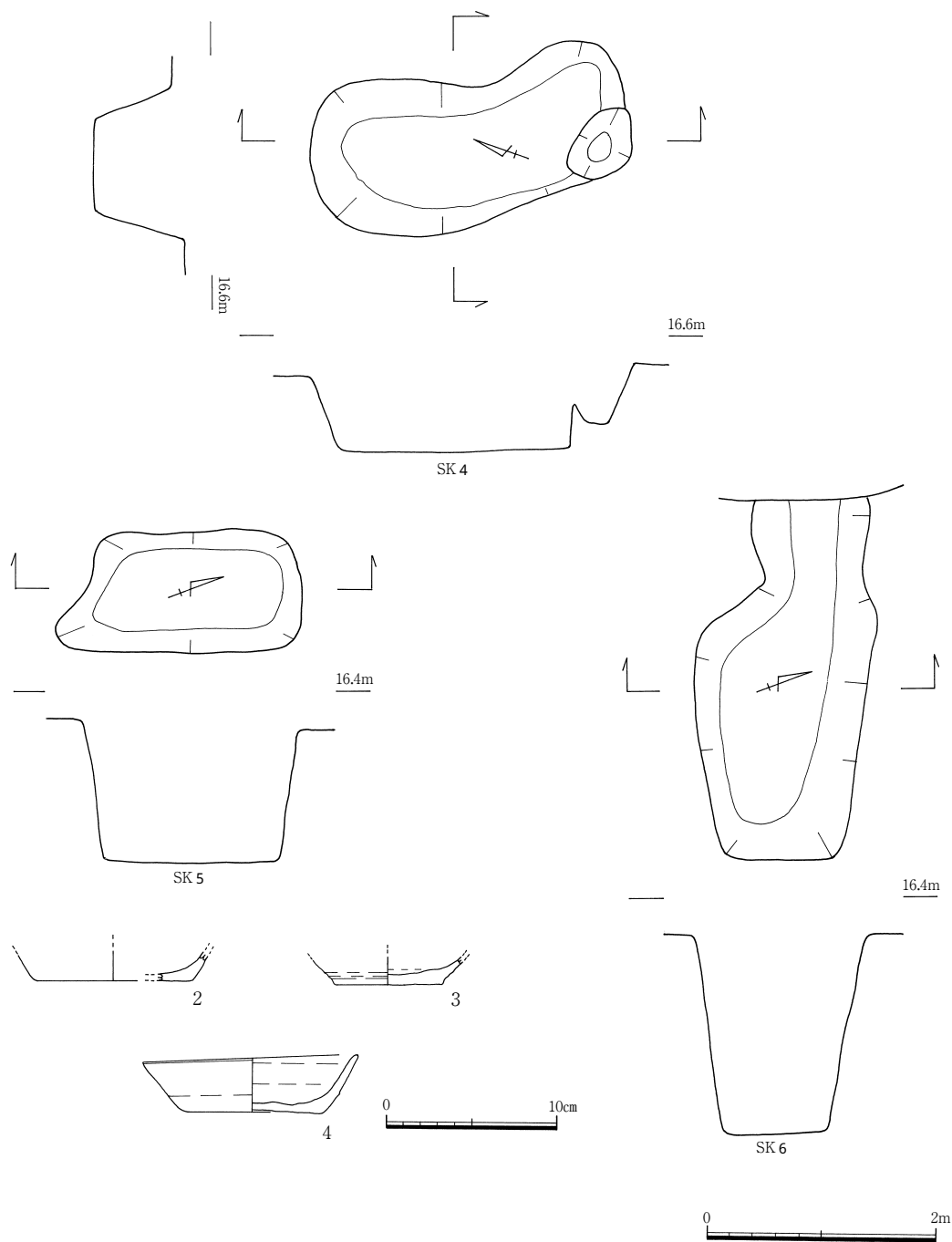


図10 SK 4 ~ 6 平面図・エレベーション図及びSK 6 出土遺物実測図

出土遺物は土師器杯の底部(1)と土師器口縁部細片 1 点が出土している。1 は底部に糸切痕が見られる。

SK 4

調査区中央部北寄りに位置する。長軸2.80m、短軸1.08mの楕円形を呈し、深さは約35cmを測る。長軸方向はN - 35° - Wである。断面形は概ね逆台形で、床面は平坦面を成す。南隅のピットは後世のものと考えられる。

出土遺物はない。

S K 5

調査区北部やや西寄りに位置する。東西1.00m、南北1.88mの長方形を呈しており、南東の隅が突出している。深さは1.23mを測る。長軸方向はN - 20° - Eでほぼ南北方向といえる。底部はほぼ平らな面を成し、壁は急に立ち上がる。

埋土中より磁器染付輪花小皿1点、土師器口縁部が1点出土している。

S K 6

調査区の北西端に位置する。調査区西壁外に伸びており、全体の形は不明である。細長い溝状を呈しており、検出された部分は東西3.08m、南北最大幅1.44mの規模を持ち、検出面からの深さは1.64mを測る。長軸方向はN - 70° - Wの東西方向である。底部はほぼ平らな面を成し、壁は急に立ち上がり逆台形を成す。

出土遺物は比較的多く、土師器細片155点、須恵器底部1点、瓦質羽釜口縁部1点の他細片3点が出土しているが、大部分が細片であり摩耗も激しい。図示できたのは2～4の土師器杯底部で、4はほぼ完形品である。

S K 7

調査区中央部に位置し、S D 1の北側ラインに近接する。平面形は隅丸方形で一辺90cm前後の規模を有し、深さは54cmを測る土坑である。断面形は逆台形で、底部はほぼ平坦面を成す。

出土遺物は土師器細片10点、瓦片2点が出土しているが図示できるものはない。

S K 8

調査区中央部に位置する。平面形は直径約1.26mの不整円形を呈し、深さは1.44mを測る。断面は逆台形状に立ち上がり、床面は平坦面を成す。

出土遺物は多量で、大きく分類すると、近世陶磁器、鉄製品、石製品に分けられる。図示できたもので、磁器は5～8、10～13の8点である。5は瀬戸・美濃産の染付端反り碗、6は能茶山産の染付碗、7は吹墨染付小碗、8は染付小杯、10は肥前系白磁小杯で18世紀末～幕末のものである。11は染付輪花小皿、12は染付徳利、13は戸車である。磁器は他にも5と同じ模様意匠の碗、放射状菊皿など細片を含めて6点出土している。陶器は9、14～17の5点である。9は灯明皿上皿、14は灰釉広東形碗でS K 13と接合関係にあったもの、15は甕の底部で鉄釉を施したもの、16は堺産播鉢の口縁部、17は肥前産武雄系の火入れであり、T R 2と接合関係にあったものである。陶器は他に灰釉碗4点、灯明皿2点、播鉢3点、瓶類1点等細片を含め23点が出土している。金属製品としては18の刀装具（柄頭）、20の煙管吸口が、石製品は19の砂岩製砥石が出土している。その他図示できなかったもので、龍泉窯の青磁細片1点、須恵器鉢類細片1点、瓦細片が34点出土している。

S K 9

調査区西部に位置し、S K 12、S D 1に近接する土坑である。平面形は楕円形を呈し、長軸1.96m、短軸1.04m、深さ38cmを測る。長軸方向は南北方向N - 38° - Eである。断面は北部は逆台形に立ち上がり、南部はテラス状の段を有する。長軸0.88m、0.66mの楕円形のハンダによる床面が2面残存する。

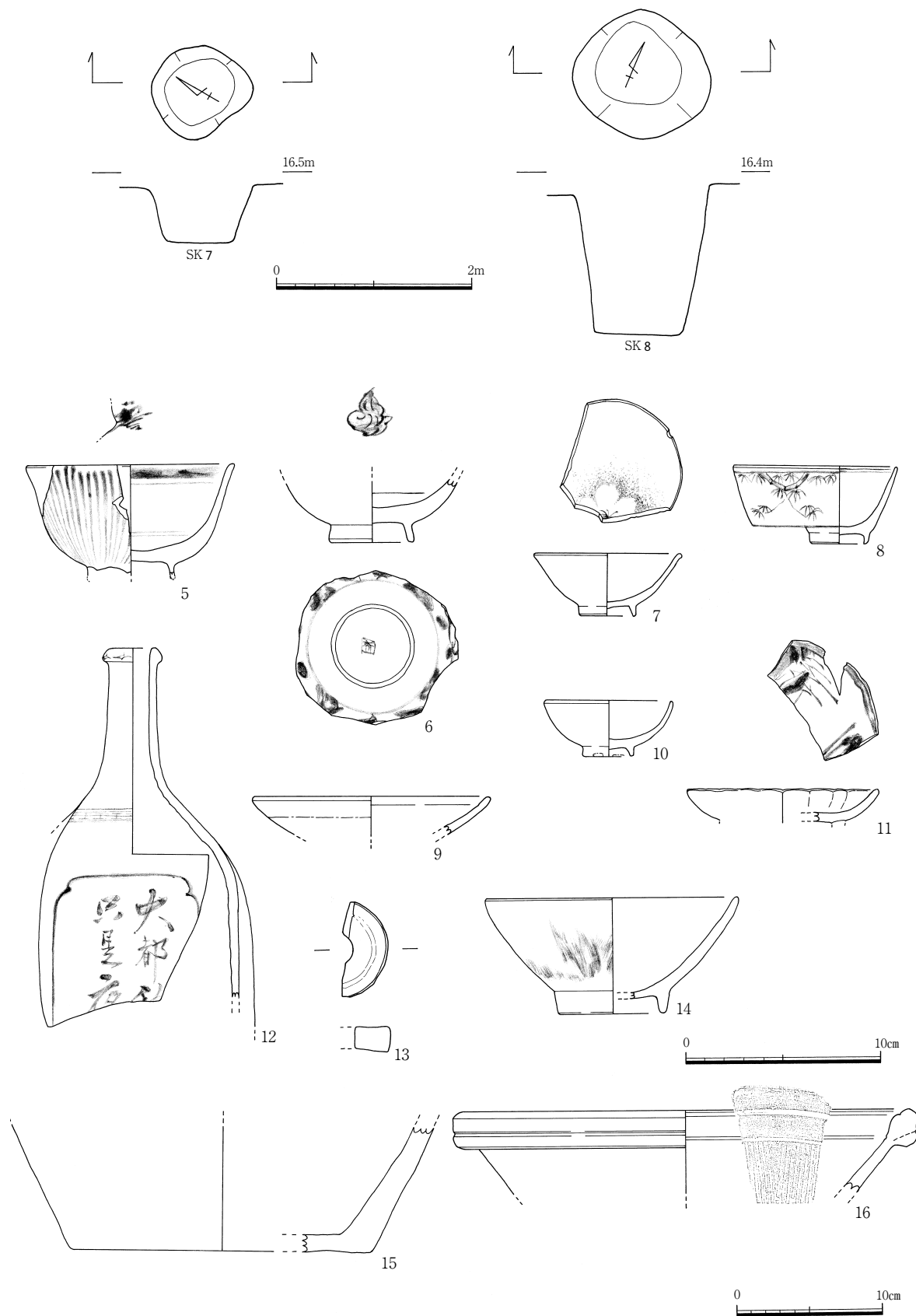


図11 SK 7・8 平面図・エレベーション図及びSK 8 出土遺物実測図(1)

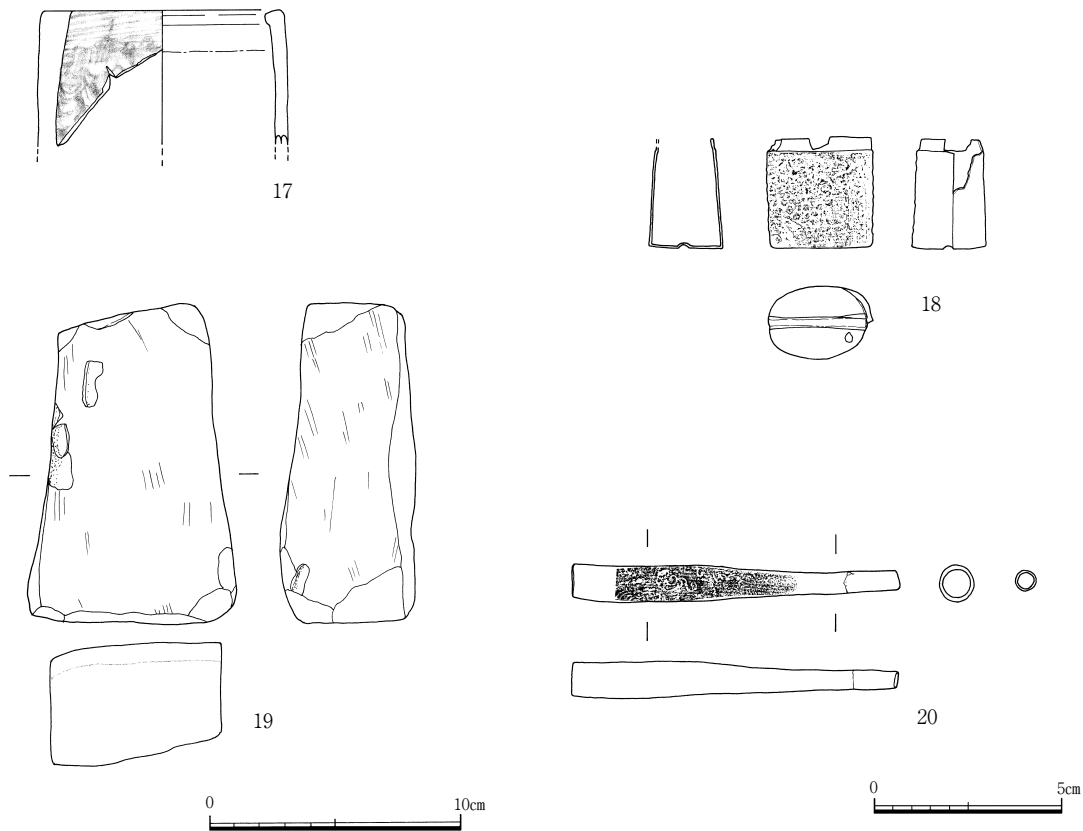


図12 SK 8 出土遺物実測図(2)

出土遺物は土師器細片 4 点、灰釉陶器細片 1 点が出土したが図示できるものはない。

S K 10

調査区西端やや北寄りに位置し、S K 11の北に隣接するハンダ土抗である。平面形態は不整円形を呈し、直径約1.45m、深さ57cmを測る。断面は逆台形で東側壁は緩やかに立ち上がる。床面及び側壁はハンダで固めている。

出土遺物は石英粗面岩製砥石(29)の他、土師質七輪細片他3点、磁器色絵小皿口縁部3点、陶胎染付酒徳利細片1点、瓦片1点が出土している。

S K 11

調査区西端やや北寄りに位置し、S K 10の南に隣接するハンダ土抗である。平面形態はS K 10と同様不整円形を呈し、直径約1.40m、深さ76cmを測る。断面は逆台形で、壁は急に立ち上がる。床面及び側壁はハンダで固めている。

出土遺物はS K 10よりも格段に多く出土している。埋土中より土師器小杯底部(21)、陶器呉器形碗(22)、陶胎染付酒徳利(23)、瀬戸・美濃産の陶器染付碗(24)、土師質無耳・浅形焙烙鍋口縁部(25)、鉄釉陶器端反り形小皿(26)、陶器刷毛目釉描き鉢底部(27)、磁器半筒形有三足香炉(28)、細粒砂岩製砥石(30)が出土している。28の香炉は21区SE-Tと接合関係にあった。その他、土師器は口縁部3点、底部8点、細片64点、磁器は色絵小皿、輪花小鉢他細片を含め7点、陶器は瀬戸・美濃染付碗、灰釉端反り碗、火鉢、堺播鉢等の口縁部13点、台付き灯明具、鉄釉皿、白土塗皿等の底部5点、細片24点、瓦質火入れ口縁部2点、軟質陶器の落とし蓋細片1点、青磁

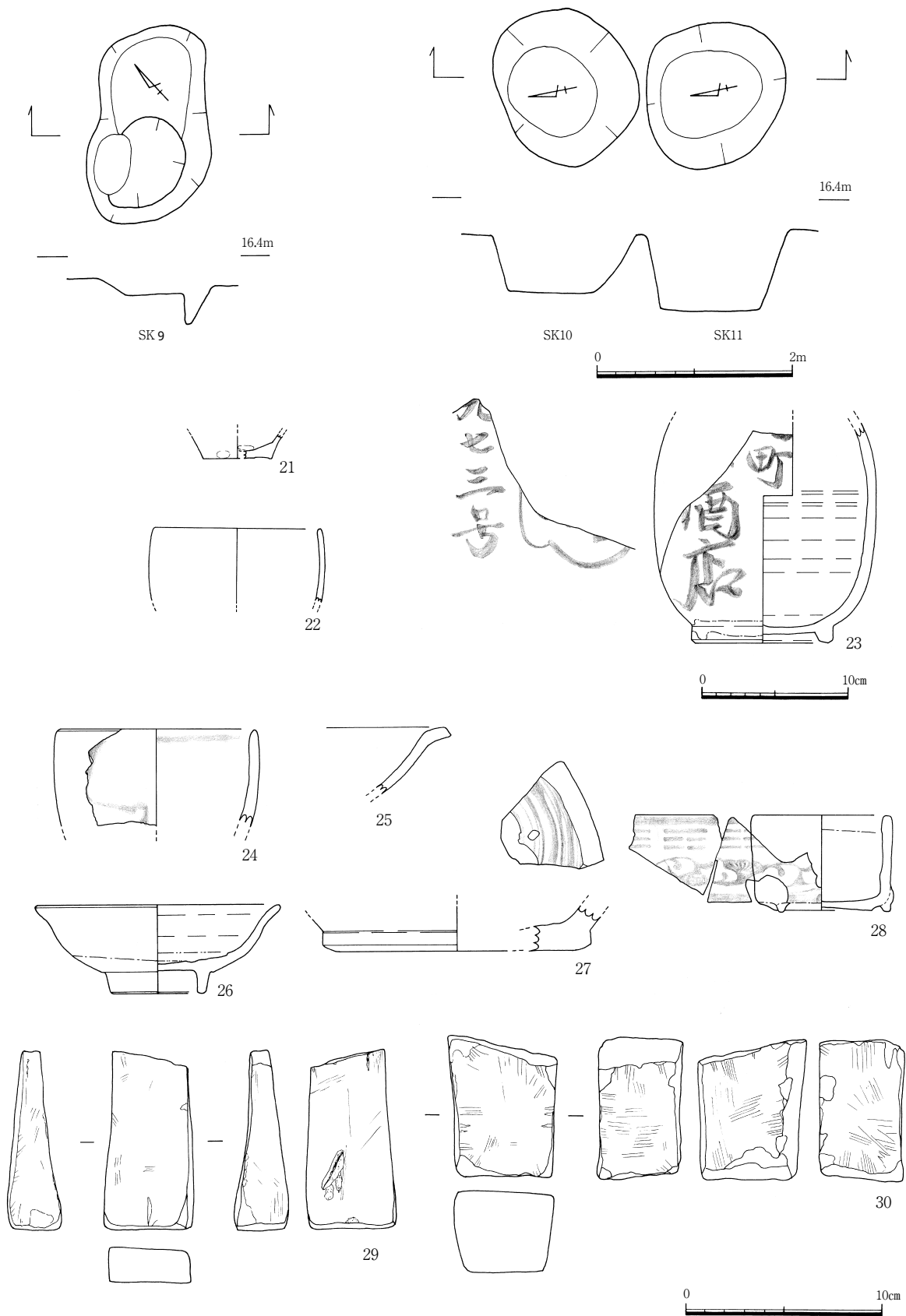


図13 SK9～11平面図・エレベーション図及びSK10(29)・SK11(21～28・30)出土遺物実測図

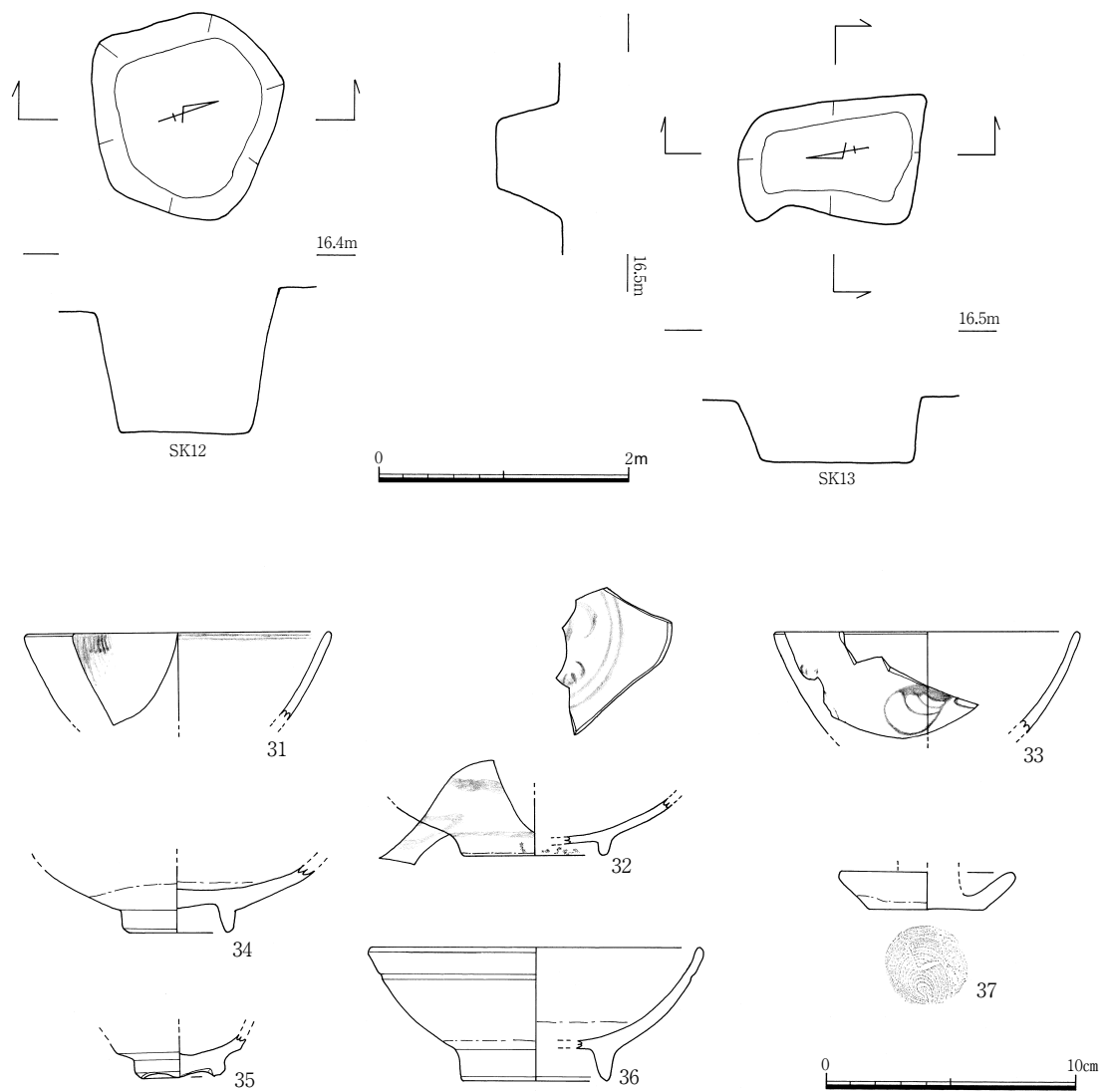


図14 SK12・13平面図・エレベーション図及びSK12 (37)・SK13 (31~36) 出土遺物実測図

細片 1 点等多量に出土している。

SK 12

調査区西部に位置し、SD 1 を切って存在する。平面形は不整形を呈し、長軸1.56m、短軸1.44m、深さ97cmを測る。断面形は逆台形で、壁は急に立ち上がる。床面は平坦面を成す。

埋土中上層より土師器細片 1 点、焼締陶器鉢類細片 2 点、下層より磁器色絵銅版刷小皿 2 点、陶器台付灯明皿底部 (37) が出土している。磁器色絵銅版刷小皿はSK 10と、37はSK 8と接合関係にあった。

SK 13

調査区南部東寄りに位置し、長軸1.40m、短軸0.88m、深さ51cmの不整形長方形を呈する。長軸方向はN - 8° - Eの南北方向である。断面形は逆台形で、床面は平坦面を成す。

出土遺物は肥前系の磁器染付碗口縁部 (31)、景德鎮窯系の磁器染付小皿 (32)、関西系陶器の灰釉碗 (33)、鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿底部 (34)、丸形皿 (36)、灰釉陶器碗類底部 (35) が出土し

ている。33と36は包含層中のものと接合関係にあった。この他にも、土師器は口縁部2点、底部24点、細片8点、磁器は染付広東形碗底部、輪花皿口縁部他細片を含め22点、陶器は堺産播鉢、トビガンナを施した行平鍋の蓋、灰釉碗、鉄釉皿、灯明皿などの口縁部14点、底部11点、細片30点、瓦質鍋は口縁部2点、細片1点、青磁細片が2点、白磁口縁部細片が1点、鉄片・瓦片等が数点と器種・数量ともに比較的多く出土している。

S K 14

調査区中央部南寄りに位置し、S D 2の東に近接して存在する。北部はS D 1によって切られているが、前後関係は明確にできない。平面形は不整形で、南側に細長く溝状を呈している。南北確認長は2.80m、東西検出幅は北側0.80m、南側0.24m、検出面からの深さは41cmを測る。断面形は逆台形で壁は急に立ち上がる。

出土遺物はない。

S K 15

調査区南西部、S D 1の南に位置する。東西1.04m、南北0.88mの隅丸長方形を呈しており、深さは66cmを測る。軸方向は南北軸がN - 60° - E、東西軸がN - 35° - Wである。断面形は逆台形で床面は平坦面を成す。

埋土中より土師器細片2点、陶器灯明皿口縁部1点、細片1点が出土しているが、図示できるものはない。

S K 16

調査区中央部南端に位置する。南部分が一段下がった6区に続いており全体の形は不明であるが、残存する形状から楕円形を呈すると考えられる。南北確認長0.80m、東西幅1.08mの規模を持ち、床面はほぼ平坦である。西側に向かって深くなり、深さは西側で32cm、東側で18cmを測る。

出土遺物はいずれも細片であるが、土師器10点、焼締陶器瓶類2点が出土している。

S K 17

調査区南部やや西寄りに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、検出規模は長軸2.20m、短軸1.52m、深さ33cmを測る。S D 2の南に近接する土抗であり、主軸方向はN - 10° - Eの南北方向である。断面形は舟底形で、両端は緩やかに立ち上がる。

出土遺物は磁器腰張り形碗底部1点、砥石1点が出土しているのみである。

S K 18

調査区南西端に位置し、一部が調査区外に出ている。平面形は長軸2.40m、短軸1.00mの不整形を呈し、深さ72cmを測る。長軸方向は南北方向でN - 19° - Eである。断面形は概ね舟底形で南側は緩やかに立ち上がる。北コーナー部に半円形のテラスがある。

出土遺物は磁器染付小碗(38)、石英粗面岩製の砥石(39)が出土している。38は肥前系の湯飲み碗で18世紀末～19世紀のものである。その他土師器細片18点、磁器細片1点、陶器細片1点が出土している。

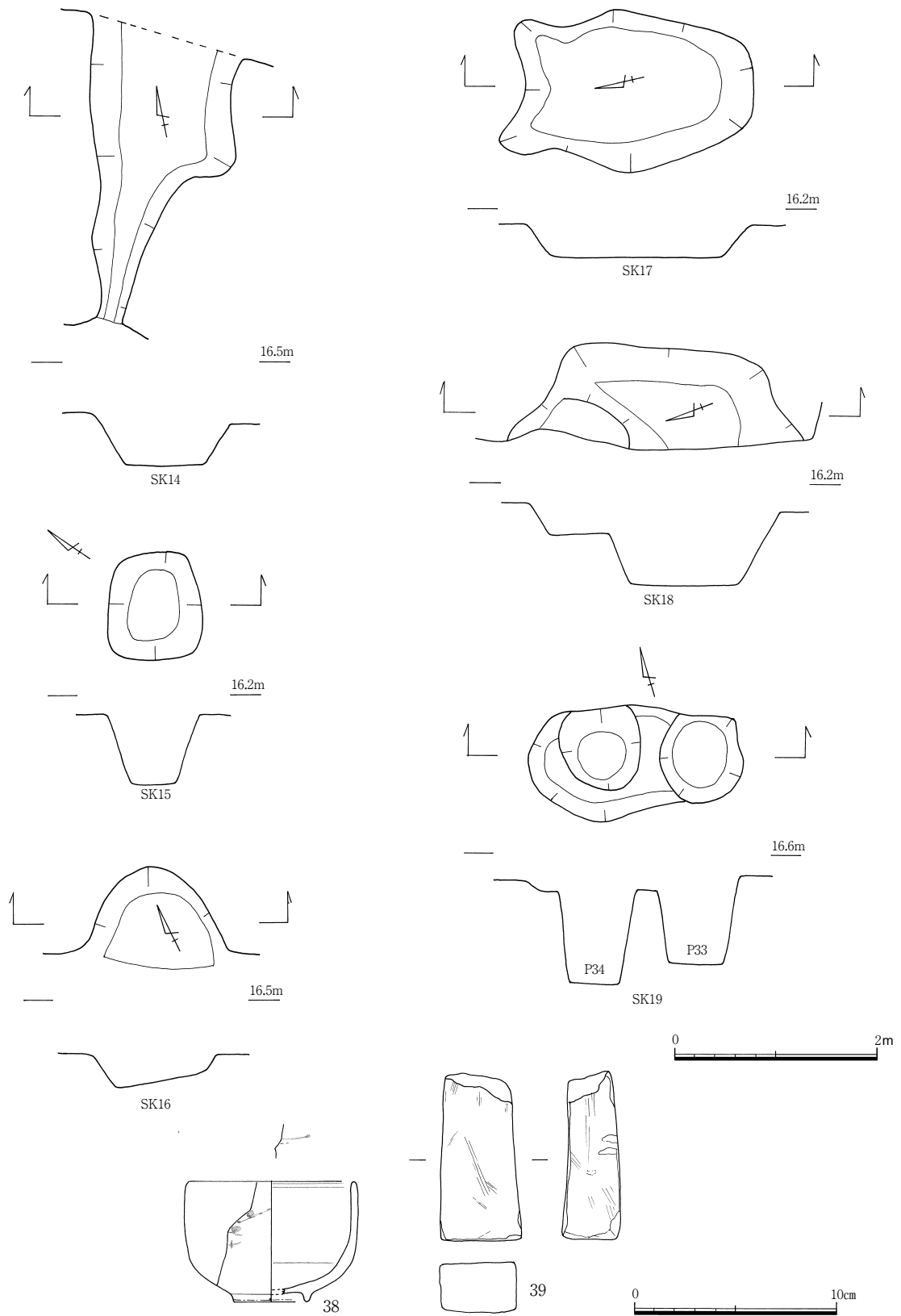


図15 SK14～19、P33・34 平面図・エレベーション図及びSK18出土遺物実測図

S K 19

調査区のほぼ中央に位置する。南端を P 33 に、北西側を P 34 に切られて全形を留めないが、平面形は長軸2.08m、短軸1.08mの不整楕円形と考えられる。主軸方向はN - 71° - W、深さは10～14cmである。

出土遺物はない。

溝

S D 1

調査区のほぼ中央部にあり、主軸方向はN - 71° - Wで、東から西方向に流れていたものと考えられる。確認延長は約15.60mであり、幅は2.00m前後、検出面からの深さは東側で0.85m、西側で1.39mを測る。北側外縁のライン上に S K 12、P 39 が掘り込まれて存在する。断面はほぼ逆台形を成す。南側外縁には部分的に20～40cm大の円礫列が残存し、S D 1 埋土中にも埋め戻しに伴うと考えられる滑落石が認められる。

出土遺物は土師器小皿口縁部(40)、同杯底部(41)、龍泉窯青磁碗口縁部(42)、陶器播鉢(43)である。42は外面に鎬蓮弁文を有する。その他、土師器は口縁部4点、底部39点、細片317点が、磁器は口縁部細片10点、染付腰張り湯飲み碗底部2点、肥前系色絵皿他細片8点が、陶器は陶胎染付碗及び灰釉碗の細片3点、備前系播鉢口縁部・底部・細片含め5点、焼締陶器鉢類細片9点が出土している。他にも瓦質釜の足部1点、同口縁部1点、東幡系須恵器コネ鉢底部1点、龍泉窯系青磁碗口縁部1点、細片5点が出土している。遺物はS D 1の東側部分に集中しており、西側部分では土師器類約40点が出土したのみである。

S D 2

調査区のほぼ中央部やや西寄りに存在し、北側をS D 1に、東側をS K 14に切られている。主軸方向はN - 9° - Eであり、ほぼ北から南に流れていたものと考えられる。

南部の東側外縁は近世の削平を受けており明確にできない。確認延長3.20m、幅約2.40m、深さは7～12cmを測る。

出土遺物はない。

ピット

ピットは48個検出したが、位置関係や深さ、埋土状況等から柱穴に該当しないものであり、各々が不規則に分布している。調査区東部に位置するピット群は埋土の堆積状況や出土遺物より概ね中世の遺構であり、中央部のピット群は暗灰褐色土の埋土や出土遺物より概ね近世の遺構と考えられる。北部山際のピット群は遺物の出土を確認できていないが、黄褐色粘質土を埋土として地山に掘り込まれていることや他調査区遺構の古い段階の土質と類似していることから、他ピット群よりさらに古い時期であり後世の削平を受けずに残った遺構と考えられる。さらに、S K 5・6の北側に連なって存在するピット群は柵列の可能性も考えられる。

このうち出土遺物の得られたピットは次の16個であり、多くが土師器細片である。これらのピットはS D 1 周辺部及び東部にかけて多く集中している。出土遺物として図示できたものは、P 24の土師器鍋(44)、P 33とP 36の土師器杯(45)(46)、P 37の鉄製弾丸(47)の4点である。

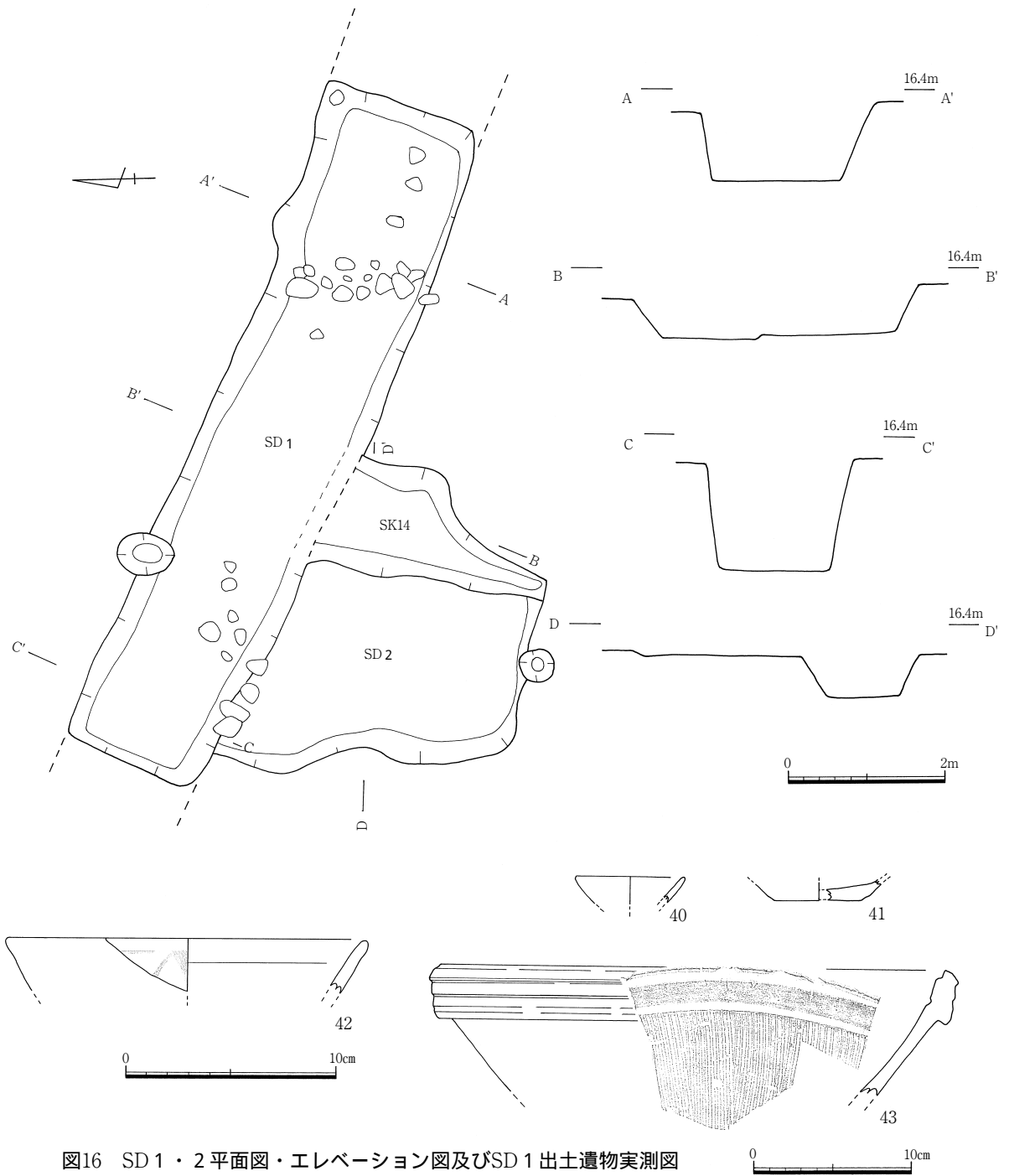


図16 SD1・2 平面図・エレベーション図及びSD1 出土遺物実測図

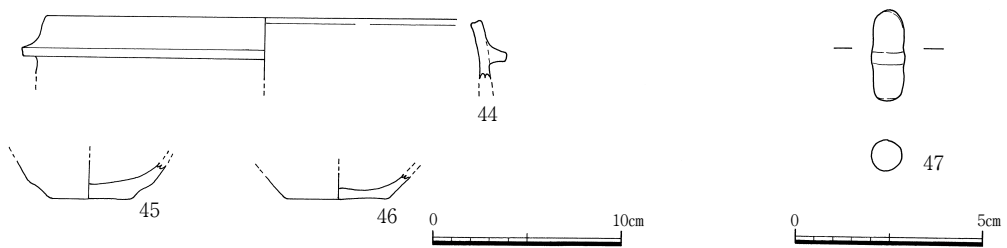


図17 P24 (44)、P33 (46)、P37 (47) 出土遺物実測図

P 22

調査区東部 S D 1 の北側に位置し、4 区に接近して存在する。平面形態は長径76cm、短径60cmの不整楕円形を呈し、深さ44cmを測る。埋土中より、土師器小皿底部1点、同杯底部1点が出土している。

P 24

調査区東部 S D 1 の北側に位置し、S K 3 に近接して存在する。平面形態は長径68cm、短径56cmの楕円形を呈し、深さ57cmを測る。埋土中より、土師器鍋口縁部(44)が出土している。44は口縁部端部より1cm下に断面が台形状の鏝を貼付したものである。この他、土師器口縁部1点、底部1点、細片35点が出土している。

P 25

調査区東部 S D 1 の北側に位置し、S K 3 に近接して存在する。平面形態は径48cmの円形を呈し、深さ53cmを測る。埋土中より、土師器底部1点が出土している。

P 27

調査区北東部に位置し、S K 3 の東隣に存在する。平面形態は長径76cm、短径40cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。埋土中より、土師器底部1点、細片2点が出土している。

P 28

調査区東部 S D 1 の北側に位置し、S K 2 に近接して存在する。平面形態は長径32cm、短径28cmの不整楕円形を呈し、深さ32cmを測る。埋土中より、東播系須恵器細片1点が出土している。

P 30

調査区中央部 S D 1 の北側に位置し、S K 19 の東に近接して存在する。平面形態は長径64cm、短径44cmの楕円形を呈し、深さ51cmを測る。埋土中より、土師器細片8点が出土している。

P 33

調査区中央部 S D 1 の北側に位置し、S K 19 を切って P 34 の東隣に存在する。平面形態は長軸80cm、短軸76cmの隅丸方形を呈し、深さ84cmを測る。埋土中より、土師器杯底部(45)の他、土師器底部1点、細片21点が出土している。

P 34

調査区中央部 S D 1 の北側に位置し、S K 19 を切って P 33 の西隣に存在する。平面形態はほぼ円形を呈し、深さ97cmを測る。埋土中より、土師器細片4点が出土している。

P 36

調査区中央部 S D 1 の北側に存在する。平面形態は長径52cm、短径44cmの楕円形を呈し、深さ48cmを測る。埋土中より、土師器小杯底部(46)の他、土師器口縁部1点、底部8点、細片41点が出土している。

P 37

調査区中央部 S D 1 の北側に位置し、S K 4 に近接して存在する。平面形態は長軸64cm、短軸48cmの楕円形を呈し、さらにピット状の落ち込みが東西隅に存在し、深さ40cm前後を測る。埋

土中より、外面銅鍍金鉛製の弾丸(47)の他、土師器細片1点、板状鉄製品7点が出土している。

P39

調査区中央部に位置し、SD1の北側ライン上に存在する。平面形態は径60cm前後のほぼ円形を呈し、深さ57cmを測る。埋土中より、土師器口縁部1点が出土している。

P40

調査区東端SD1の南側に位置し、P41に接近して存在する。平面形態は径40cmのほぼ円形を呈し、深さ38cmを測る。埋土中より、土師器細片2点が出土している。

P41

調査区東端SD1の南側に位置し、P40に接近して存在する。平面形態は長軸72cm、短軸48cmの不整形を呈し、深さ44cmを測る。埋土中より、土師器底部1点、細片13点、瓦質土器口縁部1点、同細片3点が出土している。

P43

調査区東端SD1の南側に位置し、P40・41の南に存在する。平面形態は径40cmの円形を呈し、深さ36cmを測る。埋土中より、土師器底部1点、土師器細片1点が出土している。

P44

調査区中央部SD1の南側SD2内に位置し、SK14に近接して存在する。平面形態は径56cmのほぼ円形を呈し、深さ36cmを測る。埋土中より、土師器細片2点、嬉野・内野山窯系陶器碗細片1点が出土している。

P45

調査区中央部SD1の南側に位置し、P44の南に存在する。平面形態は径約60cmのほぼ円形を呈し、深さ41cmを測る。埋土中より、磁器染付碗口縁部1点、陶器灰釉碗口縁部4点、底部1点、瓦片8点が出土している。

遺構間接合の遺物

出土遺構が違いながら接合可能であった遺物は2点である。SK8とSK13からの出土遺物(図11-14)と、SK8とSK12からの出土遺物(図14-37)であり、ほぼ同時期に埋蔵された可能性を示す遺物である。この他に遺構間ではないが、遺構(SK8、SK13、SD1)と包含層との接合関係にある遺物が3点、遺構(SK11)と当調査区より南西に120mほど下った調査区(21区)との接合関係にある遺物が1点、包含層と当調査区の南隣調査区(6区、19区)との接合関係にある遺物が2点存在する。これらは当調査区北東の谷からの出水、あるいは後世の土地造成作業、人の持ち運び等によって遺物が移動した可能性が考えられる。

遺構外出土の遺物

当調査区内には中世～近世(近代を含む)遺物包含層が存在した。これは近世以降の土地造成時に比較的標高の高い北側山際部分が削平を受け欠損し、中央より南にかけての盛り土部分を中心にして残ったものと考えられる。ここで図示するものは66点(図18～20)である。48～57は土師器、58・59は東播系須恵器、60は備前壺、61は石鍋、62・63は白磁、64～66は青磁、67～89は磁器、90～103と108は陶器、104と106は軟質陶器、105は瓦質土器、107と109は陶胎染付、110～113は金属製品である。

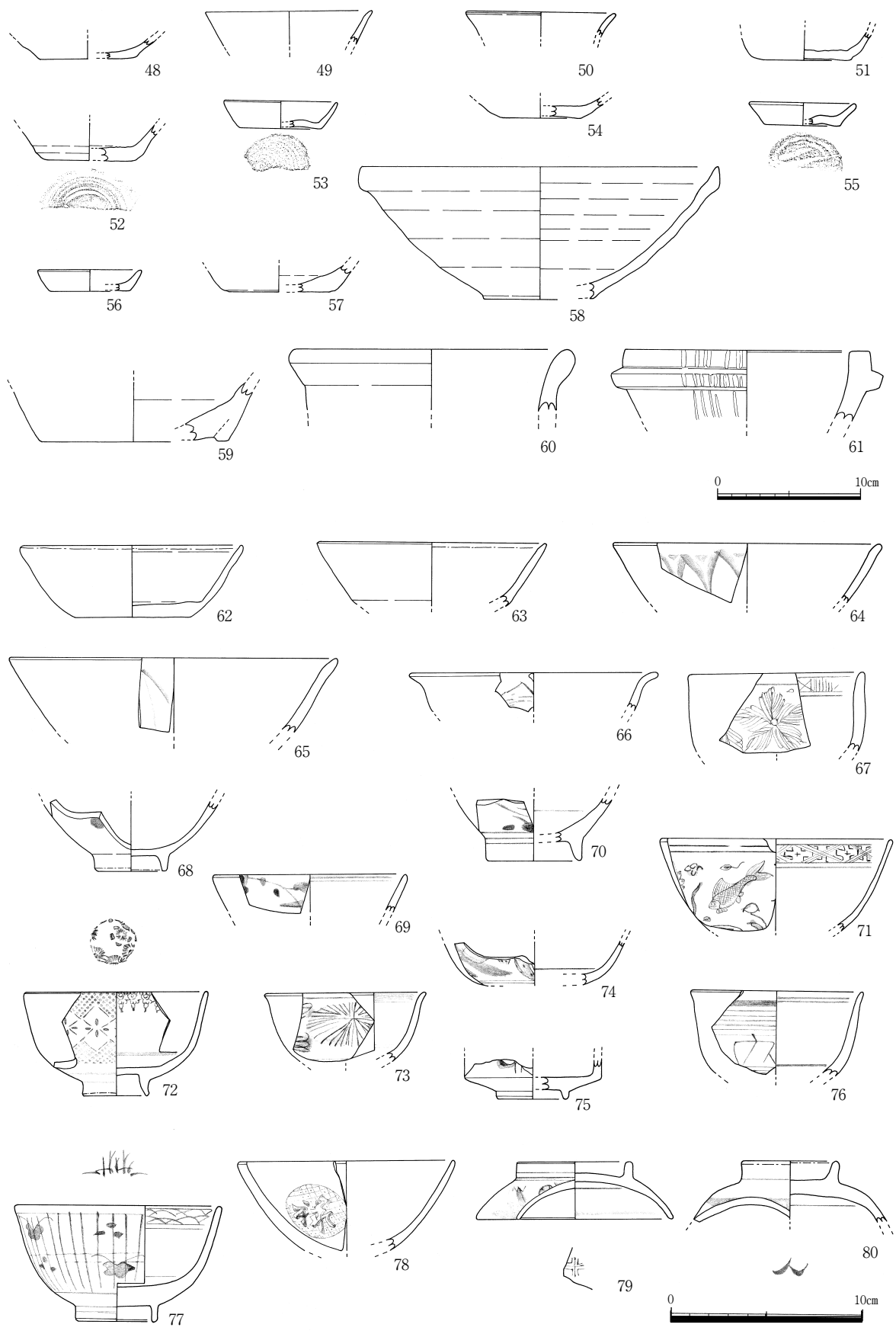


图18 5区遺構外出土遺物実測図(1)

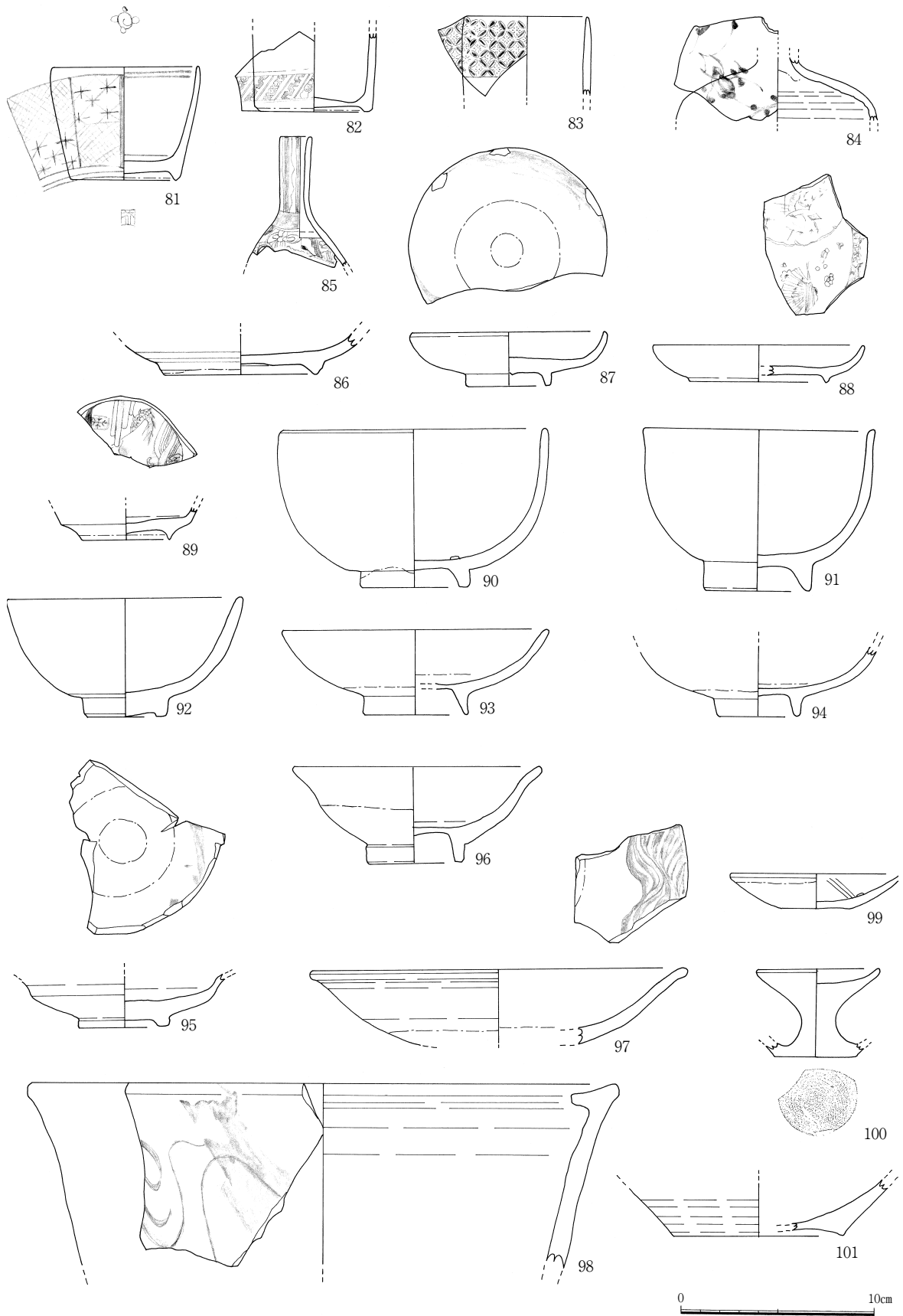


図19 5区遺構外出土遺物実測図(2)

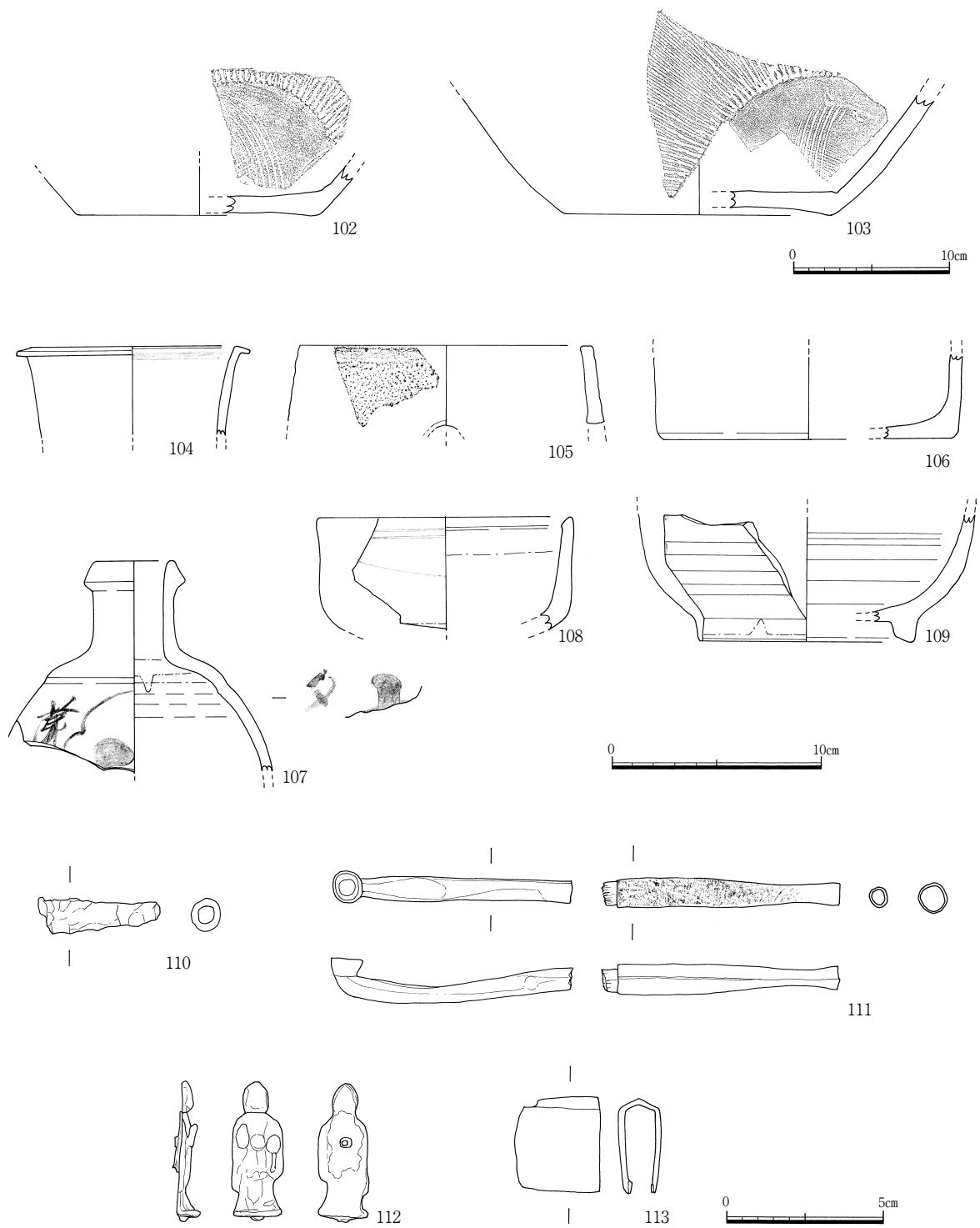


图20 5区遺構外出土遺物実測図(3)



(2) 6区

6区は4区と5区の南隣に存在する調査区である。当調査区は南に向かって深く落ち込んだ部分に位置しており、北西側の谷の上部からの流入堆積層が厚く遺構は検出できなかった。

出土遺物も上段の調査区からの流れ込み遺物とみられ、細片が大部分を占める。図示できたのは3点で、114~116はいずれも土師器杯である。図示できなかった出土遺物としては、土師器口縁部8点、同底部26点、同細片約100点、瓦質土器細片2点、磁器細片2点、陶器口縁部6点、同底部1点、同細片11点が出土している。

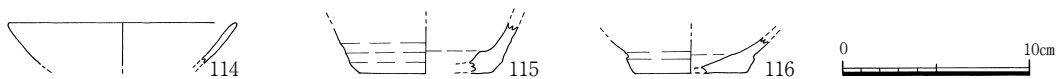


図21 6区遺構外出土遺物実測図

(3) 4区

当調査区では北部(N区)と石列(SW2)の東部分(S区)に区分して検出作業を実施した。S区は黒褐色土の部分(中世の遺物包含層)である。遺構としては近世の溝と思われるSD11の他、性格不明土坑SX1(集石含む)、石列SW1・2、土坑SK21~29、P51~102を検出した。さらに中央部石列付近から南部にかけて掘り下げて調査した結果、石列SW1から西に向けて傾斜しながらさらに南に連続して石列SW2に繋がる石列部分を検出した。(図28)

出土遺物は細片を含めて総点数約1300点である。内訳は中世~近世の土器(土師質、須恵質、瓦質)約1000点、輸入陶磁器20点、国産陶磁器約240点、石製品8点、金属製品6点、古銭5点、その他瓦細片等約20点である。とりわけ包含層からの出土が多く、細片が多数を占める。このうち図示できたのは103点である。遺構からの出土遺物はすべて調査区中央部から北部にかけての遺構からの出土であり、SD11では比較的まとまった量の出土が見られる。

土坑

SK21

調査区北部西端に位置する。集石遺構の北西に近接し、調査区北部では比較的規模の大きい土坑である。平面形は不整円形を呈し、直径約74cm、深さ86cmを測る。

出土遺物は他のSD11周辺のピット群と同様に皆無である。

SK22

調査区中央部に位置する。平面形は不整円形を呈し、直径約80cm、深さ50cmを測る。

出土遺物は土師器杯底部(127)、備前小壺底部(128)、他に土師器口縁部5点、底部6点、細片が多数出土した。

SK23

調査区中央部に位置する。SK22の西に近接し、石列1の東側上層部分に存在する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸方向はN-60°-Wである。規模は長軸1.60m、短軸1.16m、深さ27cmを測る。北部はテラス状になっており、検出面からの深さは15cmと浅く、反対側は27cmと深くなっている。

出土遺物は土師器口縁部1点、底部2点、細片2点が出土しているが図示できるものはない。

SK24

調査区南部の東側(S区)に位置する。S区では北端の土坑である。平面形は不整円形を呈し、規模は直径約90cm、深さ67cmを測る。埋土は暗褐色土である。

出土遺物は上層より土師器杯(118)、同小皿(119)が、下層より土師器杯(125)が出土しており、いずれも完形に近いものである。

SK25

調査区南部の東側(S区)に位置し、SK26を切って存在する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸方向はN-57°-Eである。規模は長軸1.12m、短軸0.80m、深さ約65cmを測る。

出土遺物は暗褐色土の埋土中より土師器小皿底部(117)と他に細片が出土している。

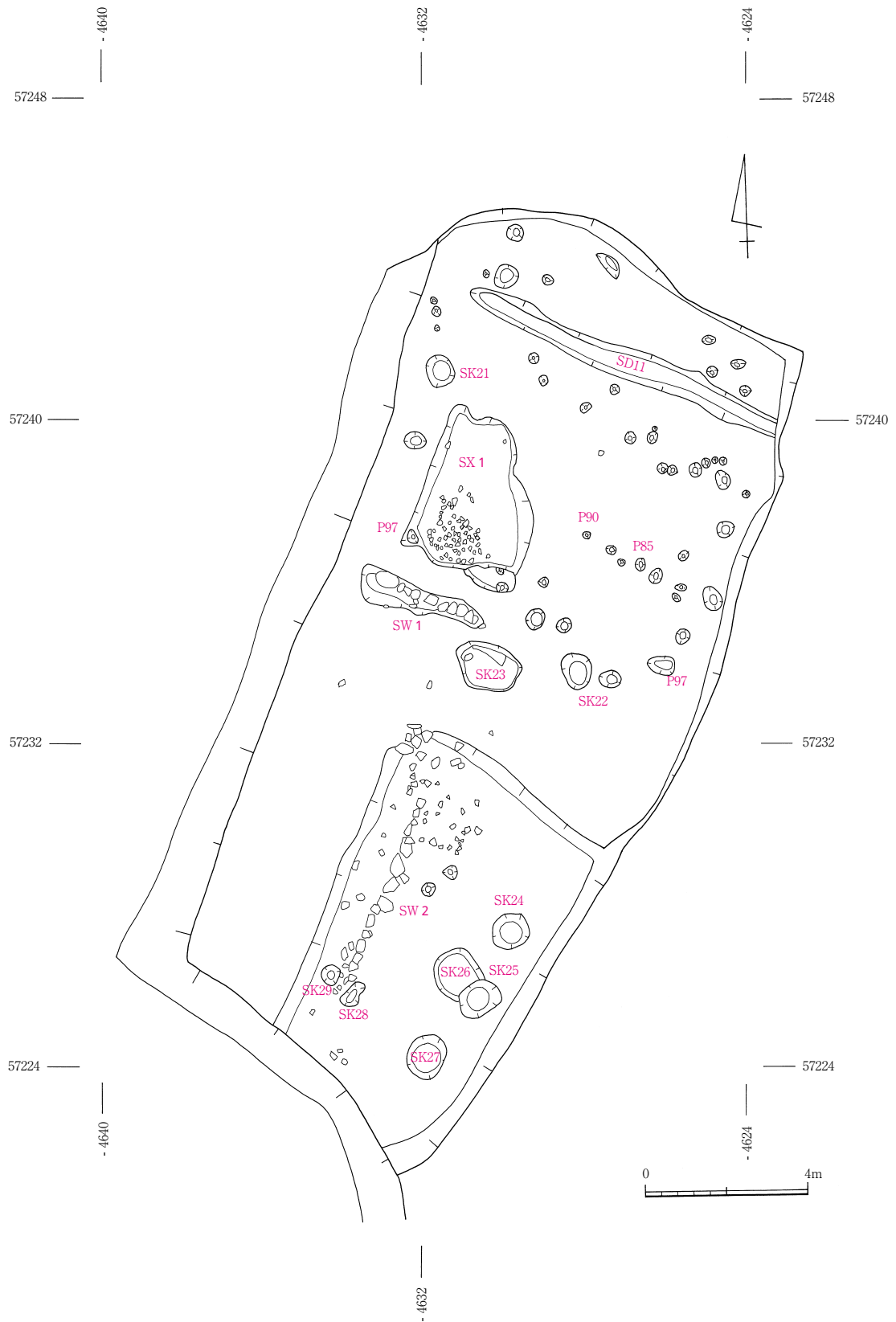


图22 4区検出遺構全体図(第1検出面)



图23 4区検出遺構全体図(第2検出面)

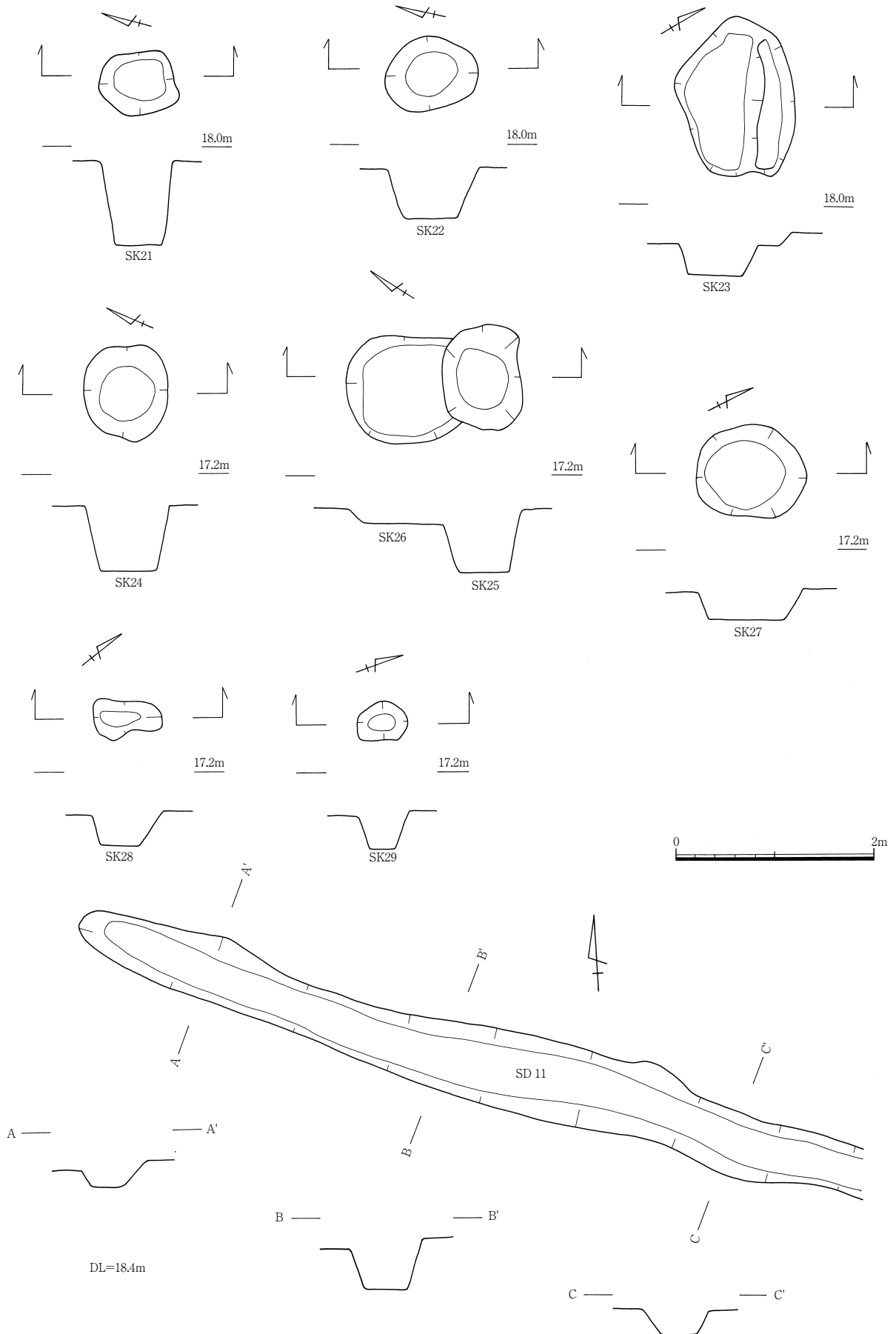


図24 SK21~29、SD11 平面図・エレベーション図

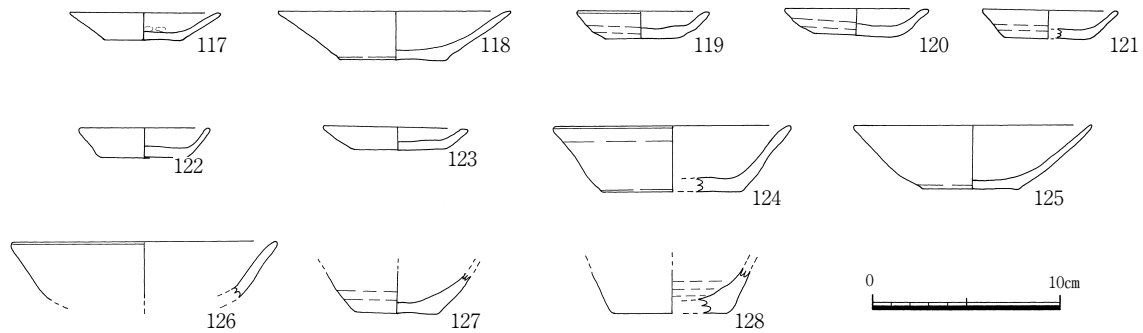


図25 SK22 (127・128) SK24 (118・119・125) SK25 (117) SD11 (120~124・126) 出土遺物実測図

S K 26

調査区南部の東側(S区)に位置し、S K 25に切られて存在する。不整楕円形を呈し、長軸方向はN - 33° - Wである。規模は長軸1.36m前後、短軸1.12m、深さは15cmを測る。

出土遺物は褐灰色埋土中で土師器皿の底部細片が出土するが図示できるものはない。

S K 27

調査区南部の東側(S区)南端に位置する。平面形は円形を呈し、規模は径約1.00m、深さは32~46cmを測る。

出土遺物はない。

S K 28

調査区南部の中央(S区)に存在する石列S W 2の南末端部東側に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸50cm、短軸32~40cm、深さは約28cmを測る。

出土遺物はない。

S K 29

調査区南部の中央(S区)に存在する石列S W 2の南末端部西側に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸52cm、短軸40cm、深さは約36cmを測る。

出土遺物はない。

溝

S D 11

調査区の北部にあり、主軸方向はN - 66° - Wで東から西方向に流れていたものと考えられる。確認延長は8.40m、幅0.60~0.80m、検出面からの深さは25~50cmを測る。黄褐色系土中に掘り込まれ、埋土は暗褐色土である。(図24)

出土遺物は土師器小皿底部(120~123)、同杯底部(124)、同杯口縁部(126)が出土している。119、120、123はほぼ完形品である。他に土師器(底部1点、口縁部6点、細片3点)、陶器鉄釉甕(底部を含む細片8点)、同瓶類1点(ほぼ完形のもの)、土師質焜炉口縁部1点が出土している。

ピット

ピットは大小50個検出したが、遺物が出土したのは調査区中央部に存在するP85、P90、P97のみである。ピットは溝や石列の存在する中央部から北部（N区）にかけて集中しており、これらと何らかの関係が伺われるが位置関係や深さ、埋土等からは明確にできない。

出土遺物はP85から土師器口縁部1点、同細片1点が出土している。P90から土師器底部1点のみ出土している。S X 1の南西角に位置するP97からは備前播鉢細片1点、土師器口縁部1点、同底部5点、同細片が多数出土している。いずれも図示できるものはない。

性格不明土坑

S X 1 (集石含む)

調査区北部中央に位置し、石列遺構 S W 1 の北に隣接する集石を伴う土坑である。平面形は不整形な長方形を呈する大型の土坑である。規模は長径3.80m、短径2.90mを測り、主軸方向はN - 20° - Eのやや東に傾く南北方向である。深さは北から南に向けて緩やかに傾斜しており、中央部分で約40cm、南端では約60cmを測る。遺構の南西部分に1.50m内外の範囲で直径約20cmの礫をはじめ大小の石が意図的に敷かれたと見られる集石状部分が観察できたが、性格は不明である。

(図26)

出土遺物は土師器鍋口縁部(177)が図示できた。177は断面三角形の鏝を有する。この他に土師器底部4点、須恵器細片1点、備前陶器鉢細片3点が出土している。集石周辺からは、備前播鉢(174・175)が出土している。175は14世紀後半代の播鉢である。



図26 SX 1 (集石含む) 平面図・エレベーション図

石列

S W 1

調査区中央部に位置する。南北方向列と東西方向列が連結し、やや東に傾く方形状を呈するが、南側の連結点は直角でない。東角よりさらに東へ1.00m程石列が続き、検出長は東西及び南北に3.60m前後を測る。東側の列は中ほどで分断され、西に湾曲するように石が散在する。東方向からの出水、後世の土地造成の影響等が考えられる。石列は西側が低くなっており、東側と西側の高低差は70～80cmであるが崩落した可能性もある。(図27)

S W 2

調査区南側に位置する。N - 23° - Eとやや東寄りの南北方向で、連続した直線の列を成す。北端部には東方向から押しやられたように石が散在する。南端部に土坑(SK28・29)が検出された。石列の東側には土坑(SK24～26)が検出されている。S W 2はこれらの遺構区域の区画施設とも考えられ、同時期に存在した可能性が高い。(図27)

出土遺物は、石列周辺からの出土物としては、S W 1北西部より磁器染付碗蓋(178)、陶器灰釉碗(181)、陶器鉄釉皿(182)の他、土師器底部1点、同細片1点、陶器鉄釉皿底部1点、同細片4点が出土している。S W 2より龍泉窯青磁碗(146)、土製円盤(162)、土師器杯(167)・(171)、瓦器碗(173)、須恵器底部細片5点が出土している。同北西部からは備前播鉢(176)が出土している。

遺構外出土の遺物

当調査区内には中世～近世の遺物包含層が存在した。出土遺物は調査区北側(N区)ではS X 1(集石含む)及び石列S W 1付近、同南側では石列S W 2及びその東部分(S区)の遺溝に絡むように多く出土している。ここで図示するものは88点である。(図28～32)



図27 SW 1・2 平面図・エレベーション図

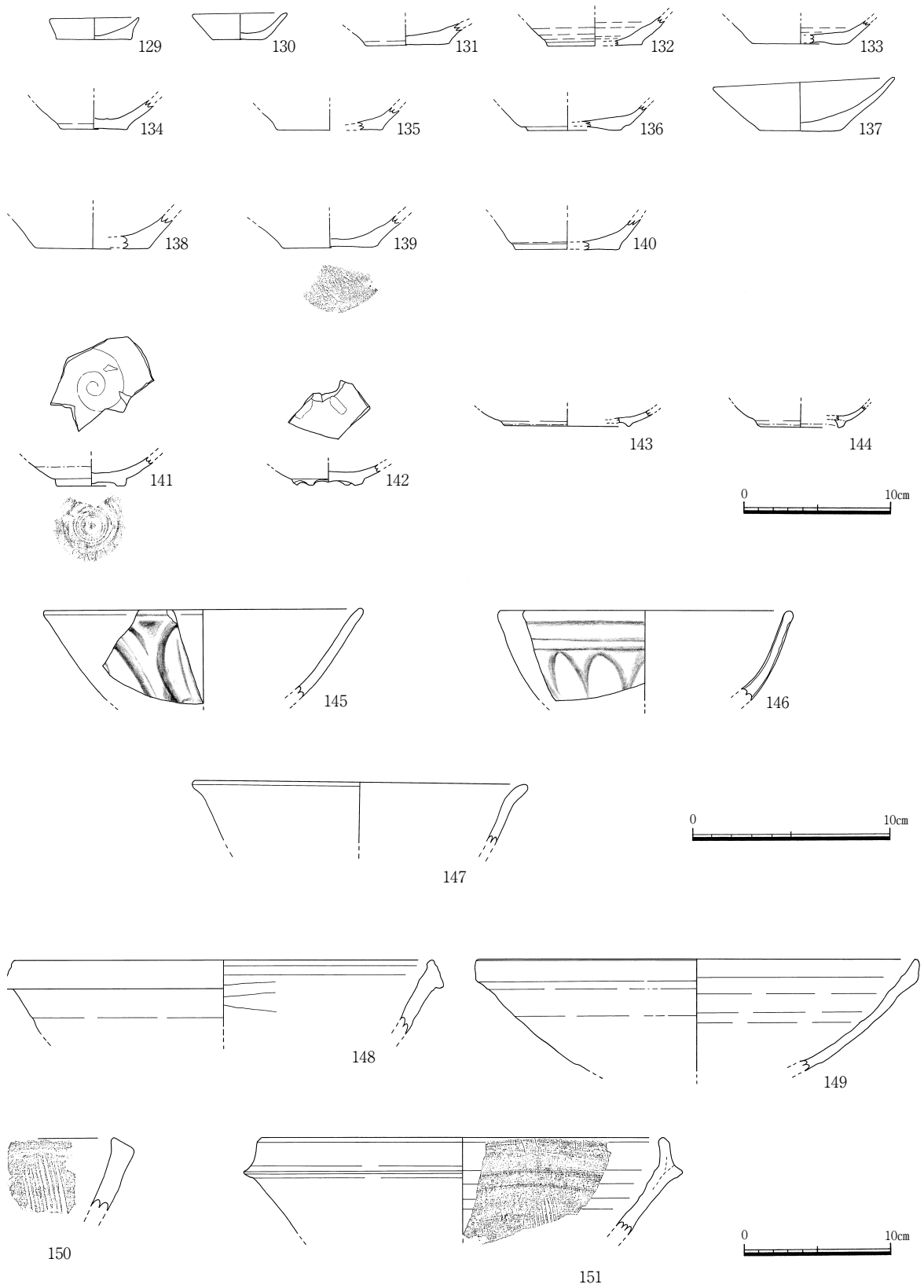


図28 4S区遺構外出土遺物実測図(1)

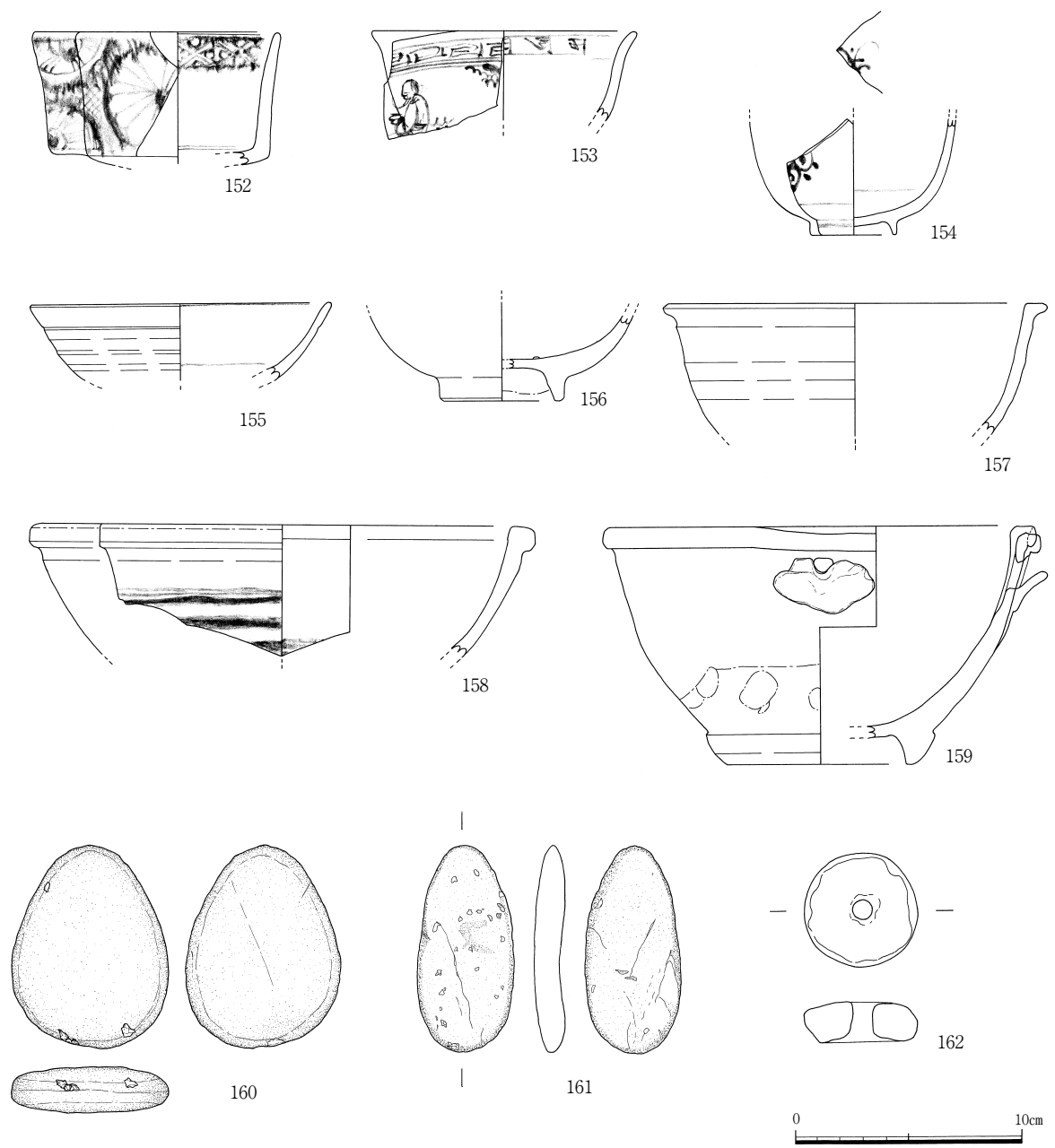


图29 4S区遺構外出土遺物実測図(2)

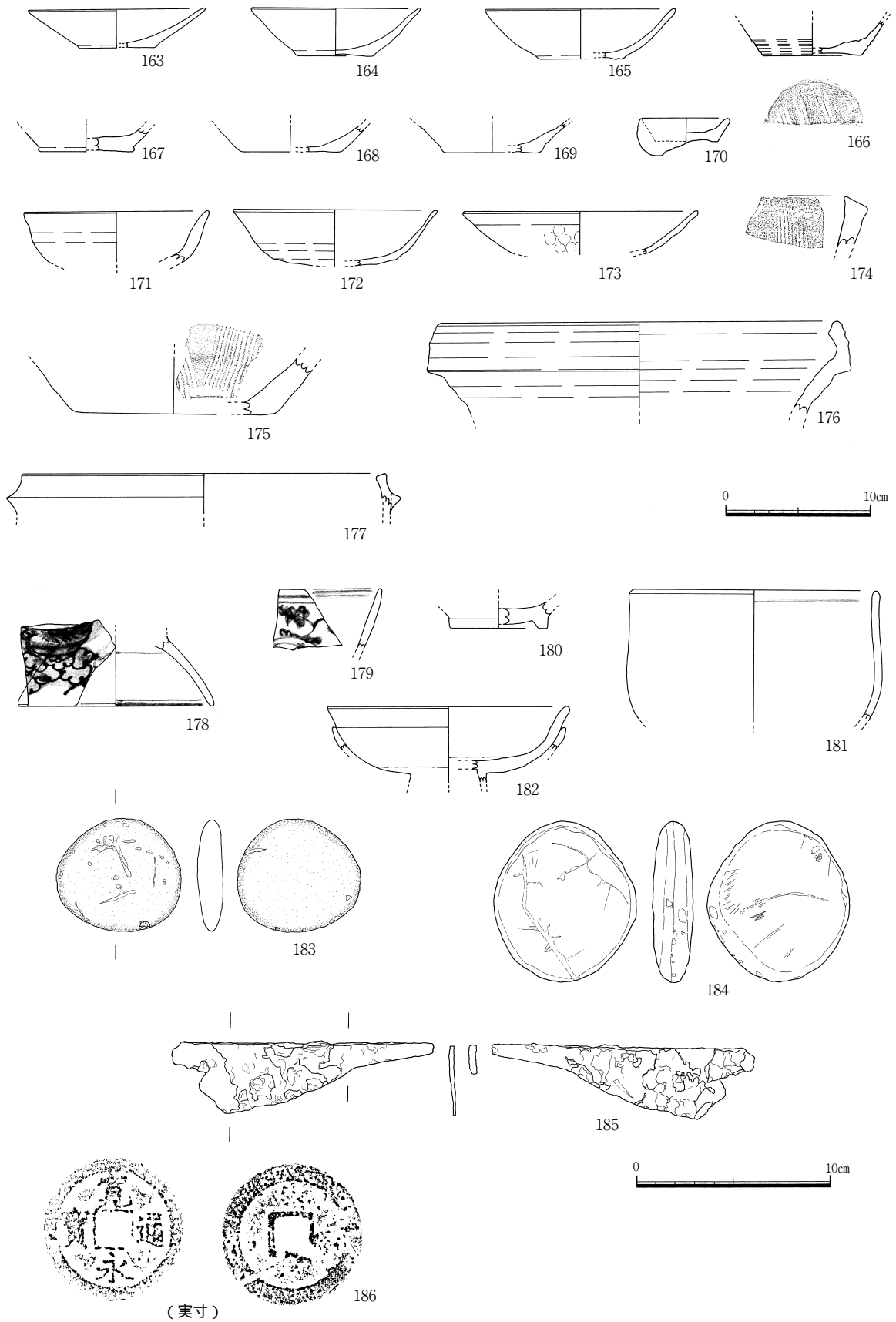


图30 4 N区遺構外出土遺物実測図

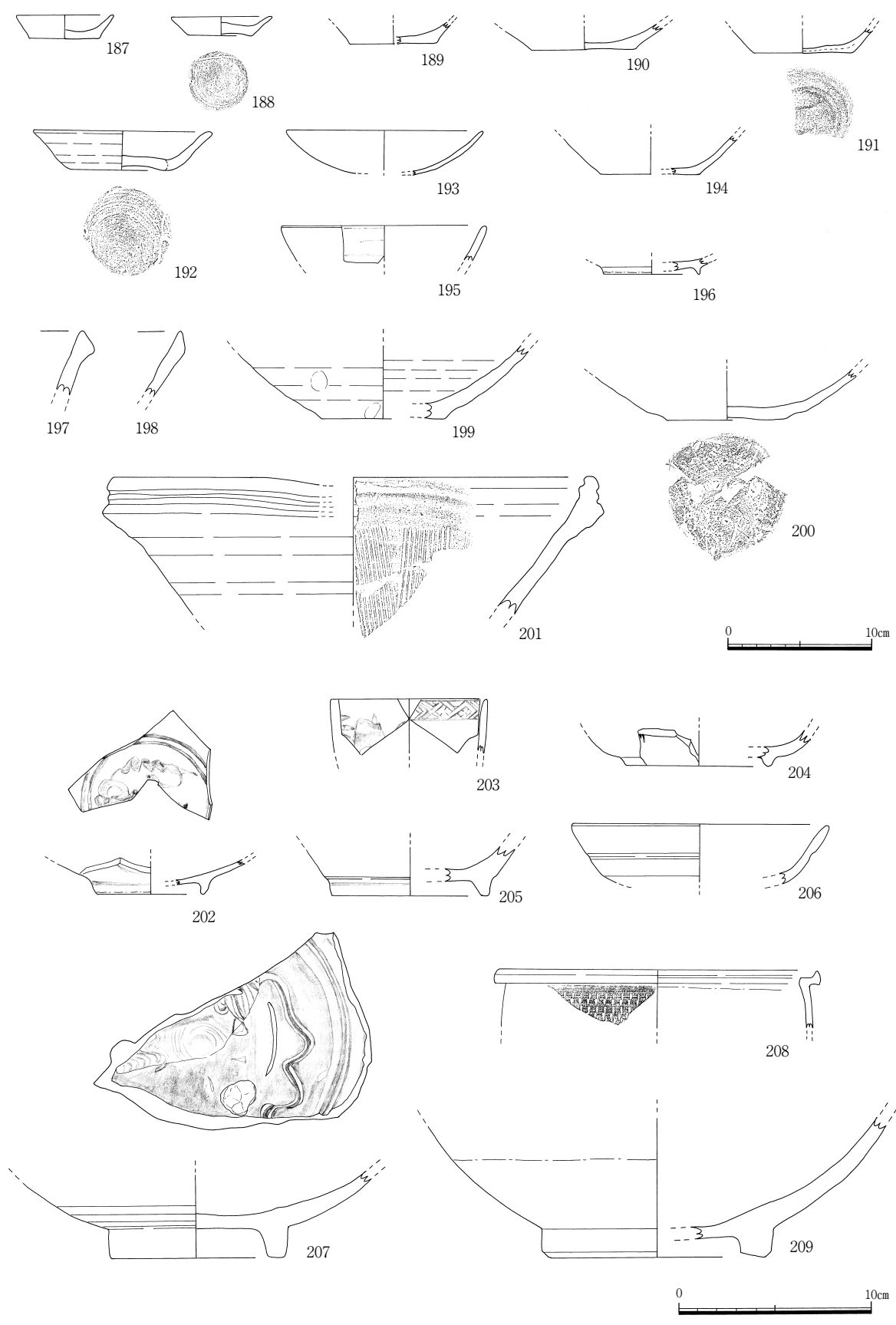


图31 4区遺構外出土遺物実測図(1)

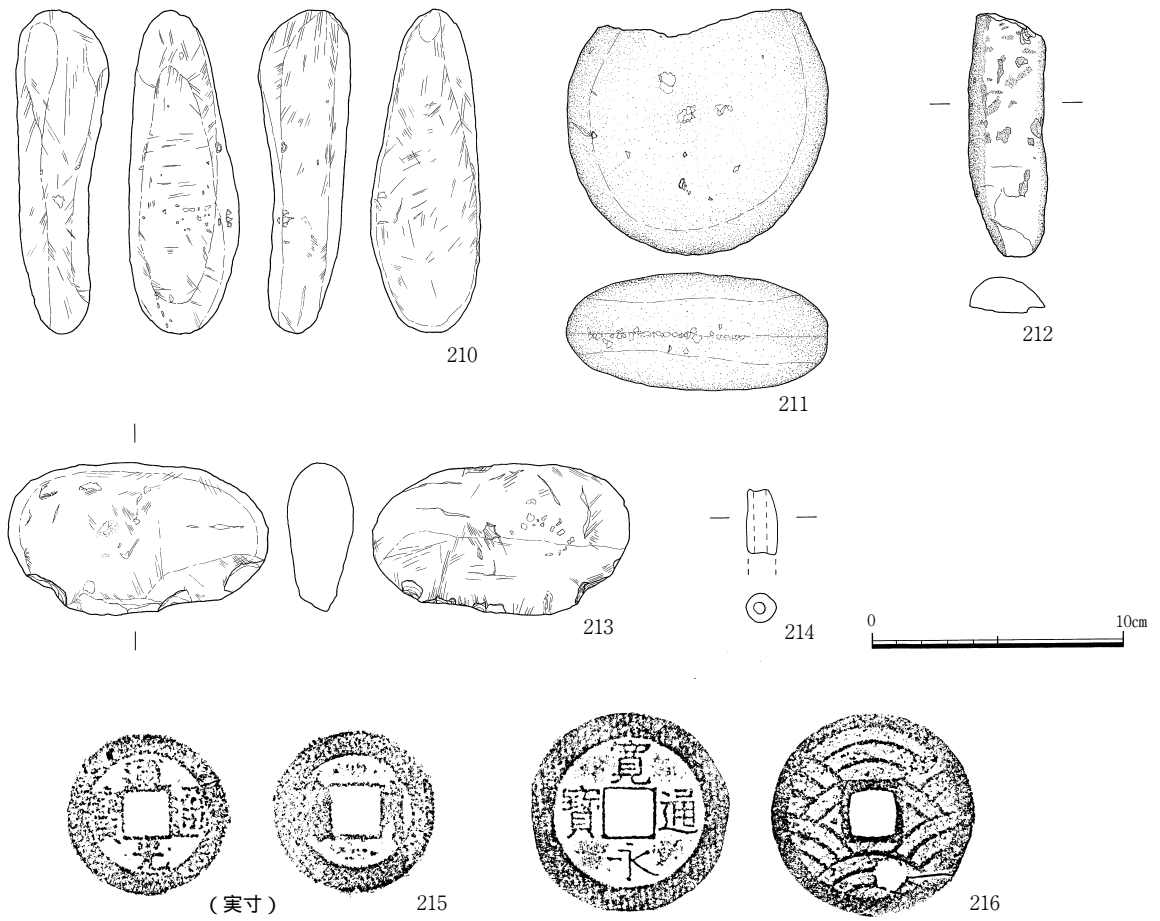


図32 4区遺構外出土遺物実測図(2)

(4) 1～3区

1～3区は全調査区の北東部に位置する。古い時期より畑地或いは果樹園として利用されており、段状の地形を成す。各区とも南西方向に細長く広がり、標高は1区で海拔約27m、2区で約25m、3区では約23mを測り、南西～西方向に緩やかに傾斜する。

第1検出面(近世～)

1区から順次、表土・耕作土等を掘削し検出作業を実施したが、この段階では特にこれといった遺構の検出は見られなかった。各区とも石灰岩等の石の露頭が目立つ。

出土遺物については主に近世以降の陶磁器であり、中に中世の輸入陶磁器が混在する。1区南西部で龍泉窯青磁碗(217)、肥前系磁器中碗蓋(218)、磁器染付皿底部1点、色絵皿底部1点等が出土している(図40)。この他に、1区中央部で土師器底部1点、1区北東部で土師器細片1点、2区南西部で焼締陶器底部1点が出土しているが、いずれも図示できるものはない。

第2検出面(中世～近世)

黄褐色～灰褐色土層を掘り下げ検出作業を行った結果、中世～近世の遺物包含層及び遺構を確認することができた。

1区は石灰岩他の大小の石が非常に多い。遺構としては中央部で地山に掘り込まれた土坑及びピット状遺構7個を検出した。遺構からの出土遺物はなく、時期や性格は不明である。

出土遺物は中央部から土師器鍋細片1点、北東部から土師器細片1点が出土しているが図示できるものはない。

2区は中央部に最大径1.00m前後の石が散在するが、1区に比して石の量は比較的少ない。遺構としては、南西部で、長径2.00m、短径1.40m、深さ約30cmの不整楕円形を呈する土坑を1個検出したが、その他の検出は見られなかった。

出土遺物については中央部包含層から広東形灰釉碗(219)が出土しているのみである。(図40)

3区は北側に最大径(4.80m)を測る大石が存在する他に石は比較的少なく、中央部を中心に大小様々な不定形の土坑及びピット群が検出された。土坑の半数は内部に石礫を含んでおり、下層の石礫の多さを窺わせる。土坑26個、ピット143個の遺構からはいずれも遺物は出土していない。埋土は北東部で暗褐色粘質土、中央部より南西部にかけては茶褐色礫混粘質土であった。遺構は3区の北東部、中央部、南西部に集中する傾向にある。それぞれの地点でピットの埋土や深さ、位置関係等から掘立柱建物(SB1～8)を想定したが、中央部の建物は上段が迫る場所にあり立地的に難しいともいえる。また、いくつかの柱穴はSB間の重複や後生の土地造成業の影響を受けて未検出の部分が存在する。そのため、それぞれの柱穴については計測値のみにとどめ、断面図は記載していない。(図35)これらの遺構も含めて、検出した遺構の中には、あるいは、人為的に掘削されたものではなく、樹根や上面での耕作時に生成された可能性も考えられる。

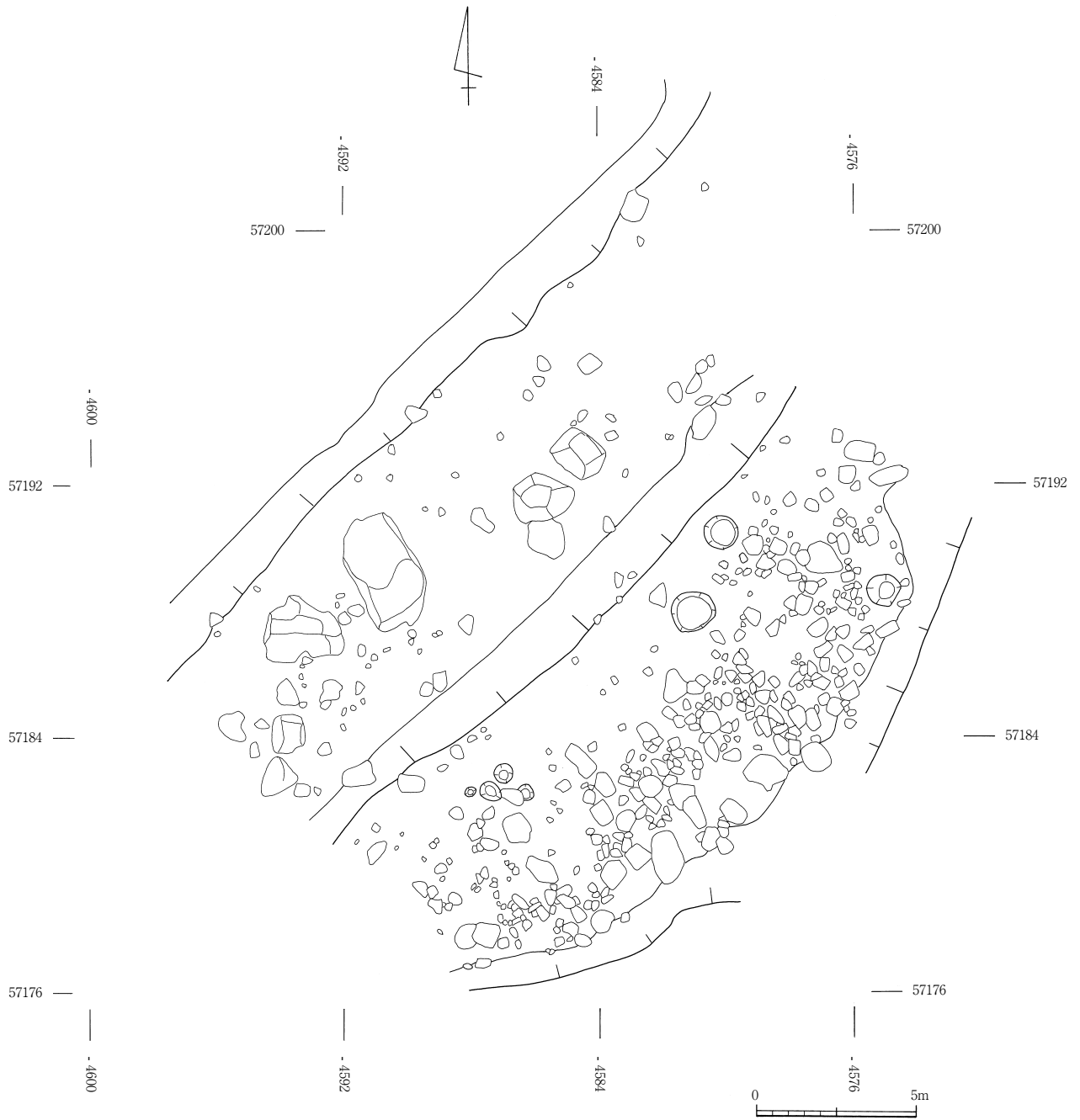


図33 1・2区検出遺構全体図（第2検出面）



图34 1・2区検出遺構全体図(第3検出面)



図35 3区検出遺物全体図(第2検出面)

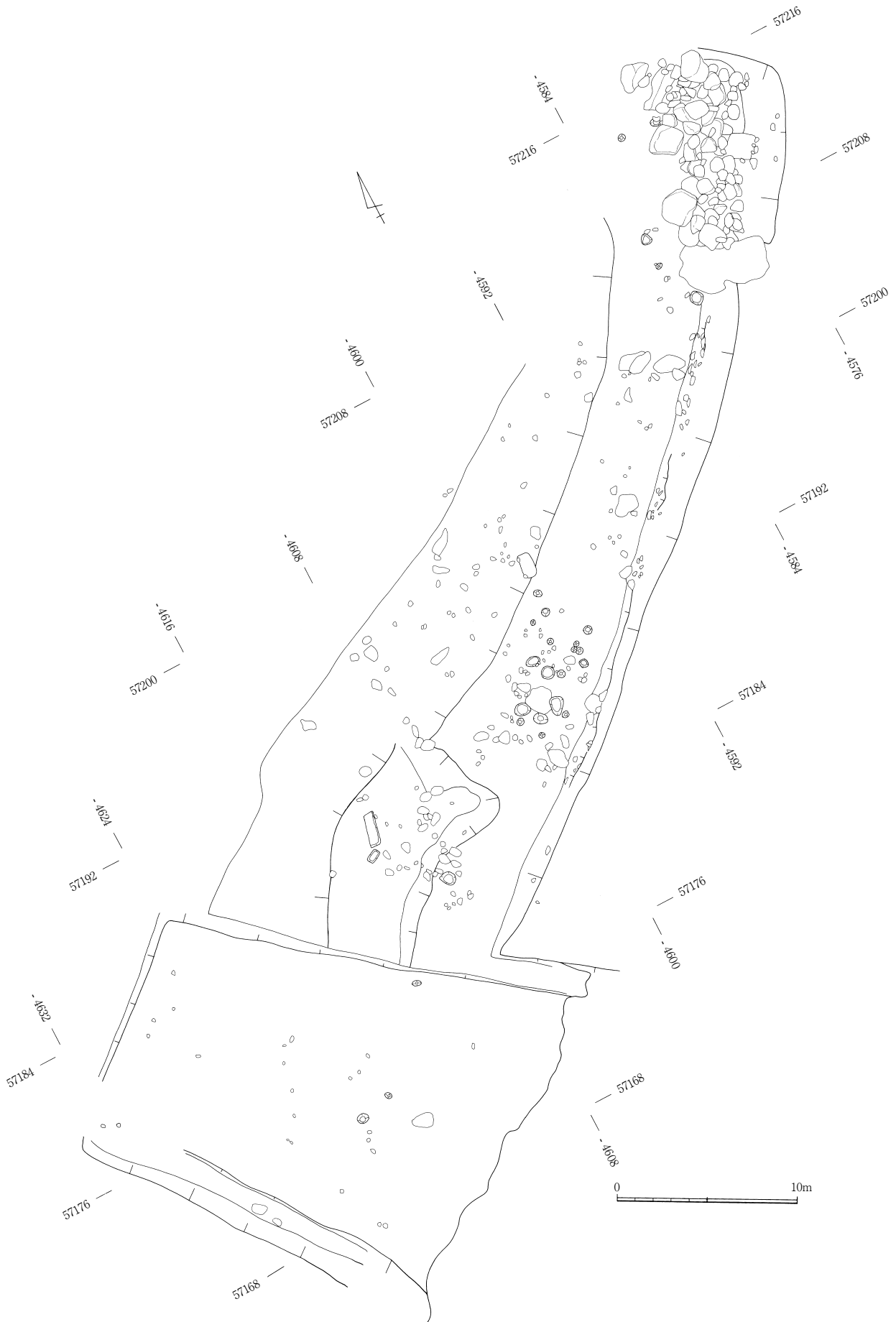


图36 3区検出遺構全体図(第3検出面)

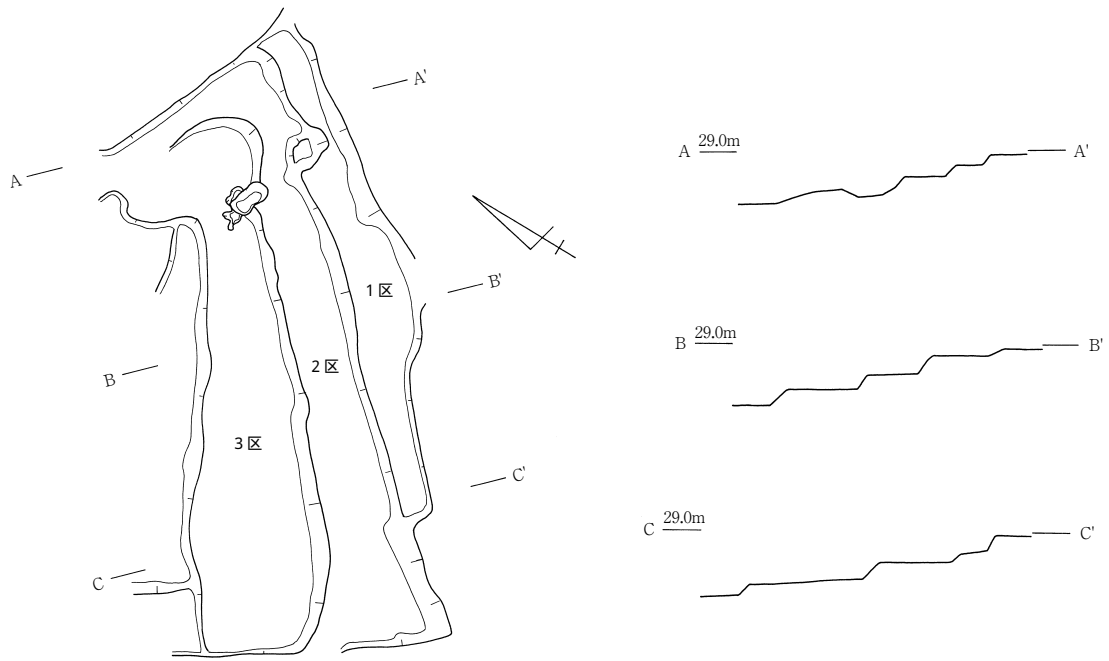


図37 1～3区エレベーション図・断面位置図（第2検出面）

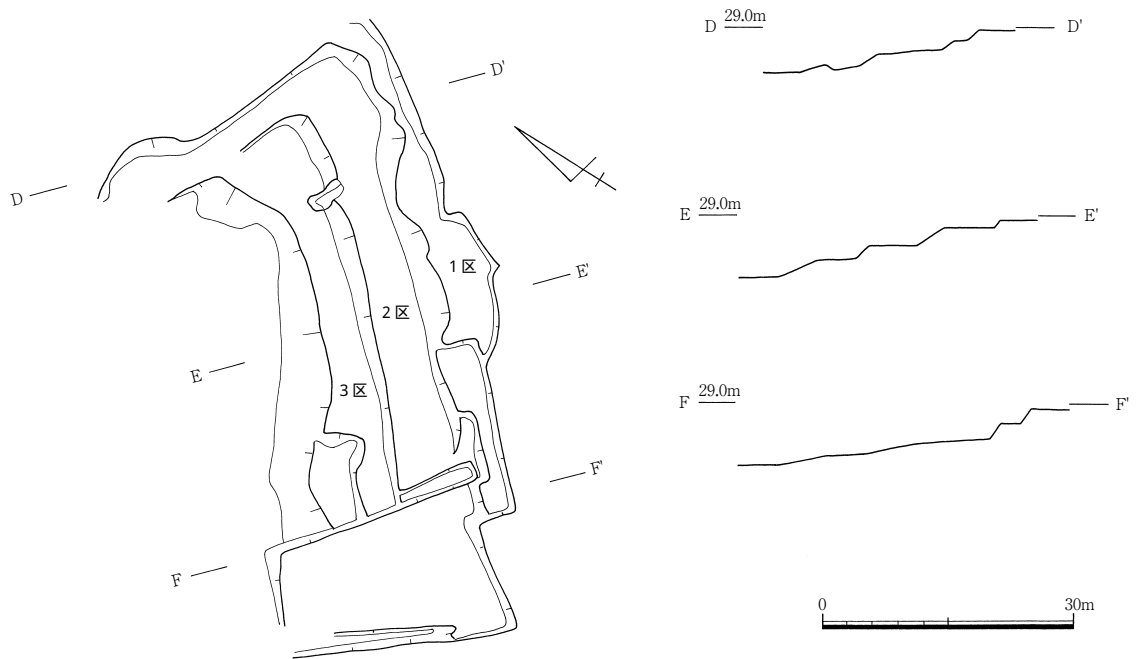


図38 1～3区エレベーション図・断面位置図（第3検出面）

掘立柱建物

S B 1

北東端で検出した梁間(東西)2間(2.80m、1.60m等間)、桁行(南北)2間(3.20m、1.60m等間)の南北棟建物跡である。棟方向はN - 31° - Wである。柱穴は直径32~40cm、深さは10~46cm前後を測る。

S B 2

北東端で検出した梁間(南北)1間(1.80m)、桁行(東西)2間(3.50m、柱間寸法1.50~2.00m)の東西棟建物跡である。棟方向はN - 86° - Wである。柱穴は直径40~48cm、深さは10~46cmを測る。北東隅柱穴は未検出である。S B 1と重複するが前後関係は明確にできない。

S B 3

中央部で検出した梁間(東西)2間(5.00m、2.50m等間)、桁行(南北)3間(5.00m、柱間寸法1.50~2.00m)の南北棟建物跡である。棟方向はN - 40° - Wである。柱穴は直径40~100cm、深さは16~33cmを測る。西隅の柱穴は不整形であり、西南部の柱穴位置は若干ずれている。

S B 4

中央部で検出した梁間(東西)2間(2.50m、柱間寸法1.20~1.30m)、桁行(南北)3間(5.50m、柱間寸法1.50~2.00m)の南北棟建物跡である。建物跡はS B 3中央部分で重複するが前後関係は明確にできない。棟方向はN - 17° - Eである。柱穴は直径50~100cm、深さ15~60cmを測る。

S B 5

中央部南西寄りで検出した梁間(東西)2間(4.20m、柱間寸法2.00~2.20m)、桁行(南北)3間(5.00m、柱間寸法1.50~2.00m)の南北棟建物跡である。南から1間目の柱通りに間仕切り柱が立つが、桁行の柱間寸法が一定ではない。南北側柱の柱穴2個と東側柱穴が1個が未検出である。棟方向はN - 40° - Wである。柱穴は直径56~64cm、深さ15~30cmを測る。

S B 6

中央部南西寄りで検出した梁間(東西)2間(3.20m、1.60m等間)、桁行(南北)2間(4.30m、柱間寸法2.00~2.30m)の南北棟建物跡である。梁間北側柱穴1個が土坑と重複して未検出である。棟方向はN - 34° - Eである。柱穴は直径40~56cm、深さ10~36cmを測る。

S B 7

中央部南西寄りで検出した梁間(南北)1間(2.50m)、桁行(東西)2間(3.80m、柱間寸法1.80~2.00m)の東西棟建物跡である。位置は若干ずれるが梁間2間の可能性もある。建物跡は北隅柱穴がS B 6に重複しており、南側柱穴1個が未検出である。棟方向はN - 61° - Eである。柱穴は直径32~48cm、深さ10~30cmを測る。

S B 8

南西端で検出した梁間(東西)1間(2.70~2.90m)、桁行(南北)2間(3.80~4.00m、約2.00m等間)の若干歪みのある南北棟建物跡である。西側柱穴1個が未検出である。北側柱穴1個が未検出となるが梁間2間の可能性もある。棟方向はN - 4° - Eである。柱穴は直径32~56cm、深さ15~36cmを測る。

自然流路

S R 1 ~ 3

中央部から南半分にかけて3条の出水時に形成されたと考えられる旧自然流路(S R 1 ~ 3)が確認できる。S R 1 ~ 3はいずれも後世の果樹栽培に伴う段々畑造成時に上面を削平されており、明確に復元することは困難であるが、帯状の色調の変化や石礫の散布状況等から推定される流路を復元し図示した。(図39)

出土遺物については、南西部から土師器杯底部1点、土師器鍋胴部細片1点が出土しているがいずれも図示できるものはない。

第3検出面(~ 中世)

2・3区の南西部に残る後世に造成された段差部分(灰褐色土)をさらに下層まで掘り下げて検出作業を実施したが、遺物としては土師器細片が少量出土したのみで遺構は確認できなかった。

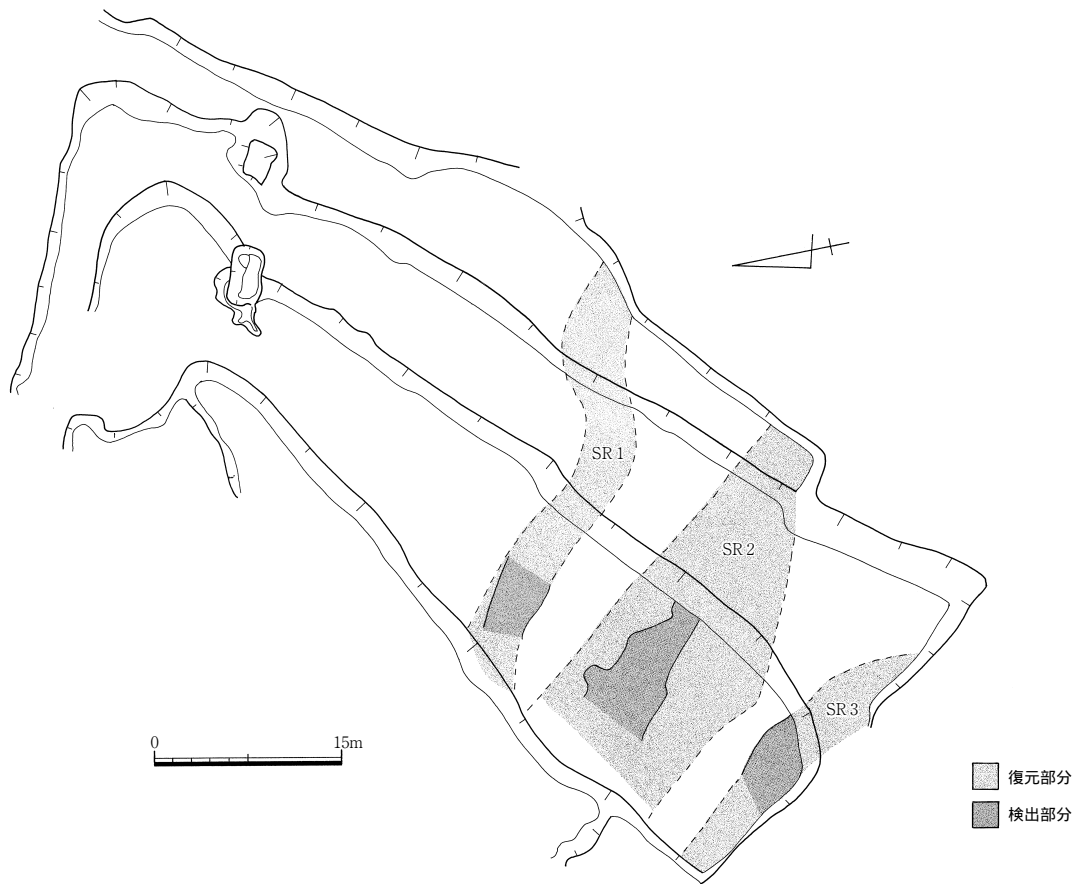


図39 SR 1 ~ 3 復元推定位置図 (1 ~ 3 区)

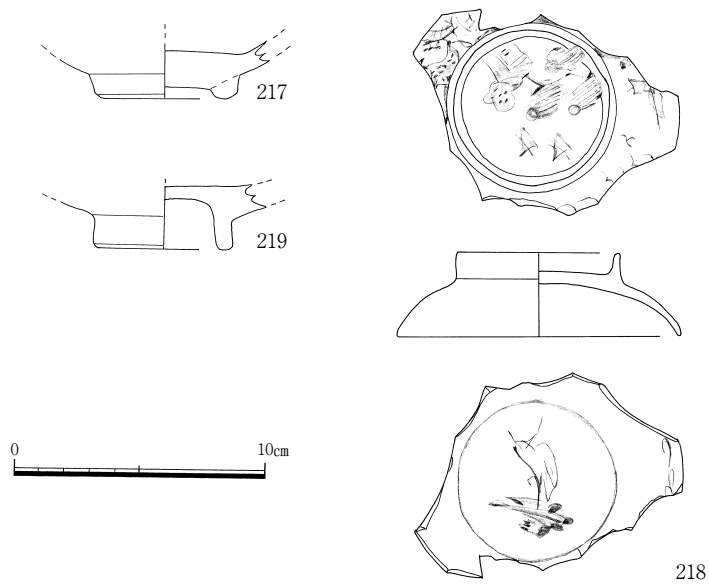


図40 1区(217・218)、2区(219)遺構外出土遺物実測図

3. 1 ~ 6区出土遺物観察表

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
1	5区 SK 3	土師器 杯		(1.6)		7.7	内外面共に浅黄橙色。赤色風化礫の細粒砂を多量に含む。内面断面は暗灰黄色で摩耗が激しい。底部糸切り。	
2	" SK 6	土師器 杯		(1.8)		9.0	内面は黄褐色、外面は橙色。砂粒をほとんど含まない。摩耗が激しく調整不明。	
3	" SK 6	土師器 杯		(1.7)		6.3	内外面共ににぶい黄橙色。赤色風化礫の細粒砂を含む。内底に口ク口目。内外面にナデ。摩耗が激しい。	
4	" SK 6	土師器 杯	12.4	3.2		7.9	内外面共に明赤褐色。砂粒をほとんど含まない。器壁は薄く、直線的に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。摩耗が激しい。器高指数25.8。	
5	" SK 8	磁器染付 碗 端反形	10.6	(5.7)			外面に木賊文。内面に帯線、圏線。見込みに岩波文。胎土は滑らかで、透明感を持つ白色。透明釉は厚く青色を帯びる。	瀬戸・美濃 19世紀
6	" SK 8	磁器染付 碗		(3.2)		4.2	外面に圏線、他不明。内面に圏線。見込みに雲文。胎土はやや荒く、白色。細かい貫入が入る。高台内に角内「茶」銘。	能茶山 1820~ 幕末
7	" SK 8	磁器染付 小碗 端反形	7.4	3.15		2.8	内面に吹墨による桜花文。花心は釉裏紅で描く。胎土は白色、滑らか。薄手の作り。	近代
8	" SK 8	磁器染付 小坏 端反形	5.7	3.9		3.8	外面に筆描による竹文、圏線。内面口縁部に二重圏線。呉須は良好な発色。胎土は白色、滑らか。薄手の作り。完形品。	19世紀
9	" SK 8 遺構外	陶器灰釉 灯明皿	12.0	(1.9)			上皿。外面は口縁下1cmより無釉。口縁部は釉が肥厚し、煤が付着。胎土は灰黄褐色、やや滑らか。内外面に丁寧な横ナデ。	信楽？ 19世紀
10	" SK 8	磁器白磁 小坏 丸形	6.4	2.9		2.6	透明釉はわずかに水色を帯びる。畳付けに砂が付着。胎土は白色、やや滑らか。高台内兜巾状。薄手の作り。	肥前系 18世紀 ~幕末
11	" SK 8	磁器染付 輪花小皿	9.8	(1.2)			内面に草花文。口唇部に口錆風に呉須を施す。呉須はオリブ黒色に発色し、細かい貫入が入る。透明釉は白濁する。胎土は白色、やや荒く裂孔が存在。型打ち成形。貼付高台部分は剥落。	能茶山？ 19世紀
12	" SK 8	磁器染付 德利 撫肩形	1.2	(19.3)			外面肩部及び口唇部に胴版転写による文様帯。胴部面取り部分に手描銘。内面口ク口目顕著。胎土は白色、やや荒い。口縁は玉縁状を呈す。	近代
13	" SK 8	磁器 戸車	全長 4.8	全幅 1.7	全厚 1.3	重量 19.7g	胎土は灰白色、やや荒く裂孔が存在。両底面に砂粒が付着。型押成形。	
14	" SK 8 SK13	陶器灰釉 碗 広東形	12.8	4.9			内外面共に釉は灰オリブ色に発色。外面下方から上方に向けて白土による刷毛目装飾。剥離面は褐灰色、白土側は淡赤褐色となる。高台畳付無釉部分にはにぶい赤褐色を帯びる。細かい貫入が見られる。	肥前系 18世紀末 ~19世紀
15	SK 8	陶器鉄釉 甕		(8.5)			釉は極暗赤褐色に発色。橙色の胎土に浅黄色の胎土が粒状あるいはマーブル状に混入し、裂孔が存在。底部外面は無釉、平底。	
16	" SK 8	焼締陶器 擂鉢	31.0	(5.7)			内外面共ににぶい赤褐色。剥離面中心部分は暗赤褐色。口縁部内外面共横ナデ。擂目は10条以上。石英、長石他の細・粗粒砂を多量に含み、円裂孔が存在。	堺系
17	" SK 8 TR.KT	陶器 火入れ 筒形	9.4	(5.3)			外面及び内面口縁部下まで鉄釉。外面は櫛目による掻き落とし後、白土による波状の刷毛目を施す。胎土は褐灰色、円・裂孔存在。口唇部に鼓打痕を留める。	肥前武雄 系1590~ 18世紀 前半

出土遺物観察表 1

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
18	" SK 8	銅製品 刀装具 柄頭	全長 2.9	全幅 2.8	全厚 0.5	重量 7.7g	側面に鱗状の型押文。腐食による穿孔、破損有り。	
19	" SK 8	石製品 砥石	全長 12.8	全幅 8.3	全厚 5.35	重量 600g	砂岩製。灰白色。軟質。使用痕3面。	
20	" SK 8	銅製品 煙管 吸口	全長 8.7	全幅 1.0	全厚 1.0	重量 10.7g	外面に銀鍍金。毛彫文様(羊歯葉に蕨文?)を施す。	江戸後期
21	" SK11	土師器 小杯		(1.6)		4.7	内外面共ににぶい橙色。軟質で赤色礫、チャートの細・粗粒を少量含む。体部上半分はやや外反気味に立ち上がる。摩耗が激しく調整不明。	
22	" SK11	陶器灰釉 碗 呉器形	11.4	(5.0)			内外面共に釉はやや褐色味を帯びる。細かい貫入が入る。胎土は浅黄色。内外面口口ナデ。	尾戸? 18世紀
23	" SK11	陶胎染付 大瓶		(15.0)	15.1	9.1	外面は白化粧土、透明釉。染付銘は酒屋店名か。白化粧土は淡黄色味を帯びる。高台脇と瓶内面は鉄釉。畳付～高台内部のみ無釉。胎土は灰黄色、微裂孔が存在。内面に口口目を残す。	
24	" SK11	陶器染付 碗 丸形?	10.0	(4.9)			文様不明。呉須は滲む。胎土は乳白色、円裂孔が存在。やや規模の大きい貫入が見られる。太白焼か。	瀬戸・ 美濃 19世紀
25	" SK11	土師 質焙烙					無耳で浅め。内外面共ににぶい橙色。胎土に石英、雲母細粒を含む。器壁は薄く堅緻。内面横ナデ。口縁部内面に稜を持ち外反する。口縁端部に面取りを施し、稜が形成される。外面は煤ける。	
26	" SK11	陶器鉄釉 小皿 端反形	12.3	4.5		4.6	内外面鉄釉。高台脇より底部は露胎。胎土はにぶい橙色。見込は蛇の目釉剥ぎ後、白化粧土を刷毛塗り。削り高台。内外面口口ナデ。	
27	" SK11	陶器刷毛目 鉢or皿		(2.3)		12.0	内外面共に緑釉と白化粧土による刷毛目釉描きを施す。内面は透明釉、細かい貫入が見られる。底部は無釉、ベタ底。底部内面に目跡。灰オリーブ色の胎土に淡黄色細砂粒を含み、円・裂孔が存在。	肥前? 18世紀 前半
28	" SK11 21区 S E	磁器青磁 香炉 半筒形	7.0	4.9		(内)6.6 (外)7.0	外面は陽刻(型押?)による松唐草文、口縁部周辺に横線文。内面(口縁下1cm内外を除く)と底部は露胎。平底で外周に貼付三足。胎土は透明感を持つ白色、やや滑らか。	肥前系?
29	" SK10	石製品 砥石	全長 9.15	全幅 4.7	全厚 2.8	重量 154.1g	石英粗面岩製。4面使用。中央部に向かって摩耗する。黒色粗粒を多量に含む。	
30	" SK11	石製品 砥石	全長 7.24	全幅 5.57	全厚 4.20	重量 301.5g	砂岩製。4面使用。被熱赤変。	
31	" SK13	磁器染付 碗 丸形	12.1	(3.5)			外面に雨降文。内面は口縁端部に二重圈線。透明釉はやや青みを帯びる。胎土は白色、滑らか。器壁は薄い。	肥前系? 19世紀
32	" SK13	磁器染付 小皿		(2.3)		5.8	内外面に1～2条の圈線、文様は不明。透明釉は明緑灰色を帯びる。高台畳付は釉剥ぎされ、砂が付着。胎土は白～灰白色で、やや荒く裂孔が存在。	景德鎮窯系 16世紀末 ～17世紀
33	" SK13 遺構外	陶器灰釉 碗or蓋	12.0	(4.0)			外面に白土によるイッチン掛けを施す。胎土は灰オリーブ色～褐色。灰釉はオリーブ灰色に発色し、細かな貫入が見られる。	関西系? 18世紀末 ～19世紀
34	" SK13	陶器鉄釉 小皿 端反形		(2.7)		3.9	内外面共に鉄釉。外面底部は露胎。見込みは蛇の目釉剥ぎ後、アルミナ砂を塗布する。白化粧土を刷毛塗り。胎土は橙色、微粒砂を多く含む。	19世紀

出土遺物観察表 2

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
35	" SK13	陶器灰釉 碗類		(1.7)		3.2	灰釉は灰白色を帯び細かい貫入が入る。見込みに剥落粒子の溶着が見られる。高台脇より底部は露胎。割高台で高台内の削りが浅い。体部立ち上がりより縦方向に削りによる稜線を認める。	18世紀 後半以降
36	" SK13 遺構外	陶器鉄釉 皿 丸形	13.0	5.3		5.8	内外面の鉄釉部分が明黄褐色の霜降り状に発色。見込みは蛇の目釉剥ぎを施し、アルミナ砂を塗布する。口縁下外面に一条の沈線。胎土は橙色。	19世紀
37	" SK12 SK 8	陶器 台付 灯明皿	5.8	2.0		4.6	受皿。内外面の鉄釉部分がオリーブ黒色の濃淡のある霜降り状に発色する。底部はベタ底で無釉。回転系切り。胎土は明赤褐色で軟質。僅かに淡黄色風化礫の細砂を含む。	能茶山?
38	" SK18	磁器染付 小碗 腰張形	8.2	5.9		3.6	外面に梅文。内面口縁部と底部に圈線。見込みの文様不明。呉須は緑灰色に発色。貫入が入る。透明釉は乳白気味。胎土は白～灰白色、やや滑らか。	肥前系 19世紀
39	" SK18	石製品 砥石	全長 8.3	全幅 4.1	全厚 2.55	重量 150.4g	石英粗面岩製。4面使用。側面に切り込み状の使用痕。黒色～浅黄色の粗粒砂を多量に含む。	
40	" SD 1	土師器 小皿	6.3	(1.7)			内外面共ににぶい黄橙色。砂粒をほとんど含まない。摩耗が激しい。	
41	" SD 1	土師器 坏		(1.1)		5.4	内外面共ににぶい橙色。赤色風化礫の細・粗粒砂を多量に含む。外面ナデ調整。摩耗が激しい。僅かにベタ高台を有する。	
42	" SD 1	青磁 碗	17.0	(2.5)			-56類外面に鎬連弁文。釉は内外面共に灰オリーブ色でやや濁りがある。胎土は灰白色で、やや荒く砂粒を含む。	龍泉窯系 13世紀
43	" SD 1	焼締陶器 播鉢	32.0	(8.0)			外面は灰褐色、内面はにぶい赤褐色。断面は灰褐色で、石英、長石他の細・粗粒砂を含む。口縁部は縁帯を成し、外面は3条の凹線(最下部はごく弱い凹線)、内面は2条の凹線で段を成す。摺目は1単位8条で下から上に施される。	堺?
44	" P24	土師器 鍋	23.0	(3.3)			内外面共ににぶい橙色。赤色風化礫を少量含む。口縁端部は横ナデ。口縁外面に断面が台形状の鏝を貼付。鏝は下部分が煤けている。口縁は内傾気味。	
45	" P33	土師器 杯		(1.4)		5.8	内外面共に橙色。赤色風化礫を少量含む。摩耗が激しく調整不明。底部内面にロクロ目を僅かに残す。	
46	" P36	土師器 小杯		(2.1)		4.3	内外面共に橙色。風化礫の粗粒砂を含む。僅かにベタ高台を有し、底部からやや段を持ちながら斜上外方に立ち上がる。軟質で摩耗が激しい。	
47	" P37	金属製品 弾丸	全長 2.4	全幅 0.8	全厚 0.9	重量 9.3g	鉛製。外面に銅を塗布。	
48	5区 遺構外	土師器 小皿		(1.4)		6.6	内外面共に橙色。砂粒を含まない。底部系切り。摩耗が激しい。	
49	"	土師器 杯	11.6	(2.3)			内外面共に橙色。砂粒を含まない。器壁は薄い。摩耗が激しく調整不明。	
50	"	土師器 杯	10.4	(1.7)			内外面共ににぶい黄橙色。長石他の細・粗粒砂を含み、器表は荒れている。口縁部は僅かに外反する。	
51	"	土師器 杯		(2.3)		6.4	内外面共に橙色。砂粒をほとんど含まない。軟質。底部内面にロクロ目が顕著。摩耗が激しい。僅かにベタ高台を有する。	

出土遺物観察表 3

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
52	" TR - T	土師器 杯		(2.6)		6.6	内外面共ににぶい橙色。石英、赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。底部外面に糸切り痕。内外面にロク口目を残す。	
53	5区 遺構外	土師器 小杯	8.0	1.9		5.8	内外面共ににぶい橙色～淡赤橙色。底部糸切り痕。器表の荒れが激しい。口縁端部は尖り気味に仕上げる。体部はやや直線的に立ち上がる。器高指数23.7。	
54	"	土師器 小杯		(1.4)		5.0	内外面共ににぶい橙色。赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。摩耗が激しい。底部内面にロク口目を僅かに認める。内湾気味に外上方に立ち上がる。	
55	"	土師器 小皿	7.3	1.5		5.2	内外面共に橙色。摩耗が激しい。体部下半の横ナデにより上半分はやや外反気味。底部中央は薄くなる。底部糸切りで平行圧痕を認める。器高指数20.5。	
56	"	土師器 小皿	7.2	1.5		5.8	内外面共に橙色。赤色風化礫を含む。摩耗が激しい。ほぼ直線的に外上方に立ち上がる。器高指数20.8。	
57	"	土師器 杯		(1.9)		7.8	内外面共ににぶい橙色。軟質で赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。摩耗が激しい。底部内面に僅かにロク口目を残す。	
58	" (NE)	東播系須恵器 コネ鉢	25.0	9.2		7.7	内外面共に灰色。チャート、長石他の細・粗粒砂を含む。内表面に最大径6mmの砂礫が存在。内外面ともロク口目、横ナデ。内面は摩耗。口縁端部はやや肥厚し、上方に拡張する。	-3期
59	" TR - T	須恵器 鉢?		(4.1)		13.0	内外面共に灰黄色。茶色風化礫他の砂粒を多量に含む。摩耗が激しい。	
60	" (NE - T)・ TR28 - 層	陶器 壺	19.2	(4.3)			内外面共に黄灰色。断面は褐灰色で淡黄色粗粒砂を含む。口縁部は玉縁状を呈し、外反する。頸部に松灰釉が付着。	備前期?
61	" (NE)	石製品 石鍋	17.0	(4.9)			滑石製。外面灰色、内面灰黄色。口縁部は内湾気味。突帯断面は不等台形を呈し、やや下方に向かって突出している。突帯の側面から下部にかけて煤けている。長崎県ホゲット遺跡産。	13世紀 後半～ 14世紀
62	5区 遺構外	白磁 小皿	11.4	3.7		6.0	X - 1c類。口禿、ヘラ切り。全面施釉、空色を帯びた白色。釉は濃淡があり、底部は薄く掛る。胎土は灰白色で、やや荒い。口縁部は外反気味。底部に僅かにロク口目を残す。	中国
63	"	白磁 小皿	11.7	(3.3)			X - 1c類。口禿、ヘラ切り。釉はやや黄色を帯びた灰白色。胎土は灰白色でやや荒い。貫入が見られる。	中国
64		青磁 碗	13.9	(3.1)			- 5b類。外面に鑄連弁文。釉は灰オリーブ色を呈し、やや濁る。胎土は灰白色で堅緻。	龍泉窯系 13世紀
65	"	青磁 碗	17.0	(3.9)			- 5b類。外面に鑄連弁文。釉はオリーブ灰色を呈し透明度がある。厚めに施釉。胎土は灰白色でやや滑らか。	龍泉窯系 13世紀
66	"	青磁 皿or環	12.8	(2.0)			釉はオリーブ灰色。貫入が入る。胎土は灰白色、やや滑らか。器壁は薄い。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	龍泉窯系 15世紀?
67	"	磁器染付 碗 丸形	9.0	(4.1)			湯飲み碗。外面は花文、内面は口縁部内側に幾何文を帯状に線描き。呉須は淡い青色で透明釉は乳白気味。胎土は白色、やや荒い。	18世紀 後半～ 19世紀 初頭

出土遺物観察表 4

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
68	"	磁器染付 碗 丸形?		(3.8)		3.6	文様は不明。透明釉、コバルト釉。胎土は白～灰白色、やや荒い。輪高台、畳付は無釉。	19世紀
69	"	磁器染付 碗 端反形?	10.0	(2.0)			外面は花卉文?、内面は口縁部に二重圏線。呉須はオリブ灰色に発色。透明釉はやや青みを帯びる。薄手の作り。胎土は白色、やや滑らか。	19世紀
70	"	磁器染付 碗 広東形		(3.2)		4.8	外面3条、内面1条の圏線。文様不明。釉薬発色不足のため淡黄色を帯びる。胎土は白色～乳白色、剥離面は荒く円・裂孔が存在。高台は八字状に開き、畳付まで施釉。	19世紀
71	"	磁器染付 碗 丸形	12.0	(4.8)			外面に魚花文、魚藻文。口縁部外側は二重圏線、内側は四方禪に十字状文。透明釉はやや水色がかかり、呉須は部分的に滲む。胎土は白色、やや滑らか。	景德鎮窯系16世紀末～17世紀初頭
72	"	磁器染付 碗 腰張形	9.4	5.4		3.2	湯飲み碗。型紙摺。外面は高台付近に圏線2条、四方禪文。内面は口縁部内側に輪宝文、圏線1条、見込みに環状の松梅文を配す。透明釉は白濁する。内外面弱いロク口目、見込み回転ナデ。	肥前系 19世紀末以降
73	"	磁器染付 小碗 端反形	8.3	(3.6)			外面に松文。内面口縁部に帯・圏線2条、底部に圏線2条。透明釉はやや青みを帯びる。胎土は透明感を持つ白色、やや滑らか。薄手の作り。	瀬戸・美濃? 19世紀
74	"	磁器色絵 碗 腰張形		(2.3)			上絵付けは赤、青、黄の顔料で筆描き。文様不明。内外面下部に赤色の圏線。胎土は透明感を持つ白色、やや滑らか。薄手の作り。	19世紀
75	"	磁器染付 小碗 筒形		(2.1)		3.6	外面文様は不明。透明釉はやや白濁、灰白色を帯びる。呉須は暗オリブ灰色に発色。胎土は白～灰白色、やや荒い。	18世紀後半～19世紀初頭
76	"	磁器染付 小碗 端反形	9.0	(4.3)			外面上方に帯線、縞状の圏線、下方に帆掛船文。内面は口縁部、見込みに圏線。呉須は青灰色に発色。胎土は白色、滑らか。薄手の作り。	能茶山? 19世紀
77	"	磁器染付 小碗 丸形	10.6	6.1		3.9	外面縦縞に蝶文、蛸文。口縁部内側に圏線、連弧文。見込みに草文。呉須は青灰色に発色。胎土は灰白色、やや滑らか。	18世紀末～19世紀
78	"	磁器色絵 碗 平形	11.1	(4.6)			外面に丸文(赤色顔料)、中に金字「禄」を配す。胎土は白色、滑らか。	近代?
79	"	磁器染付 蓋皿 丸形	10.0	3.0	摘み径 5.8		広東碗の蓋。外面の文様不明、摘み付け根に圏線。内面に圏線、十字文。淡青色の呉須、透明釉はやや青味を帯びる。胎土は白色、やや荒い。貫入が入る。	19世紀
80	"	磁器染付 蓋皿 丸形?		(3.2)	摘み径 4.8		外面摘みに圏線、文様不明。内面に圏線、中に雁1つ。呉須は暗青灰色に発色。透明釉は乳白気味で貫入が入る。胎土は白～灰白色、やや荒く円・裂孔が存在。畳付は釉剥ぎ。	19世紀
81	"	磁器染付 蕎麦猪口 桶形	7.6	5.9		5.5	外面は斜格子文、四方禪文、裾廻りに圏線2条。内面は口縁部内側に圏線2条、見込みに圏線、中に宝文?高台内に角内「茶」銘。高台畳付は釉剥ぎ、褐色を帯びる。胎土は白色、やや滑らか。腰輪高台。ほぼ完形品。	能茶山 18世紀末～19世紀前半
82	"	磁器染付 瓶類		(4.1)		5.8	型紙摺り。外面裾廻りに幾何文。淡青色コバルトは滲み、透明釉はやや青味がかかる。内面は無釉。見込みにロク口目。胎土は白色、やや滑らか。腰輪高台。	明治以降

出土遺物観察表 5

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
83	"	磁器上絵付 小碗? 筒形	6.4	(4.1)			外面上方に帯状の七宝地文、横線は金色顔料で引く。他の色は剥落し花卉の白色が僅かに残る。胎土は白色、滑らか。口縁を薄く仕上げる。	肥前系
84	"	磁器染付 油壺 偏平形		(3.3)			鬚付油壺。外面に折枝文。内面は頸部下より露胎。内面頸部施釉際は橙色に変色、口ク口目が顕著。釉は明緑灰色、呉須は青灰色～暗青灰色に発色。胎土は灰白色、やや荒い。	肥前系
85	"	磁器色絵 瓶 辣蕈形	1.6	(6.8)			外面に上絵付け。顔料は赤、青、黄、緑(剥離して黄褐色)の区画文様(芙蓉手草花文他)、口頸部に捻・縞の連続文。内面は口縁部下まで透明釉、露胎部分は口ク口目を残す。胎土は白色～灰白色、滑らか。	19世紀 ～幕末
86	"	磁器染付 中皿 丸形		(2.1)		8.0	高台脇に圈線。透明釉はやや厚く、高台上半分まで施釉。底部露胎。内面は口ク口目。胎土は白色～灰白色、滑らか。蛇の目凹形高台、断面は三角形を呈す。	近代
87	"	磁器染付 小皿 丸形	10.1	2.8		4.2	内面に呉須を斜めに掛ける。透明釉は淡青灰色を帯びる。見込みは蛇の目釉剥ぎ、アルミナ砂を塗布。外面に弱い口ク口目。畳付に砂粒が付着。高台内兜巾状。胎土は灰白色、やや荒く円・裂孔が存在。	19世紀
88	"	磁器染付 小皿 丸形	10.9	1.9		7.0	型紙摺り。内面に花文帯の他、扇文、花文を散らす。透明釉は水色を帯び、コバルトは滲む。畳付釉剥ぎ。胎土は透明感のある白色、滑らか。薄手の作り。	近代
89	"	磁器染付 皿 稜皿形		(1.6)		4.6	内面に波濤文、竜・雲・富士山?他の文様が見られる。釉はやや水色を帯び、厚目。胎土は透明感のある白色、やや滑らか。削り出し高台、断面三角形。高台内はアーチ状を成す。	17世紀末 ～18世紀
90	"	陶器灰釉 碗 呉器形	13.6	8.2		5.4	内外面共に灰釉は薄塗りで胎土色が勝る。高台内は露胎、にぶい橙色。兜巾状。アーチ状に削られ、脇よりやや深い。外面上半分に僅かに口ク口目が残る。見込みに剥落粒子の熔着が見られる。	肥前系? 18世紀
91	"	陶器灰釉 碗 呉器形	11.8	8.4		5.4	内外面共に黄灰色、外面はやや白濁気味。高台畳付は釉剥ぎを施し、砂粒が付着。貫入が入る。胎土は灰白色。	尾戸? 18世紀
92	"	陶器灰釉 碗 丸形	12.0	(6.1)		4.0	灰釉は白濁、所々黄褐色を帯びる。底位は露胎。全体に焼成不良。高台内の削りは浅く、口ク口目が顕著。胎土は浅黄橙色、赤色細粒子を含み、軟質。裂孔が存在。	18世紀
93	"	陶器鉄釉 小皿 丸形	13.8	4.4		5.4	鉄釉はにぶい黄橙色、オリーブ黒色が降り掛る。見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。底位は露胎で高台は開き気味。高台内は脇よりも深く削り込まれる。胎土は明黄褐色。	19世紀 以降
94	"	陶器鉄釉 小皿 丸形		(3.2)		4.0	鉄釉は暗褐色に発色。底位は露胎。見込みは蛇の目釉剥ぎ後、白化粧土を刷毛塗り。胎土はにぶい黄橙色、白色微粒を含む。	
95	"	陶器灰釉 小皿 折れ縁形		(2.7)		4.6	灰釉は浅黄色に発色。内面に銅緑釉を流し掛け、底位は露胎。折り縁。三日月高台。見込みは蛇の目釉剥ぎ。精緻な胎土で淡黄白色、赤茶色粒を含む。	内野山? 17世紀末 ～18世紀 前半

出土遺物観察表 6

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
96	"	陶器鉄釉 小皿 端反形	12.7	5.1	10.1	4.7	内外面共黒褐色、外面下方は露胎。露胎部分は灰褐色、高台内はにぶい橙色に発色。見込みは蛇の目釉剥ぎ後、アルミナ砂を塗布。完形品。	19世紀
97	"	陶器鉄釉 中皿 端反形	19.4	(3.9)			内外面共に鉄釉は暗褐色、底部露胎。見込みは釉剥ぎ。口縁部内面に白土による波状の刷毛目装飾、透明釉を施す。胎土は橙色、砂粒を含む。	肥前武雄系 18世紀
98	"	陶器灰釉 水甕?	30.1	(9.5)			灰釉はオリブがかった灰褐色、緑釉流し掛け部分は暗オリブ色を帯びる。外面に片切り彫で流水文。貫入が入る。口縁断面は7字状を成す。内面に弱い口く口目。胎土は乳白色。石英粒他を含み、円・裂孔が多く存在。	瀬戸・美濃? 18世紀
99	"	陶器灰釉 灯明皿	8.9	1.8		3.8	内面は灰釉、灰黄色を帯び細かい貫入が入る。外面は口縁部を除き無釉。口縁部外面に煤痕。見込みに線刻が3本入る。目跡有り。胎土は乳白色、裂孔が存在。	信楽系 18世紀後半～ 19世紀
100	"	陶器鉄釉 台付灯明皿	6.3	4.6		4.2	内外面共に鉄釉、浅黄色。釉の焼成不足で青斑状の部分有り。底部は露胎、糸切り痕。胎土は黄灰色～にぶい赤褐色(底部)、微細粒砂を含む。	
101	"	陶器鉄釉 鉢		(2.9)		8.8	鉄釉はにぶい赤褐色に発色。外面低位は露胎で灰黄色。底部はアーチ状に凹む。内面弱い口く口目を残す。砂粒を殆ど含まない。	
102	"	焼締陶器 搦鉢		(3.3)		15.2	内外面共に明赤褐色。堅緻な胎土で石英・長石他の粗粒砂を含み、裂孔が存在。底部の摺目は円弧状。	堺?
103	"	焼締陶器 搦鉢		(7.7)		17.0	内外面共ににぶい赤褐色、底部内面は赤褐色。堅緻な胎土で、長石・石英他、浅黄橙色風化礫の細・粗粒砂を含む。底部円周に焼き台痕。見込みの摺目は8条、円弧状。	堺?
104	" 6W表採	軟質陶器 鉢 鍔縁桶形	9.9	(4.3)			外面鉄釉を刷毛塗り、光沢のない茶褐色。内面は口縁部を除き無釉。胎土は赤褐色、石英微粒砂を含み、円・裂孔が存在。口縁部は外折させる。	
105	5区 遺構外	瓦質土器 焔炉?	13.9	(3.7)			内外面共に灰色、細粒砂を含む。口縁部下に円孔が穿たれる。口縁部より内面にナデ。口縁端部は面を成す。外面は粒状に盛り上がる。	
106	"	軟質陶器 鉢? 筒形		(3.9)		13.8	外面は白色土化粧掛け。内面は露胎。底部ベタ底で、立ち上がり部分を面取り。胎土は淡橙色、砂粒を含む。内外面ナデ。	
107	"	陶胎染付 大瓶	3.8	(10.0)			酒徳利か。外面白化粧土、透明釉。内面は頸部下まで施釉。細かい貫入が入る。内面は口く口目が顕著。肩部で段を成す。胴部に染付銘。口縁部は肥厚し、「く」字状を成す。胎土は灰赤色。	近代
108	"	陶器染付 火入れ 腰折形	12.0	(5.4)			外面は灰釉、透明釉を施し灰色味を帯びる。外面低位と内面口縁部下は露胎。外面に3条の圏線。胎土はにぶい赤褐色、細・砂粒を含む。口唇部に鼓打痕有り。	肥前 18世紀
109	"	陶胎染付 大瓶		(6.0)		10.0	外面は白化粧土に透明釉を施し、灰白色でやや黄色味を帯びる。染付銘か。高台畳付～高台内は無釉。内面は透明釉が薄く掛りにぶい黄褐色。内外面口く口目が顕著。底部壁は薄い。胎土は褐灰色、裂孔が存在。	

出土遺物観察表 7

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
110	"	金属製品 煙管?	全長 (3.9)	全幅 1.1	全厚 0.2	重量 3.9g	鉄製。先端部より1cm間は腐食のため固着している。全体に腐食が著しい。	
111	"	金属製品 煙管 雁首 吹口	全長 (7.6) (7.5)	全幅 0.7 0.9	全厚 0.5 0.5	重量5.1g 8.5g (ラウを 含む)	銅製、銀塗金。接合部内にラウが残存。吹口に彫り文様有り。脂返しを持たず火皿が薄い。火皿の側面形は逆台形。雁首の火皿下部分に使用中の打痕が存在。	19世紀
112	"	金属製品 地藏菩薩像?	全長 4.5	全幅 1.6		重量 11.6g	玩具?鉛の土台に銅塗金。前後型合わせか。背面がなく体部中央に柄があることから張付仏像の可能性もある。表面部分は剥落。	
113	"	金属製品 刀装具	全長 3.0	全幅 2.7	全厚 0.2	重量 19.5g	銅製。はばきの卒塔婆形?繋ぎ部分が破損。	
114	6区 遺構外 (SE・T)	土師器 杯	12.1	(2.3)			内外面共に橙色。器壁は薄い。器表は摩耗が激しい。外面ナデ調整。胎土に赤色風化礫他の粗粒砂を多く含む。	
115	"	土師器 杯		(2.5)		7.0	内外面共ににぶい黄橙色。赤色風化礫の細・粗粒砂を少量含む。内外面横ナデ。摩耗気味。底部から直線的に立ち上がる。	
116	"	土師器 杯		(1.9)		6.0	内外面共に橙色。チャート小礫、赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。内外面に横ナデ。底部立ち上がりに段を持つ。	
117	4区 SK 2 5	土師器 小皿	7.8	1.4		4.0	内外面共ににぶい橙色。赤色風化砂粒を多く含む。底部糸切り。器高指数17.9。	
118	" SK 2 4	土師器 杯	12.4	2.6		5.6	内外面共ににぶい黄橙色。赤色風化砂粒を多く含む。底部付近に弱い段を成す。底部糸切り。器高指数21.0。	
119	"	土師器 小皿	6.8	1.5		3.9	内外面共に浅黄橙色。赤色風化砂粒を含まない。底部糸切り。器高指数22.0。	
120	4区 SD11	土師器 小皿	7.4	1.5		4.0	外面浅黄橙色、内面橙色。赤色風化砂粒を含まない。底部糸切り。器高指数21.0。	
121	"	土師器 小皿	7.2	1.5		4.0	内外面共に橙色。赤色風化砂粒を含まない。底部糸切り。器高指数20.8。	
122	"	土師器 小皿	6.8	1.6		4.4	内外面共ににぶい橙色。石英、チャートの砂粒を含む。器高指数23.5。	
123	"	土師器 小皿	7.5	1.3		4.8	内外面共に橙色。内面はやや赤みがかる。赤色粒を少し含む。底部糸切り。器高指数16.0。	
124	"	土師器 杯	12.6	3.5		7.2	内外面共ににぶい橙色。赤色風化砂粒を含まず、精選された胎土。底部糸切り。器高指数28.5。	
125	" SK 2 4	土師器 杯	12.6	3.3		5.0	内外面共ににぶい黄橙色。赤色風化砂粒を含む。内外面摩耗。底部付近に弱い段を持つ。底部糸切り。器高指数26.2。	
126	" SD11	土師器 杯	13.8	(3.0)			内外面共に橙色。赤色風化砂粒を多く含む。器肉が厚い。内外面摩耗。	
127	4区 SK 2 2	土師器 杯		(2.3)		4.2	赤色風化砂粒を含む。内外面摩耗。底部糸切り。	
128	"	焼締陶器 小壺		(2.3)		6.0	外面暗灰黄色、内面灰黄色。長石他の砂粒を含む。	備前
129	4S区 遺構外	土師器 小皿	6.0	1.4		5.0	内外面共に橙色。精選された胎土。内外面摩耗。器高指数23.3。	
130	"	土師器 小皿	6.2	1.7		3.4	外面橙色、内面にぶい橙色。内外面摩耗。口縁部の一部に煤付着。灯明皿か。器高指数27.4。	
131	"	土師器 杯		(1.4)		5.7	外面浅黄橙色、内面橙色。赤色風化砂粒を含む。底部付近に弱い段を持つ。底部糸切り。	

出土遺物観察表 8

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
132	"	土師器 杯		(1.9)		6.4	外面褐色、内面にぶい橙色。石英、チャート粒を多く含む。赤色風化砂粒を含まない。底部付近に段を持つ。底部糸切り。比較的堅緻な胎土。	
133	"	土師器 杯		(1.6)		6.4	内外面共に浅黄橙色。赤色風化砂粒を含む。内外面摩耗。	
134	"	土師器 杯		(2.0)		4.4	内外面共ににぶい橙色。砂粒をほとんど含まない。底部糸切り。内外面摩耗。	
135	"	土師器 杯		(1.5)		7.0	内外面共に橙色。赤色風化砂粒を含む。焼成不良。	
136	"	土師器 杯		(1.8)		6.2	外面にぶい黄橙色、内面橙色。赤色風化砂粒を含む。底部糸切り。	
137	"	土師器 杯	12.2	3.2		5.5	内外面共に橙色。赤色風化砂粒を多く含む。底部糸切り。内外面摩耗。器高指数25.0。	
138	"	土師器 杯		(2.4)		7.6	赤色風化砂粒を含む。底部糸切り。摩耗が激しい。焼成不良。	
139	"	土師器 杯		(2.0)		6.5	外面にぶい褐色、内面にぶい黄橙色。赤色風化砂粒を多く含む。内外面摩耗。底部糸切り。	
140	"	土師器 杯		(2.0)		7.0	内外面共に黄橙色。精選された胎土。摩耗。焼成不良。	
141	"	白磁 小皿		(1.9)		4.6	白色堅緻な胎土。内面及び外面下半まで透明釉を施す。断面長方形のしっかりした高台。	中国 15世紀
142	"	白磁 小皿		(1.4)		4.6	白色堅緻な胎土。全面に透明釉を施す。アーチ状高台。	中国 15世紀
143	"	白磁 小皿		(1.2)		8.3	白色堅緻な胎土。透明釉。全面に貫入が入る。	近世？
144	"	白磁 小皿		(1.6)		5.4	口縁外反タイプ。白色堅緻な胎土。透明釉。畳付部分は露胎。断面三角形の高台。	中国 16世紀
145	" TR3	青磁 碗	16.0	(4.5)			灰色堅緻な胎土。透明感の強い緑色（オリブ灰色）の釉。貫入有り。外面に鑄連弁文。	龍泉窯系 14世紀
146	" 石列2付近	青磁 碗	14.6	(4.5)			口縁僅かに肥厚。外面に連弁文。その上に大小の界線。灰色堅緻な胎土。釉は緑濁色を帯びる。	龍泉窯系
147	4S 区遺構外	青磁 碗	16.6	(4.0)			灰色堅緻な胎土。釉は緑（灰オリブ色）濁色を帯びる。	龍泉窯系 15世紀
148	"	東播系須恵器 コネ鉢	28.0	(5.0)			内外面共に白灰色。長石、石英砂粒を含む。内外面に横ナデ。口縁部に自然釉。	
149	"	東播系須恵器 コネ鉢	29.6	(7.4)			内外面共に灰色。長石、石英を含む。内面は摩耗。	- 2期
150	"	焼締陶器 擂鉢					内外面共に灰色ににぶい黄色を帯びる。長石他の小礫、砂粒を多く含む。糸線9条。	備前 期
151	"	焼締陶器 擂鉢	27.0	(6.5)			内外面共に橙色、口縁部外面は灰色に発色。石英、長石の砂粒を含む。糸線7~8条。	備前 期
152	"	磁器染付 小碗 半筒形	8.6	(5.6)			外面に菊散らし文、口縁内に四方禪。呉須は滲む。透明釉は気泡を多く含み、貫入が入る。胎土は白色、剥離面はやや滑らか。	肥前系 18世紀後半
153	"	磁器染付 中碗 端反形	11.6	(3.9)			外面に人物文、雷文帯、口縁内に雷文崩しか。透明釉は白濁し、細かな貫入が入る。胎土は白色、剥離面はやや滑らか。	肥前系 1820年代 ~幕末
154	"	磁器染付 小碗		(5.0)		3.8	外面に唐草文か。内面の文様は不明。透明釉は気泡を多く含む。白色堅緻な胎土で剥離面はやや滑らか。	肥前系
155	"	陶器鉄釉 小皿	13.0	(3.4)			内外面共に焼成不良のため淡黄色に発色。胎土は灰色、堅緻。外面体部削り痕が顕著。見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。	能茶山？

出土遺物観察表 9

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
156	"	陶器灰釉 碗		(3.8)		5.0	京焼き風。内外面浅黄色、細かい貫入が入る。胎土は褐色堅緻。	尾戸
157	"	陶器灰釉 鉢	15.0	(5.7)			内外面灰白色。透明釉を施釉、細かい貫入が入る。口縁部上面は無釉。灰白色、堅緻な胎土。	
158	"	陶器三島手 コネ鉢	20.0	(5.7)			内外面共に黒褐色、白化粧土による刷毛目文様。口唇部は露胎。胎土は褐色、白色細粒砂を含む。	肥前系 18世紀
159	"	陶器 片口鉢	18.5	10.4		8.3	外面上位と内面全面に白化粧土を漬け掛け。高台畳付けと高台内は露胎。玉縁口縁、口唇部に重ね焼き跡有り。口縁部下に半円錐状の片口を貼付、穿孔は粗雑。しっかりした削り出し高台。茶色、精緻な胎土。	肥前系 18世紀 ~幕末
160	"	石製品	全長 8.9	全幅 6.9	全厚 2.05	重量 168.5g	砂岩。端部に鼓打痕。	
161	"	石製品	全長 9.1	全幅 4.2	全厚 1.4	重量 90.2g	緑色岩。わずかに弓状を呈する。	
162	" 石列2付近	土製円盤	全長 5.0	全幅 5.0	全厚 1.6	重量 40.8g	にぶい橙色、精選された胎土。0.9cmの円孔。	
163	4N区 遺構外	土師器 杯	12.2	2.6		5.4	内外面共に橙色。赤色風化礫を含む。内外面摩耗。底部付近に弱い段有り。器高指数21.7。	
164	"	土師器 杯	11.6	3.2		5.4	内外面共に橙色。赤色風化礫を含む。内外面摩耗。底部付近に弱い段有り。器高指数27.6	
165	"	土師器 杯	13.0	3.4		5.6	内外面共ににぶい橙色。赤色風化礫を含む。内外面摩耗。底部付近に弱い段有り。底部糸切り。器高指数26.1。	
166	"	土師器 杯		(2.3)		6.7	外面浅黄橙色、内面橙色。精選された胎土。底部糸切り。外底に植物繊維と思われる平行圧痕有り。	
167	" 石列2	土師器 杯		(1.6)		6.4	内外面共に橙色。赤色風化砂粒を含む。底部糸切り。	
168	4N区 遺構外	土師器 杯		(1.8)		7.0	内外面共に橙色。赤色風化砂粒を含む。内外面摩耗。	
169	"	土師器 杯		(1.9)		6.5	内外面共に橙色。赤色風化礫を多く含む。内外面摩耗。	
170	"	土師器 小皿	6.0	1.6		4.2	内外面共に橙色。精選された胎土。丁寧な作り。底部糸切り。底部から体部にかけて高熱の為、海綿状に膨張する。器高指数26.7。	
171	" 石列1	土師器 杯	12.6	(3.5)			内外面共に橙色。赤色風化砂粒を含む。比較的器肉が厚い。内外面摩耗が激しい。	
172	4N区 遺構外 (P22)	瓦器 杯	13.9	(3.9)			内外面共に灰色。断面灰白色。土師器杯と同様の赤色砂粒を含む。外面下半にロクロナデ。器高指数28.1	
173	4N区 石列1	瓦器 碗	16.0	(2.9)			内外面共に浅黄色。チャート、石英の砂粒を多く含む。体部外面に指頭圧痕顕著。外面口縁部下に強い横ナデ。内外面摩耗。土師器のように発色するも瓦器として作られたものか。	
174	4N区 遺構外 集石付近	焼締陶器 播鉢					内外面共に暗灰黄色。石英。長石他の小礫、砂粒を含む。内面は使用による磨滅が顕著。条線不明瞭。	備前 期
175	"	焼締陶器 播鉢		(4.0)		14.0	外面灰黄褐色、内面黄灰色。長石他の小礫多く含む。内面使用による磨滅が顕著。条線10条。	備前

出土遺物観察表 10

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
176	" 石列2付近	焼締陶器 播鉢	27.0	(6.5)			内外面共に器表はセピア色に発色。断面灰白色、精選された胎土。口縁部外面に3条の弱い凹線有り。	備前 期
177	" 集石付近	土師器 鍋	24.8	(2.8)			外面にぶい褐色、内面明褐色。長石粒を多く含む。口縁部内外面に横ナデ。口縁部下に断面三角形の鐔。鐔の下部に煤が付着。	
178	" 石列1	磁器染付 中碗 蓋	10.0	(3.6)			外面に草花文、内面に圏線。呉須は青灰色に発色。透明釉は焼成不良のため白濁する。白色胎土、剥離面は荒い。	能茶山 1820年代 ~幕末
179	4N区 遺構外	磁器染付 碗					外面に唐草文、口縁部内外に二重圏線。透明釉は明緑灰色を帯びる。	景德鎮窯 系16世紀
180	"	陶器 皿?		(1.4)		5.0	白色、精緻な胎土。体部内外面は白濁色の釉が掛り、貫入が入る。外底~畳付けの露胎部分は橙色に発色。	
181	" 石列1	陶器灰釉 碗 呉器形	12.4	(6.6)			灰白色、堅緻な胎土。内外面浅黄色を帯びる。	尾戸 18世紀
182	" 石列1	陶器鉄釉 小皿	12.4	3.9			内外面共に灰褐色。底部外面は露胎。見込みは蛇の目釉剥ぎ、アルミナ砂を塗布。外面体部に他製品の口縁部分が貼付く。灰色堅緻な胎土削り出し高台。	能茶山?
183	4N区 遺構外	石製品	全長 6.75	全幅 6.3	全厚 1.3	重量 76.9g	泥岩。端部に鼓打痕。	
184	"	石製品	全長 8.2	全幅 7.3	全厚 2.1	重量 162.9g	泥岩。端部に鼓打痕。	
185	"	鉄製品	全長 13.3	全幅 3.75	全厚 0.2~0.4	重量 34.0g	腐食が激しく用途不明。刃物類か。	
186	"	古銭 寛永 通宝	直径 2.53	口径 0.57		重量 2.2g	新寛永。無背。「コ」頭通。「八」貝寶。	
187	4区 遺構外	土師器 小皿	6.6	1.6		4.8	内外面共に黄橙色。赤色風化砂粒を含まない。底部糸切り。器高指数24.2。	
188	"	土師器 杯皿	6.8	1.3		4.4	内外面共に浅黄橙色。赤色風化砂粒を少量含む。底部糸切り。器高指数19.1。	
189	"	土師器 杯		(1.3)		6.0	内外面共ににぶい橙色。赤色風化砂粒を含む。内外面摩耗。	
190	"	土師器 杯		(1.7)		7.0	内外面共に橙色。赤色風化砂粒を含む。内外面摩耗。	
191	"	土師器 杯		(1.9)		6.8	内外面共に橙色。精選された胎土。底部糸切り。内外面摩耗。	
192	"	土師器 杯	12.2	2.8		6.3	外面にぶい黄橙色、内面橙色。精選された胎土。底部糸切り。底部内盤と体部接合痕を認める。器高指数23.0。	
193	"	土師器 椀	13.6	(3.0)			外面浅黄橙色。内面にぶい橙色。長石、石英の砂粒を多く含む。焼成は土師器であるが、土師器杯、皿と異なる。瓦器椀として扱うべきか。	
194	"	土師器 杯		(2.7)		6.7	内外面共に橙色。精選された胎土。内外面摩耗。焼成不良。	
195	表採	青磁 碗	14.0	(2.5)			外面に雷文帯くずれ。やや濁りのある緑色釉、貫入が入る。灰色堅緻な胎土。	龍泉窯 15世紀
196	4区 遺構外	白磁 小皿		(1.2)		6.4	内外面共に透明釉が施される。畳付は無釉。断面三角形の高台。内面に目跡有り。	中国 16世紀
197	" TR	東播系須恵器 コネ鉢					内外面共に浅黄色。石英の砂粒を多く含む。内外面に横ナデ。	
198	4区 遺構外	東播系須恵器 コネ鉢					内外面共に灰色。石英、長石砂粒、チャート小礫を含む。内外面横ナデ。	

出土遺物観察表 11

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
199	"	東播系須恵器 コネ鉢		(5.0)		8.4	内外面共に灰色。長石、石英粒を多く含む。 内面は使用により摩耗する。	
200	"	東播系須恵器 コネ鉢		(3.4)		8.2	内外面共に灰色。長石、石英粒を含む。内 面は使用により摩耗する。底部糸切り。	
201	" 石列2付近	焼締陶器 播鉢	32.8	(9.5)			内外面共ににぶい赤褐色。口縁部外面に2 条の凹線。内面に10条の条線。	備前 期
202	4 区 遺構外	磁器染付 小皿		(1.8)		5.4	内面見込みに二重圈線文様は不明(玉取り 獅子か?)。外面の文様は不明。灰白色の胎 土、露胎部分は橙色に発色。透明釉は白濁、 高台内まで施釉。畳付は釉掻きされ、砂が 付着。高台は内傾し断面三角形を呈する。 高台内に工具による放射状の削り痕が残 る。	景德鎮窯 系 15世紀後 半~16世 紀前半
203	"	磁器染付 小碗	8.0	(2.9)			外面に山水文?口縁部内面に四方禪文。胎 土は白色、剥離面はやや滑らか。	肥前系18世 紀~19世紀
204	"	磁器染付 碗		(1.9)		7.4	外面の文様は不明。呉須はオリーブ黒色に 発色。黄白色、堅緻な胎土。全面に透明釉、 畳付は露胎。貫入が入る。断面台形状の高 台。	近世
205	表採	磁器 壺		(2.6)		8.0	灰白色、堅緻な胎土。外面透明釉、乳白色 を帯びる。二次的な火を受けている。	近世
206	4 区 遺構外	陶器鉄釉 小皿	13.0	(3.0)			内外面共焼成不良のため淡黄色~オリーブ 褐色に発色。灰色堅緻な胎土。外面体部上 位に1条の沈線。	能茶山?
207	"	陶器二彩手 大皿		(4.4)		8.8	外面は白化粧土による刷毛目、内面は白化 粧土による櫛刷毛目+銅緑釉。高台無釉。 褐色の胎土。胎土目付着。	肥前武雄 系 17世紀
208	"	陶器 鍋 行平形?	16.2	(3.0)			灰白色、堅緻な胎土。胴部内外面鉄釉、口 縁部は露胎。外面飛鉋による施文。	信楽?18世 紀~19世紀
209	"	陶器鉄釉鉢		(7.3)		11.0	褐灰色、堅緻な胎土。白色粒を含む。内面、 外面上半に鉄釉。底部内面に目跡。	
210	表採	石製品	全長 12.7	全幅 4.4	全厚 3.65	重量 231.4g	砂岩。両端部に鼓打痕。	
211	4 区 遺構外	石製品	全長 9.7	全幅 10.25	全厚 4.65	重量 625.0g	砂岩。中央部に鼓打痕。	
212	表採	石製品	全長 9.6	全幅 3.1	全厚 1.4	重量 66.8g	粘板岩。一方の先端部は欠損する。擦痕。	
213	"	石製品	全長 6.0	全幅 10.2	全厚 2.65	重量 204.3g	緑色岩。表面側縁に擦痕。両端部に鼓打 痕。	
214	4 区 遺構外	土製品 土錘	全長 2.6	全幅 1.3	全厚 0.4	重量 3.2g	土師質。外面にぶい赤褐色、内面青灰色で 白色粒を含む。円筒形。	
215	"	古銭 道光通宝	直径 2.3	孔径 0.44		重量 4.2g	清銭?「八」貝寶	
216	"	古銭 寛永通宝	直径 2.73	孔径 0.6		重量 3.9g	新寛永。21波。「コ」頭通。「八」貝寶。無 背。「永」左払い部分に直径3mmの小孔有 り。	
217	1 区 南1/3 1~2層	青磁 碗		(2.3)		5.6	内外面共にオリーブ灰色。灰色堅緻な胎土。 畳付は部分的に釉が剥ぎ取られ砂粒が付 着。畳付外縁を斜めに面取る。	龍泉窯系 15世紀
218	"	磁器染付 中碗 蓋	11.2	3.3		6.4	広東碗の蓋。外面に山水文(松、帆掛舟)。 口縁部内面に唐草文、見込みは鶯。白色堅 緻な胎土。貫入が入る。能茶山産の可能性 大。	肥前系 19世紀 ~幕末
219	2 区 北中1/3 2層	陶器灰釉 碗 呉器形		(2.6)		5.2	内外面共オリーブ黄色、細かい貫入が入る。 灰黄色堅緻な胎土。畳付は無釉。高台内の 削りが深い。	肥前系 18世紀

出土遺物観察表 12

第 章 考察

1 . 八田奈呂遺跡出土遺物について ~まとめ~

八田奈呂遺跡で出土した遺物は、鎌倉・室町時代を中心にさらに古い時代のものと、上層からは江戸時代から明治にかけての遺物が出土するなど長期間のものが含まれている。また、当遺跡で出土した遺物のうち大部分が包含層出土のものである。包含層においても後世の削平等の影響を受けており、各器種別の共伴関係や各器種の変遷を把握することは困難である。出土した遺物総点数は遺跡全体で数万点に及ぶが、数量は多いものの主として土師器細片が多数を占め、前回の報告書に掲載したものを含めて図示できたのは542点に留まる（試掘調査出土分を含む）。限定された点数ではあるが、これらの遺物について分類整理し、当遺跡の存続期間や性格等を明らかにする為の参考資料として、出土遺物についての概要をまとめておきたい。

遺物出土量を出土地点でみると、出土量の多いのは、4・5・20・21・22・31の各区である。北部の4・5区と標高のやや低い南部の20~22・31区に二分されたような出土状況となっている（図41）。さらに標高が下がると、遺構面は下層に潜り込んでいく。中世以前の遺物はそうした深い層から出土したものである。調査区上部になると出土量は少ないが、輸入品を含めた近世陶磁器が出土しており、さらに上部の調査区外に居住の中心が存在する可能性も考えられる。

出土した遺物を種類でみると、土器類は南部の22区周辺に多く、近世陶磁器類は北部の4・5区で多く出土している（表1）。輸入陶磁器は北部と南部でほぼ均等に出土している状況である。細片を含めた出土遺物総点数に於いてもほぼ同じ傾向が見られた。また、出土した土器類を用途別に見ると、4・5

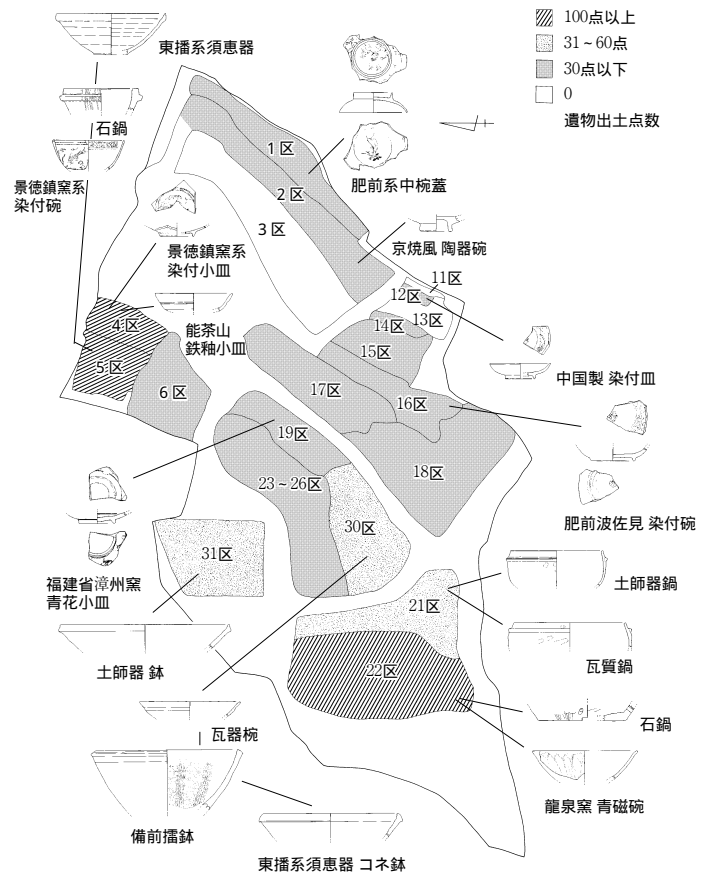
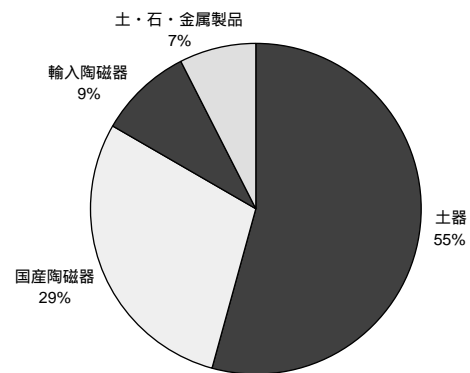


図41 調査区別遺物出土状況図



グラフ1 出土遺物種類別組成

種類	1・2区		4区		5区		6区		12区		14区		15区		16区		17区		18区		19区		20区		21区		22区		23区		24区		31区		種類別合計		
	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層	遺構			
土器																																					
土師器																																					
土師須土器	11	29	1	1	9	10	3	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	220	
瓦器																																					24
五輪土器			2	2	2	1	1																													4	
東播系須恵器・須恵器			6	6	6	2	2																													21	
小計	49				24	3	3							1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	21		
輸入陶磁器																																				250	
青磁	1				4	1	3																													33	
白磁			4	4	2	2	1																													10	
漆付			2	1	1	1				1				1																						7	
小計	1	10			8		8							1																					50		
国産陶磁器																																					
烧締陶器	1	6	3	3	3	3																														34	
施釉陶器	1	12	12	18	18	18								5	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	60		
磁器	1	8	11	22	22	22								4	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	62		
小計	2	27	69		69		69			6	3	3	9	9	7	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	156		
土・石・金属製品																																					
土鏝・円盤					2																															4	
石輪・砥石・石臼他					8	1	1						1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10		
燗罎・刀道具他					1	1	4																													11	
古銭					3																															4	
小計	14		12		12		12						1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4			
調査区別合計	3	100	113		113		113			3	7	3	12	12	3	10	3	10	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	40	
種類別合計																																				536	

数値は全て素洲産物点数である。

種類	年代	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	1800	1900
土師器	1 2 C									
瓦質土器 (案海真のみ)										
須恵器										
東播系須恵器										
石輪										
烧締陶器										
備前・丹波										
堺・その他										
輸入陶磁器										
青磁・白磁										
漆付										
肥前・肥前系陶磁器										
瀬戸・美濃陶磁器										
信楽陶器系										
尾戸系灰釉陶磁器										
熊手山陶磁器										
その他の陶磁器										

1-6区出土遺物 11-22,31区出土遺物

1-6区出土陶器 11-22,31区出土陶器

1-6区出土磁器 11-22,31区出土磁器

()の遺物は中世以前のものを含む。
年代不詳のものは記載していない。
表中の土師器に供開具は含まない。

区では土師器共膳具が多く、20区周辺では土師器共膳具の他に土師質・瓦質煮沸具や焼締陶器調理具・貯蔵具が多く出土している。当時の周辺の自然環境や種々の理由により主たる居住に適した立地を選んだ結果であろうか。

八田奈呂遺跡出土遺物について、遺物出土量の時期的なピークは、中世土器類・輸入陶磁器の出土する13世紀から15世紀と、国産陶磁器を主とする17世紀後半から幕末の2時期に捉えることができる(表2)。しかし、その間を繋ぐ15世紀後半から17世紀前半に於いても、数量的にはやや減少するが途切れなく遺物は存在している。

龍泉窯系青磁碗・皿(13世紀~15世紀)、白磁小皿・皿(13世紀~16世紀)、景德鎮窯系碗・小皿(15世紀後半~17世紀)、福建省漳州窯青花小皿(16世紀末~17世紀初頭)等の輸入陶磁器も、この間に位置付けることができるものである。この時期の輸入陶磁器は一般地域では流通量がさほど多いとはいえず、なかでも福建省漳州窯青花小皿は高知県では希少なものである。後半の出土量ピーク時期になると、17世紀中頃から18世紀にかけての肥前系陶磁器、18世紀になると在地産陶器の尾戸製品、19世紀になると在地産の能茶山製品を含む国産陶磁器が存在する。また、当遺跡では木製品の出土はなく、当時食膳具として使用されていた可能性のある木・漆器碗皿の存在が確認できないなどを鑑みると、表中の遺物出土量だけでは当遺跡の消長を明確にはできない。

出土遺物を種類別にみると、土師器・瓦器・瓦質土器・須恵器等の土器類、各種陶磁器類が多勢を占めるが、土製品、石製品、金属製品も日常生活用品を中心に出土している(表1)。土製品には土錘・円盤があり、石製品には石鍋・石臼・砥石・硯等がある。金属製品

は古銭・煙管・刀装具の他、赤く錆に覆われた板鉄・鉄塊・鉄滓の小塊等が出土している。出土付近の焼土と共に何らかの鍛冶場の存在も想定できる。掲載した出土遺物の中で最も多いのは飲食器類で、土器類55%、陶磁器38%、両者を合わせると出土遺物全体の93%を占める(グラフ1)。さらに、飲食器類の中で陶磁器を凌ぐ出土量である土器類について用途別に分類すると、共膳具が84%を占めている(表3)。陶磁器に於ける共膳具が64%であるのに比して、かなり多いといえる(表4)。これは煮沸具・調理具・貯蔵具としての陶器・鉄鍋が存在する時代背景や、素材の耐久性の問題を考えると当然のことではあるが、土師器共膳具の消費量が際立って多かった結果とも判断できる。また、皿や杯の中には肉眼観察で灯明皿として使用された痕跡のある資料も出土しており、灯明皿として確認できる資料が他にも存在する可能性も考えられる。先述した通り、出土遺物の大部分が包

区分	土師器		瓦器・瓦質土器		計	%
供膳具	223		4		227	84%
杯	42	103	1	0	146	
小杯	4	6	0	0	10	
小皿・杯皿	15	44	0	1	60	
皿	0	6	0	0	6	
碗	1	2	1	1	5	
その他	22		21		43	16%
鍋	0	6	0	1	7	
釜	2	11	0	18	31	
鉢	0	3	0	0	3	
焔炉・火鉢	0	0	1	1	2	
計	(a) 64	(b) 181	(a) 3	(b) 22	270	100%

(a) 1~6区
(b) 11~22,31区

表3 土器器種別出土点数と組成比

区分	磁器		陶器		計	%
供膳具	109		33		142	64%
中碗	24	28	7	8	67	
小碗	10	0	0	0	10	
小杯	2	1	0	0	3	
蕎麦猪口	1	1	0	0	2	
小皿	16	2	5	1	24	
皿	2	14	2	1	19	
大・中皿	2	0	1	0	3	
蓋皿	2	1	3	0	6	
瓶類	3	0	3	2	8	
貯蔵具	1		19		20	9%
壺・小壺	1	0	2	5	8	
甕・水甕	0	0	2	10	12	
調理・煮沸具	0		48		48	22%
鉢	0	0	7	4	11	
片口・こね鉢	0	0	9	7	16	
搗鉢	0	0	10	9	19	
鍋	0	0	1	1	2	
その他	4		8		12	5%
油壺	1	0	0	0	1	
香炉	1	0	0	0	1	
火入れ	1	0	1	2	4	
灯明皿	0	0	4	1	5	
戸車	1	0	0	0	1	
計	(a) 67	(b) 47	(a) 57	(b) 51	222	100%

須恵器を含む。
(a) 1~6区
(b) 11~22,31区

表4 陶磁器機種別出土点数と組成比

含層出土のものであり、各種別で共伴関係を把握できるものが少ない。また、土師器類は破片が多く、各々の資料に該当する時期を明確にすることは困難であることから、表2には土師器共膳具は含めていない。しかし、出土遺物から八田奈呂遺跡の性格や時代背景を考察するのに土師器共膳具は量的にも重要な位置を占めており、ある程度の分析は欠かせないと判断した。

以下、これらの八田奈呂遺跡で出土した土師器共膳具（瓦器を含む）227点について、器種別分類に従って概要を述べる。なお、文章中の出土遺物番号は、（報告書番号 - 図版番号）で表している。

土師器共膳具としては、杯・小杯・小皿・皿・椀が出土している。各々の出土量は表3に示した通りである。今回出土した土師器共膳具は、すべてロク口成形で底部外面に回転系切り痕が施され、その痕跡を明瞭に留めるものが比較的多く120点余り存在する。分類は、口径及び口縁部、底部の形態的な特徴で行った。全体の形状の分からないものは除外した。

杯は、総点数146点で土師器共膳具全体の65%に当たる。底部破片が多く、全体の形状の分かるものはわずか27点である。杯は、器高3cm以上、口径10cm以上のものとする。口径及び口縁部・底部の形態的な特徴で分類する。

A類：口径13cm以上で、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるもの。

A - 類：（ - 46・47・48・49・50）口径14cm以上で口縁部が外反する。なかでも - 48は大振りで、口径18.2cm、器高3.8cm、底径10cmのものである。

A - 類：（ - 216・260）口径13cm代で、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁端部は丸味を帯びる。 - 260は口径13・7cm、器高4.2cm、底径7.7cmを測り、口縁の一部に煤が付着。器壁が厚く、 - 216とは異なる形態を示す。

B類：口径10～12cm代で、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるもの。

B - a類：（ - 20・22・25・214、 - 4・124・192）器壁が薄く平底のもの。 - 124の口径12.6cm、器高3.5cm、底径7.2cmが平均値である。 - 192は器高が低く2.8cmを測り、形態的には皿と明瞭な差は認められない。

B - b類：（ - 109・208・209・211・212）B - a類と同形態であるが、口径が10～11cmとやや小振りのもの。器高指数が60%以上をしめす。口縁端部が丸味を帯びるものと、やや尖るものが存在する。 - 211は口径と底径の差が少なく、器高指数70%のものである。

B - 類：（ - 21・24・35・167・215、 - 171）底部が厚く台状の底部を有し、内湾気味に立ち上がり口縁部に至るもの。口径11～12cm、器高4cm前後、底径6～7cmを測る。口縁端部が丸味を帯びるものと、やや尖るものが存在する。 - 167と - 171は他よりも器壁が厚めで、体部外面下半の強いナデにより段差が生じる。

B - 類：（ - 29、 - 118・125・137・163・164）口径が12cm代で、底径指数が40～47%を占め、口径と底径の比率が2対1のもの。器高は2.6～3.4cmを測る。 - 29は器高が4.7cm、器高指数39%を示し、形態的にはA類に分類できる。

小杯は、小皿と法量的に見ると大差はなく、分類基準は明確にできないが、口径と底径の差と、器高の割合からみた特徴で10点を小杯とした。全体の形状の分かるものでは法量の平均値は、口径7cm、器高1.8cm、底径4.7cmを測る。器高指数は23～30%前後である。

A類：口径6～8cmで、体部は外上方に直線的に立ち上がるもの。

A - 類：(- 30・56・189・190・273)口径6～7cmで、底部が厚く口縁部にかけて尖り気味となる。 - 273は体部下半に横ナデが施され、上半部は内湾気味となる。器高指数は30%前後を示す。

A - 類：(- 1、 - 53)口径8cm前後で、器壁が薄い。 - 1は横ナデにより外反して立ち上がる。器高指数は23%前後を示す。

B類：(- 188)杯皿として分類するもの。口径6.8cm、器高1.3cm、底径4.4cmを測り、器高指数は19%を示す。口径に比して器高の比率が低く、厚い底部から外反して立ち上がる。杯B - - a類の - 124・192を縮小させたような形態である。

小皿は、総点数57点で土師器共膳具全体の26%に当たる。全体の形状が分かるものが多く45点存在した。口径5～10cm、器高1.2～2cm、底径4～6cmの範囲に留まる。口径と底径の比率(底径指数)及び形態的な特徴によって分類する。

A類：(- 168・279)底径指数が90%以上で、口縁が直立気味に短く立ち上がるもの。法量の平均値は口径5.8cm、器高1.4cm、底径5cmである。

B類：底径指数が80%代で、底部が厚く口縁が短く立ち上がるもの。

B - 類：(- 171・219、 - 56)口径7cm前後、底径6cm前後のやや大振りのもの。 - 171は横ナデにより外反気味となる。

B - 類：(- 37・111・169・223・224・227・282、 - 129)口径6cm前後、底径5cm前後のもの。 - 224は横ナデにより外反気味で、口縁端部は丸味を帯びる。

C類：底径指数が60～70%代で、底部から斜上外方に立ち上がるもの。厚底で口縁部は尖り気味。小皿の中では個体数が最も多い。

C - 類：(- 13・15・33・85・110・172・217・218・220～222・225・226・287・314・317、 - 55・170・187)底径指数が70%代で、口径6～7cm前後のもの。 - 287は口径10cm、器高1.5cm、底径7.4cmと大振りで、口縁部は外反する。 - 172・217・220・221・226・317は体部が内湾気味のもの。

C - 2類：(- 170・288・315、 - 122・123)底径指数が60%代で、口径7cm前後、底径4cm代のもの。器壁は薄く口縁部は尖り気味。 - 315は器壁が厚く、口縁部は丸味を帯びる。

D類：底径指数が40～50%代で、器壁が薄く平底の底部から外上方に直線的に立ち上がるもの。

D - 類：(- 119～121・130)底径指数が55%前後で、口縁部が外反気味のもの。この4点はすべて4区から出土したものである。 - 130は灯明皿。

D - 類：(- 95・261、 - 117)底径指数が50%前後で、口径と底径の比率が2対1のもの。杯B - 類の形態と類似するタイプ。 - 95は灯明皿。体部下半の横ナデが強く口縁部は内湾気味となる。

皿は、器高が3cm以下のものである。出土点数は僅かで、前回の報告書に掲載した6点に留まる。計測可能なものはわずか1点で(- 254)口径10.4cm、器高2.4cm、底径6cmを測り、底径指数は58%である。灯明皿か。底部破片で測る皿の底径平均値は7.3cmである。杯・椀類の中には法量

的・形態的にも似通っており、杯皿或いは椀皿といえるものが存在することから、それらとの機能的な併用の可能性も考えられる。また、底部破片の中にも皿の形態を示すものがあり、実数はもっと多いと思われる。

椀は、土師器と瓦器を合わせて5点存在する。土師器椀として - 52・295、 - 193を、瓦器椀として - 112、 - 173を分類したが、 - 112以外はすべて浅黄色～黄橙色を呈する。いずれも焼成は土師器だが、瓦器としての特徴を備えているものである。 - 52は底部に断面三角形の微隆起を貼付したものの。体部中位から上部にかけて屈曲し口縁に至るタイプであろう。底径は4.2cmを測る。 - 112は外面口縁部下に強い横ナデが施され、色調は灰色を呈する。 - 173・193は体部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がるタイプ。いずれも口縁部破片であり、口径はやや不正確になるが11.6～16.9cmの間に分布する。瓦器は他に杯と小皿が存在する。杯 - 172は口縁部が外反気味で、色調は灰色を呈する。胎土は土師器と同様の砂粒を含む。瓦器小皿 - 53の法量は口径8.6cm、推定器高1.4cm、推定底径6cmである。この瓦器皿と土師器椀 - 52は、土師器杯A類・土師器皿 - 51等と同遺構22区S K21より出土したものである。

以上、八田奈呂遺跡から出土した遺物の特徴や出土状況等の概要をまとめた。冒頭に記述したように当遺跡は長期間にわたり機能し、現在に至っている。当地で生活を営んだ人々が使用したであろう食膳具を中心とした日常雑器類の豊富な出土、或いは輸入陶磁器やその他の陶磁器を使用した有力者の存在をうかがわせる遺物の出土は、多くの遺構と共にどういう意味を持つのか。さらに視点を広げて出土資料を地域史の中に位置付ける考察が必要である。

〔参考文献〕

- 江戸秀輝『八田奈呂遺跡』高知県埋蔵文化財センター 1999年
前田光雄・松田直則・廣田佳久『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会 1992年
吉成承三『姫野々城跡』葉山村教育委員会 1995年
吉成承三『姫野々城跡』葉山村教育委員会 1996年
松田直則・下村公彦『田村遺跡群』第10分冊高知県教育委員会 1986年
中世土器研究会(編)『概説中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年
出原恵三・泉幸代・浜田恵子・藤方正治『小籠遺跡』高知県埋蔵文化財センター 1997年
出原恵三・吉成承三・浜田恵子・佐竹寛『陣山遺跡・陣山北三区遺跡』高知県埋蔵文化財センター 1997年

2 . 八田奈呂遺跡の文献に見える情勢と調査成果との検証

今回の八田奈呂遺跡の発掘調査成果と、文献に残る八田の歴史との間には、数多くの興味深い共通点を見つけることができた。それは、文献に残された内容が、発掘調査によって実際に、具体的に物的に証明されたということと、発掘調査によって得られた成果を、文献によって具体的に位置付けることができ、その社会的な情勢を知ることができたということである。古代・中世・近世という時代の変化の中での八田の社会の変化といった時間的内容と、八田奈呂遺跡の範囲内における時代の流れの中で変化していく屋敷等、建物跡の位置的变化といった空間的内容を、調査成果と文献が物語っているのである。ここで扱う八田の歴史に関する文献については、地元の伊野町八田在住の森秀樹氏が八田の歴史資料を収集され調査・研究を進められ出版された『八田のことども』を活用及び引用させていただいた。調査成果における八田奈呂遺跡の時間的・空間的内容を説明するための、出土遺物の種類・時代・出土場所の内容は、本章の「1 . 八田奈呂遺跡出土遺物について」のとおりであり、この結果を基本にして、文献に記述された内容との検証を行っていく。

まず、空間的内容について、調査区毎の出土遺物の時期傾向だが、考察1にあるような変化を見る事ができる。古い時期については文献での明確な記載はないが、長宗我部地検帳の時期になると、この調査区の中に具体的に当てはまる記述が地検帳に見られる。内容については後に記す。また、近世に入ってからについても、八田奈呂遺跡に関係の有る記述を歴史的文献の中に見る事ができる。

発掘調査成果の側面から見ると、11世紀以前の遺物も出土しており、その時期を考えると、地検帳の八田村の部分に、「うづら坂のにしあまたれ石より北へはつばきがとうおほむまこと中山のうねかきり八田之庄堺の…」とあり八田荘園のあったことを知ることができる。文治元年(1185)源頼朝は吾川郡を以って京都六條の若宮八幡宮に献じたと吾妻鏡に記されていて、これよりこの八幡宮の社領で吾川庄と言う荘園になったと言われている。この吾川庄の区域については、吾川郡全域と旧伊野町より南の吾川郡の平野の部分との二通りの見解があり、吾川庄の地名がどこにも残っていないのを不思議とし、前記の地検帳に載る八田庄をその名残でなかろうかという説がある。鎌倉初期より八田は荘園の中にあつたことは確実であり、それ以前はどうであつたかということについては多分荘園であつたであろうという説である。

次に、村内に居住する武士(一領具足)について見てみると、秦氏録によると八田に給地を持つ一領具足は55人にして、その中で村内に居住するのは八名であるが、その内容を地検帳より要約すると氏名は次のとおりである。奈留主膳・井沢久兵衛・森沢泉太良・橋田木兵衛・松田縫助・森与兵衛・森沢新左衛門・田中善七良である。この八名のうち、奈留主膳、森沢泉太良を除く他の六名はその昔の荘園の名主より武士化したものの姿である。そして森沢泉太良を除く他の七人は、何れも多くも所領を持っていて、その半ば以上を自ら耕作し、残りを他作さしている。奈留主膳が五町三反、井沢久兵衛が五町二反等の広反別の耕作が見られる。特に井沢久兵衛が自己の名田をさしおいて、純然たる農民と見えるごとく、他武士の給地四反の耕作をしている複雑な姿は奇異に思われる。中央では既に兵農分離が行われていたが、土佐では地検帳にも見られるように、上級一領具足でも同一人が給人であり名主であつて、かつ広反別を自作するのみでなく小作をもしているという

中世の姿を色濃く残している。そこで、これらの労力はどのようにして得られたかは、被官や下人を所有していて、その労力で耕作したということである。その被官や下人の耕作が、地検帳にどのように現れているか見てみると、一例を見ると、ダイノ村にある田中善七良の私有地、秋恒という名田一反二百坪の地を新衛門が耕作し、その中にヤシキがあることを示している。ヤシキがあれば、居住者の名が記されるのが普通であるがそれがない。新衛門の屋敷は西窪に在るので、これは新衛門の屋敷でなくて名主である田中善七良の被官か下人が住んでいることがわかる。この様な例は奈留主膳や他の一領具足や名主の所領地にも見られる。また一領具足や名主達は、その屋敷内に被官や下人を住まわしていたので、これらによりその広反別の手作地を経営していた。

そして『八田のことども』では、この一領具足達の子孫と思われる人々の姓について記述されているが、これは地検帳に載っている屋敷の位置、屋敷墓、先祖代々の墓及び系図等より推定した。奈留主膳屋敷地は、地検帳記載面積と殆ど同じ面積にて、今もヤシキと呼ばれ畠地として残っている。そしてその一隅に五輪塔が一基立っているが、その子孫に関しては手掛りが全くない。松田縫助の家は山内時代に入ると井関と改姓して、百人衆並郷土に取り立てられるが後断絶している。その屋敷跡に一基の五輪塔がある。他の六名もそれぞれ改姓しているが、山内氏入国時激しく抵抗して多くの犠牲者を出した浦戸一揆の時には、直ぐ近くということもあって好むと好まざるに拘らず参加せねばならなかったであろうがそれと深い関わりがあったのことでなかるうか。奈留主膳は八田村筆頭の武士である。この紛争に巻き込まれて八田を去ったのかも分からない、とある。

地検帳に載る八田村の総ての名田の合計は四十二町八反で、全耕地の四十三%を占めている。昔には荘園は多くの名主名田から成立していた。それらの中で一般の百姓名田（百姓の名前をつけた名田）は、南北朝時代（1333～1392）から分裂動揺が起こり成長や没落が多くなった。守護細川氏が土佐を退去するまでは国中の秩序は保たれていたが、戦国期に入ると恩賞給与の対象として取り扱われるようになり、長宗我部氏が台頭してからは没落した名主の所領や打撃を受け減封された名主の所領が没収され、恩賞給地として支給されたとある。八田は、統治者であった初期の吉良氏は本山氏に亡ぼされ、その本山氏は長宗我部氏に敗れ、長宗我部氏より出ていた吉良氏も天正の末期に本家長宗我部氏に亡ぼされる等領主の度々の変動交替の荒波を余儀なくされた。これ等は八田の名主の没落、ひいては名田の半分余が給地化した大きな原因の一つであろう。

そして慶長5年（1600）9月に起こった関ヶ原の戦いにおいて、敗れた西軍に加担した長宗我部氏は領国土佐を失って土佐を去り、代わって掛川の城主山内氏が慶長6年1月入国した。長宗我部氏の遺臣である一領具足は武士の身分を失い、知行権は没収され、耕作権のみを認められた百姓となった。また名田を持つ武士や百姓にあっても、名田の特権はなくなり、これも耕作権のみを許された百姓に位置付けられてしまった。そして武士や名主に隷属していた被官や下人にとっては、山内氏の統治上の犠牲となって、その開放は遅れ、藩政の中期まで待たねばならなかった。

ここまで八田の一領具足と社会的背景について述べてきたが、この中でも八田の奈呂に屋敷を持っていた奈留主膳について、さらに関連することを紹介していきたい。

『八田のことども』の中の「西国第二十八番札所吉峯寺（良峯寺）」についての記載を紹介しながら調査結果と比較したい。森氏が良峯寺に関して接した一番古い文献は、長宗我部地検帳の八田村

の部（1597年成立）であるが、それには1597年に奈呂に良峯寺が在ることを示している。なおよく説明をすると良峯寺は奈留主膳が長宗我部氏より給せられている拾代（六十坪）の敷地に在って、その位置は奈留主膳の屋敷（それは土塁で囲まれていたであろう）の上にある。そして堂より別に、良峯寺ヤシキが在って、それは検地によると延びの面積が十二代二分あり、従来の認められている面積（拾六代）と合すと二十八代式分（百六十九坪余）の広さでこれも奈留主膳の給地である。そしてその位置は記載より良峯寺に近いとは推定されるが接続するのかどうかは確定できない。奈留主膳の屋敷の所在地は後述するように確定している。

また地検帳には、吉峯寺や良峯寺に関して、奈留主膳が彼の給田の内のナベクラや奈呂にある水田合計六反余を寺の経費にあてるため差し出しているのを示しているという記述と、良峯寺のみでなく山王権現や阿弥陀如来の御供田となっているという記述等がある。以上が慶長2年（1597）の時点で分かっている姿であるが、その当時現在の新田の観音堂の地はどうなっていたのであろうか。地検帳では、ここには観音堂はなく地藏堂があつて、三十六坪の境内は荒れている。この地も奈留主膳の給地である。これらから言えることは、良峯寺（吉峯寺）は奈留主膳と深い関わりをもち、非常に信仰心が厚いと推測される彼から大きい経済的援護を受けていて、あたかも奈留氏の氏寺のような感である。

それではこのような奈留氏とはどんな人物であろうか。地検帳による以外では知ることはできないが、それには屋敷が載っており、現在でも「屋敷」と呼ばれて残っている字ナ口1471-9・1471-10・1471-16・1471-12番地に、土塁をもって囲まれていたであろう壹反百六十九坪ある上級の屋敷地に居住している。彼の他村での給地までは求められていないが、八田のみでも十町余の田畑を給され、八田在住の長宗我部家臣達の筆頭の有力者である。しかしこの時より僅か3年の後である慶長5年（1600）に関ヶ原の戦いが起こったが、その戦いに敗れた西軍に加担した長宗我部氏は領国を失い、山内氏が新しい領主として入国し、長宗我部氏の家臣である一領具足は、武士として有したあらゆる特権を失い、耕作権のみを許された百姓身分に位置付けられてしまった。地検帳に載る奈留主膳以外の八田在住の一領具足七名の子孫は、後には一名は郷土他は百姓として存在しているが何故か皆姓を変えている。しかし、奈留主膳やその子孫に関しては、何一つとして手掛りがなく分からない。山内氏入国時の浦戸一揆やその後の大きな変動の中に巻き込まれて、八田を去ったのではないだろうか。その屋敷跡に一基の五輪塔があつたのみである。しかし八田を去らなかつたとしても、百姓身分となってしまつては、良峯寺に対する援護もほとんど不可能となつたことであろう。また他の武士達も重い年貢を負う百姓身分になつては、奈留氏に代わつて良峯寺を庇護できるものではなく従つて寺もまた没落していったであろう。これらのことを裏付けるかのよう、伝説や文献も残っている。

ここまでで紹介してきたことで、奈留主膳の屋敷地にあたる部分は、八田奈呂遺跡発掘調査では調査区の1～3区及び調査区1区の上段に隣接する場所に該当することになる。また良峯寺が在つたとされる場所は調査区近くの上段に、ここではなかりうかと予想できる土地の形状で残っている。このことについては、調査成果である出土遺物の内容等にもあてはまり、位置的な問題も地検帳と調査結果がほぼ合致すると言って良いと思われる。この地検帳の時代についての歴史は文献に記載

されたことが証明されたことになる。しかし、長宗我部氏の時代になる以前の八田奈呂の社会情勢であるが、かつて荘園であった頃から長宗我部時代が訪れるまでの変化の多い時代に奈呂の地に限って見るとどうであったかということだが、調査成果の出土遺物及び検出遺構を考えると、古くからこの地では、有力者が屋敷を構えて、同時にある程度の人数と共に生活を営んでいたことは確実である。とすると、移り変わる勢力争いの最中で、奈留主膳に続く一族が代々栄えてきたのか、或いは、世の中の変化に応じて屋敷の主は変化してきたが、それぞれが繁栄し続けてきたかという両者のいずれかということとは断言できない。武士（一領具足）である奈留主膳の一族が社会の変化に対してどのように自分の立場を決定していったのかという点が残された疑問である。

また『八田奈呂遺跡』に記載した調査成果の中で、調査区20区で検出された道路状遺構については、地検帳に登場する寺院、観音堂、地藏堂等、また信仰心の厚い屋敷の主といった諸条件を考えると、この遺構はいずれかの類の御堂に続く参道である可能性が高くなってきた。調査前からこの道路状遺構の延長線上には神様が祀られており、このことは中世の時代から何らかのつながりが存在するのではなかろうか。また屋敷地の位置の変化として、古代から中世にかけては元々調査区20区・21区・22区周辺を中心に多く存在していた掘立柱建物が後には北東方向に丘陵を登っていくという結果が見られる。この理由としてまず一つ考えられることは、調査区20～22区の土地の状態だが、ほぼ砂礫土で構成されており、この調査区の東方には谷があり、ある時期に土石流等に被災し位置を変えたということと、災害にはあわずつも谷からの流水の影響で条件が良くないといった理由などが考えられる。

次に、近世、山内時代の八田奈呂遺跡において考えられる社会情勢との関係及び文献等から見られる事であるが、調査成果では奈留主膳が記録から見えなくなったにもかかわらず、依然として輸入陶磁器等の遺物の出土が見られる。つまり、この地には有力者が存在し続けているということだが、近世になり一時期遺物の影が薄くなる時期があるが、このことについては、二つの理由が考えられ、一つは、長宗我部時代の一領具足の衰退により実際に奈呂地区の社会そのものが一時的に衰えていたという点があげられる。そしてもう一つは、この時期は国産の陶磁器の流通が本格化する前であり、実際は遺物として現在に残っていない木製品が多く日常生活において使用されており、そのため調査成果のような状況が現れているのではということである。この二つの理由のどちらかということだが、自分としては後者の可能性が高いのではと思われる。それは、文献に山内時代藩主の狩猟に関する記述があることなどから考えられた。これについても『八田のことども』に記述があるので部分的に紹介したい。

八田の東山を含む荒鞍の山々は山内時代藩主のよき狩猟場であった。森氏の少年時代祖父より彼の寺子屋時代に度々猪狩が行はれて、村の男達は勢子（狩において大声をあげて鳥獣を追い出す人夫）として召集せられ、その日は寺子屋も休みであった。そして狩猟が終わると獲物は荒鞍に集められていたという話を聞いておる。こんな話は森氏達以上の年齢の者にあっては多くの人々が幼年時代古老より聞いている。鉢巻山から御膳場あたりは特に良い狩猟場であったとのことであるが、それを物語るかのように昭和21年鉢巻山開拓開始当時には、猪を待伏せする石垣が未だ所々林の中に残っていた。土佐州郡志には、御膳場は二代藩主忠義（1592～1664）が狩猟の時必ず此処にて食事

をとったことより生まれた名であるとあるが、八田にても藩主のそのような所との言い伝えがある。

皆山集には延宝2年(1674)2月29日に行われた鹿狩りにおいて、八田に関しかなり詳しく興味深い貴重なことが記載されている。要約すると、「その時の狩猟の人数は藩士以外では勢子が居る。先づ鶉坂(荒鞍の峠)より西の椿ヶ峠(つばきがとうげ)へかけて行はれ、椿ヶ峠にて鹿二十頭ばかり出て藩主が二頭鉄砲で打ち藩士が三頭射留めた。次の山である松茸打(どこであろうか)では、鹿は出ず、其の次のとち谷にても鹿は出ず兎一匹打ち殺した。食事の後の次の山である楠打(くすのきだおでないか)では、鹿百頭程出て七頭獲ったがおおかた逃がしてしまった。日暮れになって帰ったが勢子共は九十二、三頭打ち殺した」とある。

今では想像もできない驚くべき話である。これより七十一年後の延享元年の法令にては、荒倉の山々が猪や鹿が多くなって百姓が難儀しているため鹿狩りが許されたことが載っているが、野生の動物の宝庫であることが分かる。東山はお留山として立ち入り伐採を禁止されていたから、大樹におおわれ椎をはじめたくさんの木の実などの食糧が豊富であったためであろう。

このように荒鞍山では藩政初期より狩猟は度々行われたようであるが、今分かっているその時期を書くとき次のものである。(時期・摘要の順で記載する。)

享保16年(1731)・伊野町史、文化4年(1817)・郷土三宮氏の年譜より、文化8年(1811)・郷土三宮氏の年譜より、文化12年(1815)・郷土三宮氏の年譜より、文化13年、文化14年、文政2年(1819)・郷土三宮氏の年譜より、天保12年(1841)・千頭八田庄屋根拠より、安政3年(1856)3月・眞覚寺日記より、文久2年(1862)・郷土三宮氏の年譜より、元治元年(1864)11月4日・眞覚寺日記より、元治2年10月4日・眞覚寺日記。荒鞍街道に近く猪九頭を足を空にして吊りしてあった。慶応3年(1867)4月・眞覚寺日記。猪十六頭獲る(内藩主五頭撃つ)。

前の郷土三宮氏、庄屋千頭氏の狩猟場所は記載されていないが、東山を含む荒鞍の山々であろう。これはごく一部の文書から見たものであるが、それにしても藩政終期にはこんなに頻繁に行われている。鹿、猪狩は、武芸奨励、用兵練習という目的もあつてのことと聞いているが、藩政全期を通じてこんなに度々行われたであろうか。また上の内容を見て分かることは農閑期にほとんど行われている。これは勢子として多くの百姓を、そしてその隊長格として郷土が必要であったためだろう。と述べられている。

以上のような諸事情から藩主山内氏と八田奈呂の関係が考えられるわけで、そのための施設の・人的な準備がなされていたのではないだろうか。

それともう一つ蜜柑に関する記載があるので、それを紹介してみる。平尾道雄氏の著土佐藩農業経済史に蜜柑に関して、要約すると、次のようなことが書かれている。

「二代藩主山内忠義の慶安四年の手紙には、恒例の將軍家へ献上の蜜柑輸送のことが載っていて、当時土佐で栽培されていたことが考えられる。また元禄八年(1692)東孕に蜜柑栽培の為果樹園が指定され、同18年山奉行が見分した結果、其の適地であることを認め地面七反を決定している。そして後年一般に作られたものに薄皮蜜柑、唐蜜柑、仏手柑、温州蜜柑、うすきつ蜜柑があった」と。

皆山集には紅蜜柑のはじまりについて、寛政元年(1789)11月南京船が安芸郡羽根浦に漂着した。その船頭を朱心如と言ったが、この時船に載せていた紅蜜柑を出会いの人々に贈ったのを諸所に蒔

いて後盛んとなったものと述べている。

古老の話によれば子供の頃（明治20年頃）には、薄皮蜜柑、唐蜜柑、紅蜜柑等の古木を二、三本屋敷内に見る家が多かった。また小妻奈呂等の山手の家々では屋敷近辺に多く植えられていて、年末より正月にかけて、天秤棒でになって高知や伊野方面へ売りに行ったと聞いておるとのことであった。...とある。ここでも八田奈呂他と藩主山内家との関係の一つになるのではないだろうかと思われる記載が見られるわけである。

一つ明らかでない点は、藩主山内氏が八田へ訪れた際に誰が、どういった人物が中心的に対応していたのか、或いは山内家直営的な屋敷を構えていたのかというところである。

『八田奈呂遺跡』に紹介してある調査区の1区～6区では近世の陶磁器が数多く出土しており、中世から近世へどのように社会的環境が移り変わっていったかというポイントがあったわけだが、その問題点を、『八田のことども』に集約されている幾つかの文献によって明らかにすることができた。また、歴史的文献の記載と調査成果の互いに証明しあうと言える結果を得る事ができた。その中で荘園時代から武士（一領具足）そして戦国の時代を経て、徳川幕府の時代（高知の場合山内氏）へと移り変わって行く歴史そのものを見る事ができた。その歴史の中で一地域における盛衰のドラマの一面が具体的事実として蘇ったわけだ。

【参考文献】

森秀樹『八田のことども』1987年

写真図版



1区下 北側



1区下 南側



2区下 北側



2区下 南側



3区下 北側



3区下 南側



1 ~ 3区



4・5区

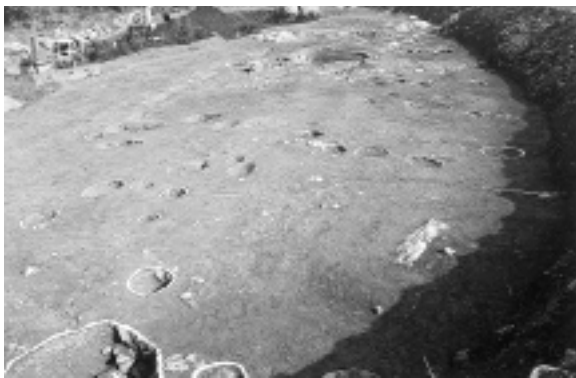
1 ~ 5区 土層断面



1 ~ 3区 検出状況



S R 2 (3区) 検出状況



S R 3 (3区) 検出状況



4・5区 検出状況



4 S区 検出状況



4区 完掘状況



5区 完掘状況



石列 (4区)

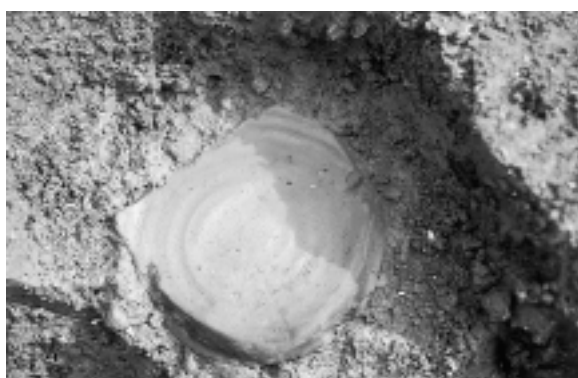
1 ~ 5区 調査状況



P 22



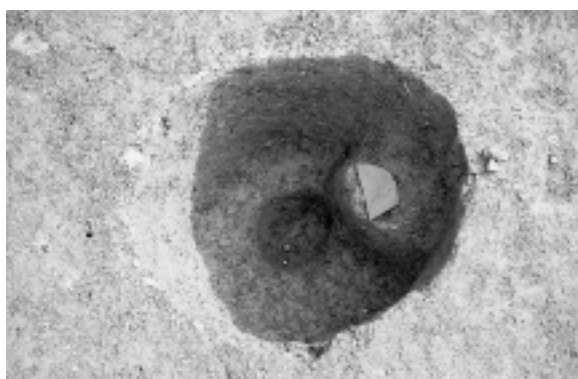
P 22



P 24



P 25



P 28



P 28



包含層



包含層

5 区 遺物出土狀況



5区包含層



5区包含層



5区包含層



4区 SK25



4区 SK25 (上層)



4区 SK25 (下層)

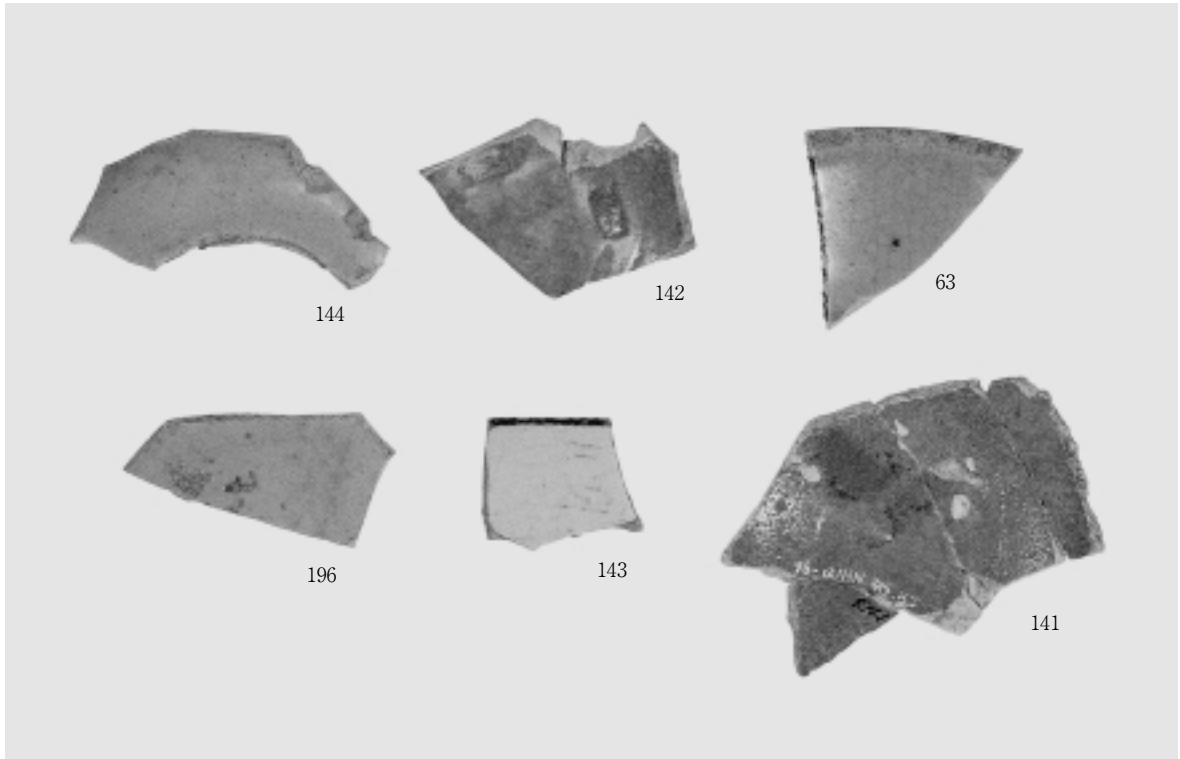


4区包含層

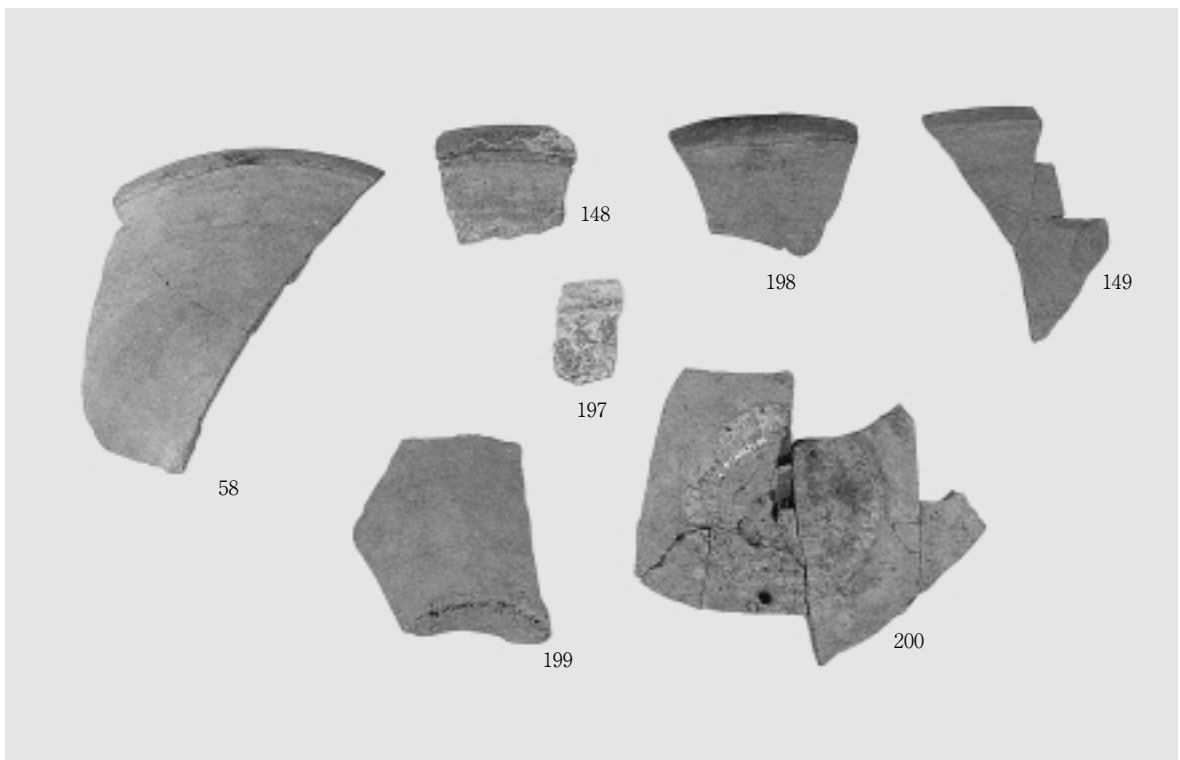


4区包含層

4・5区 遺物出土状況

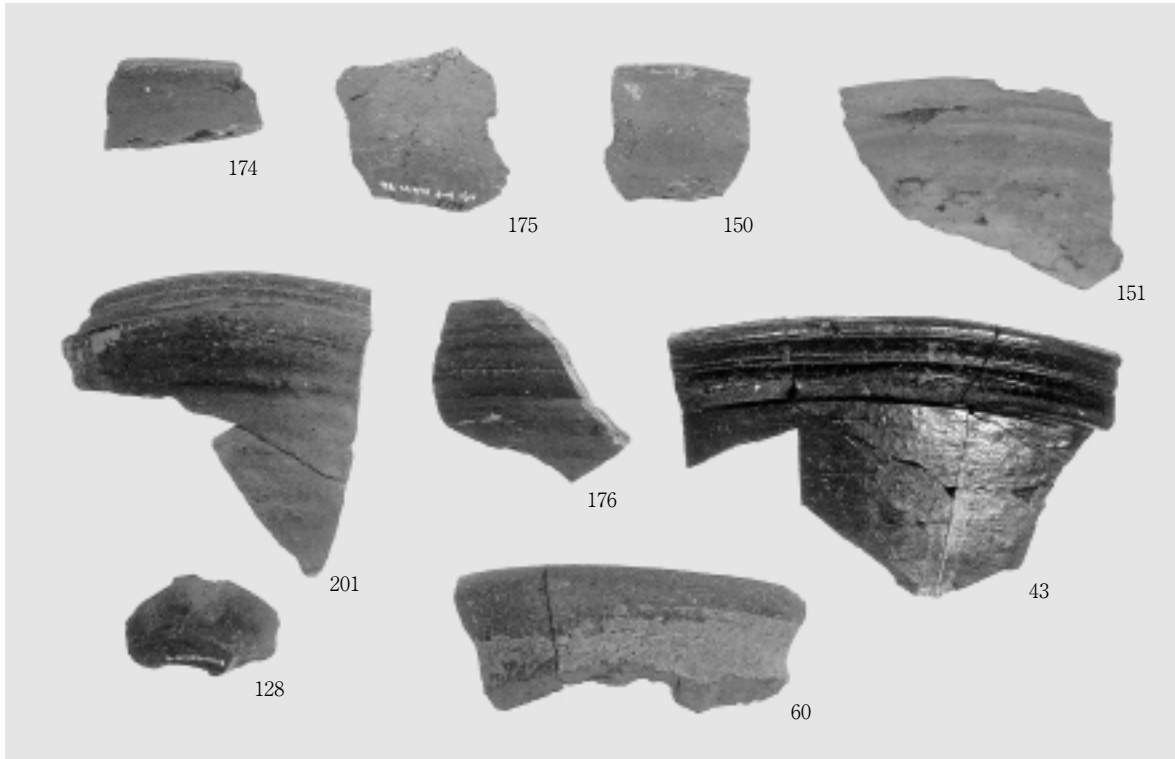


白磁

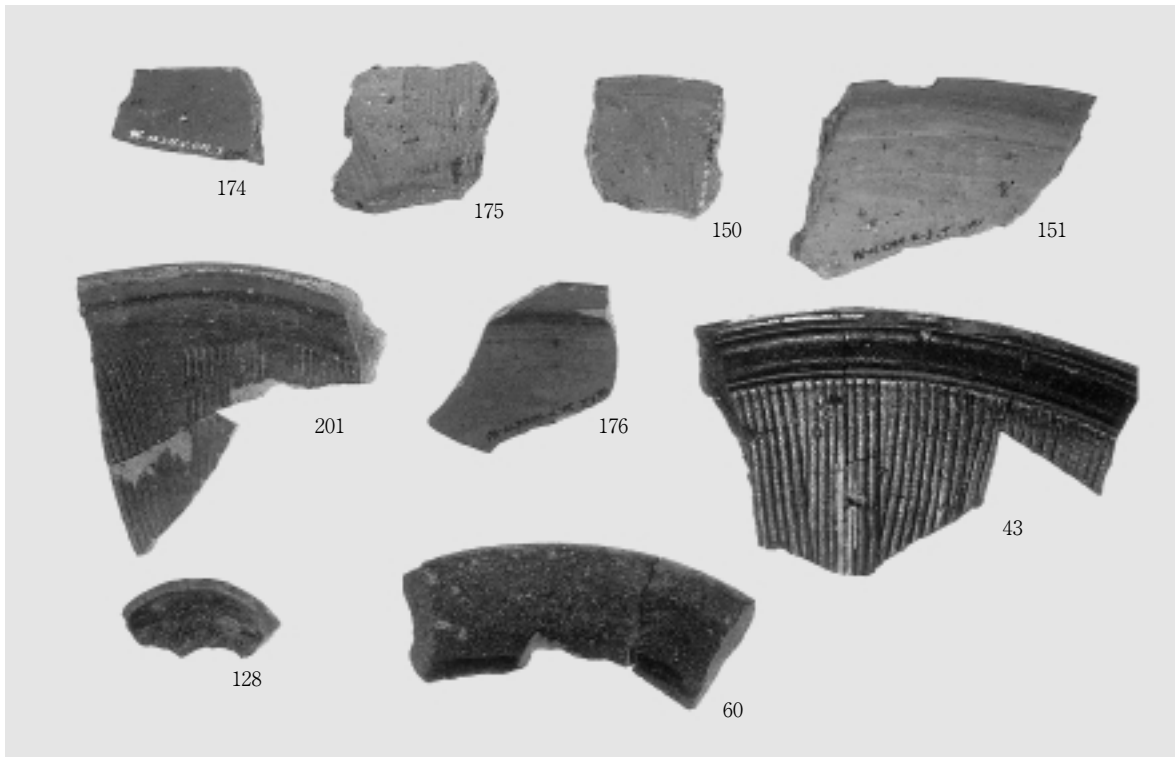


4・5区 出土遺物

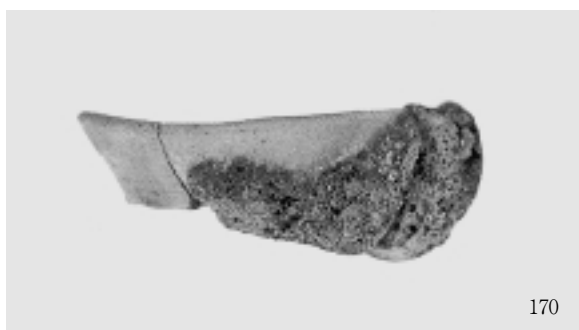
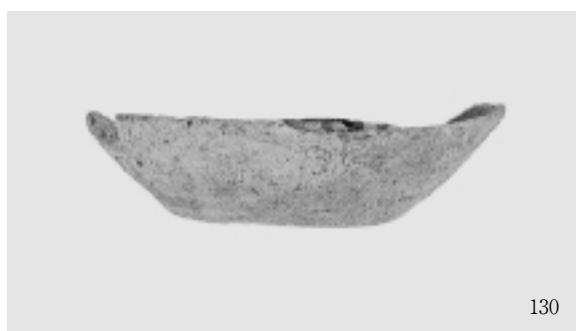
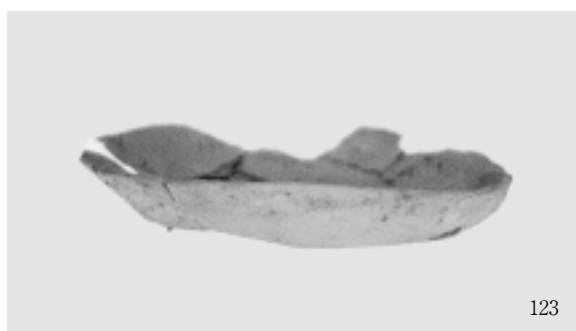
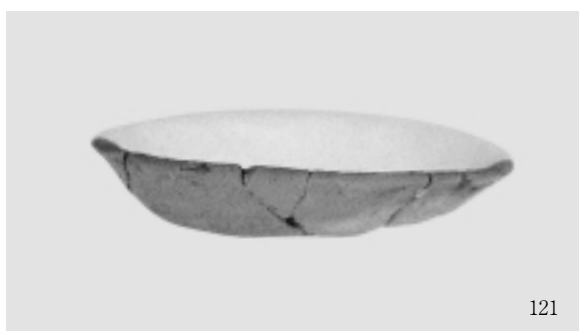
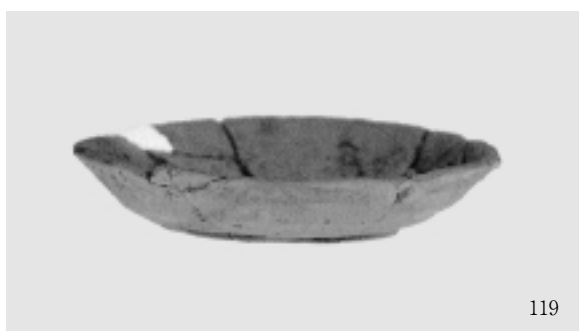
東播系須恵器



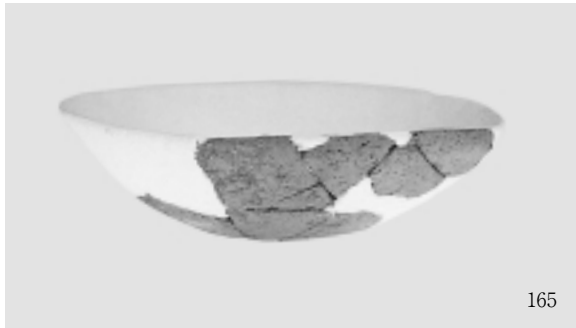
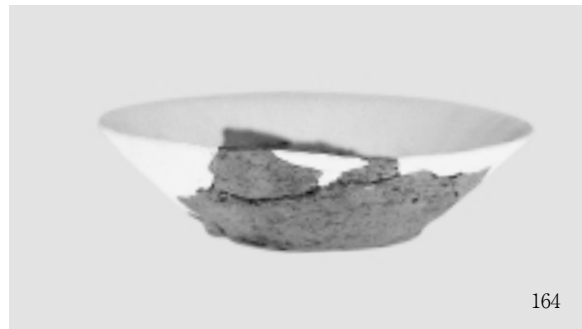
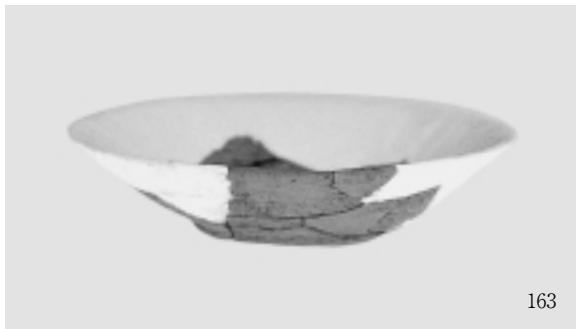
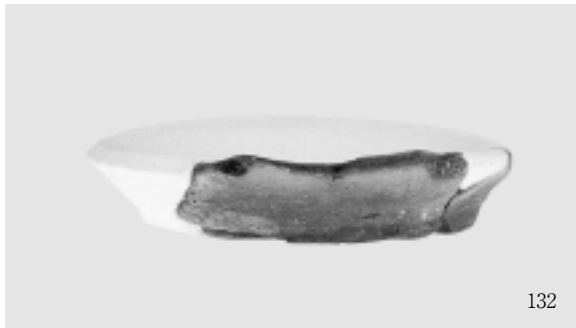
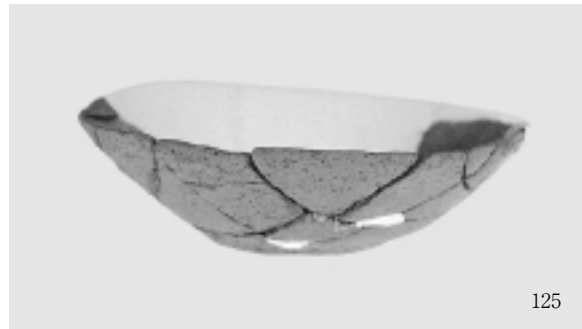
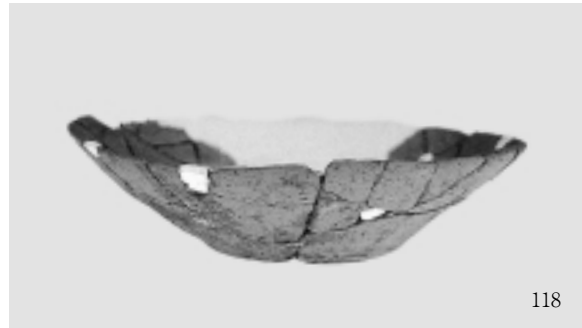
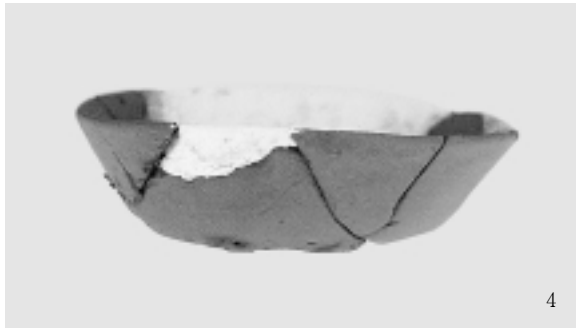
摺鉢（外面）



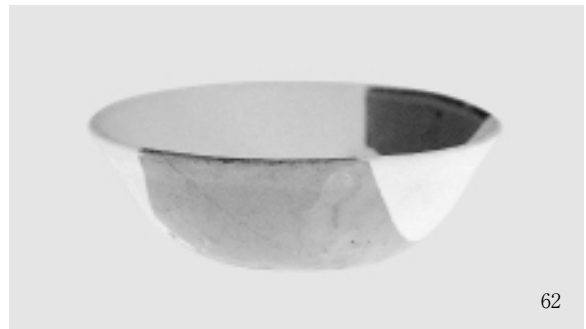
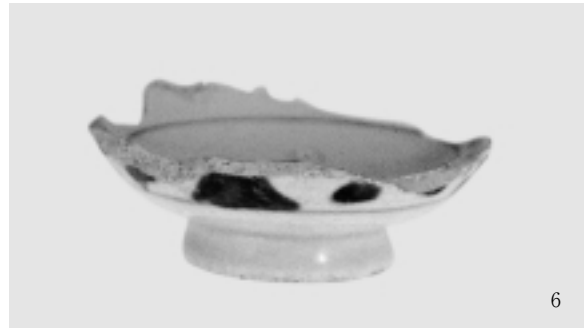
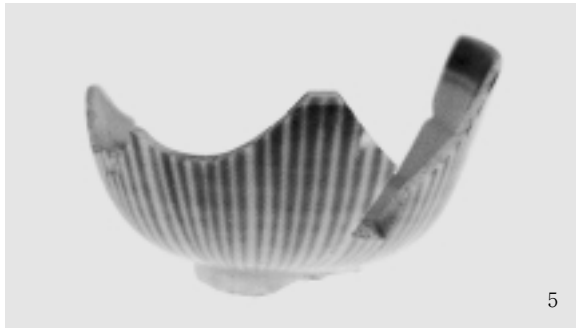
同上（内面）



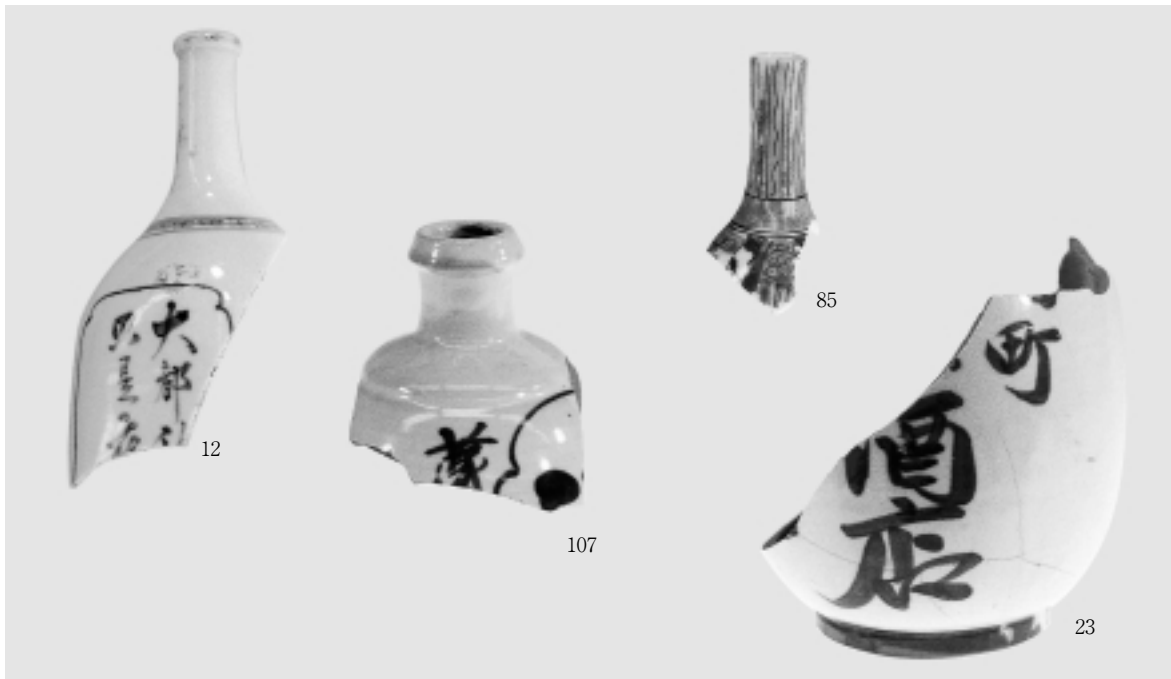
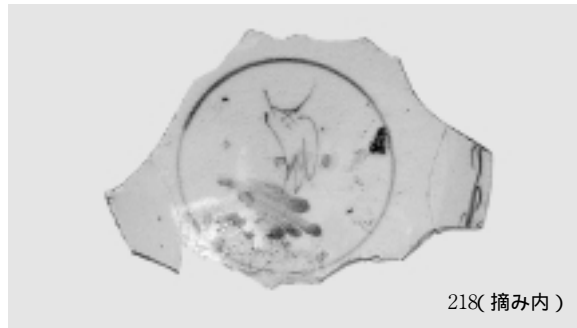
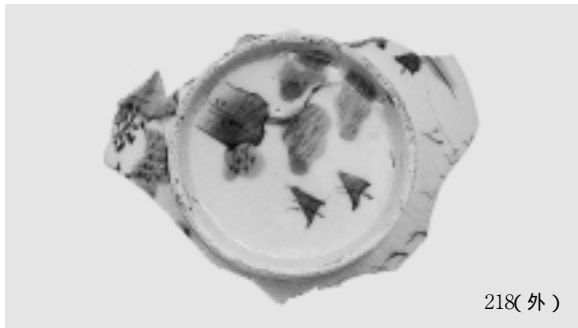
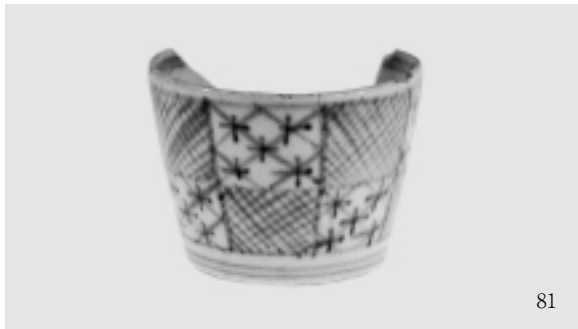
4・5区 出土遺物 土師器(小皿・杯皿)



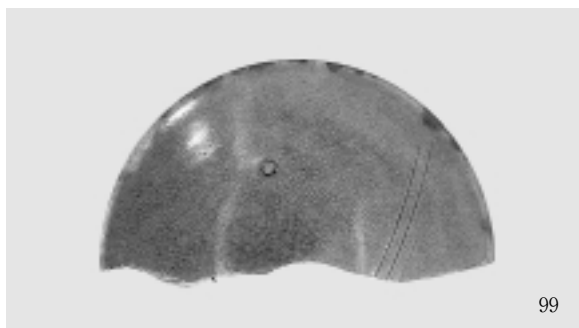
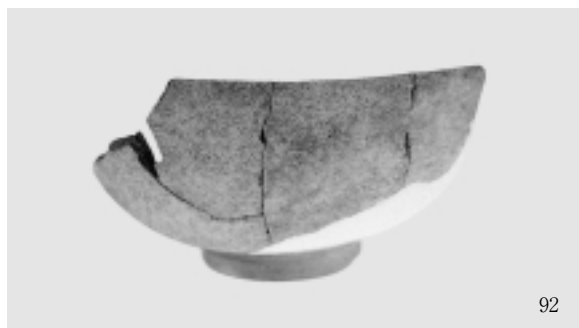
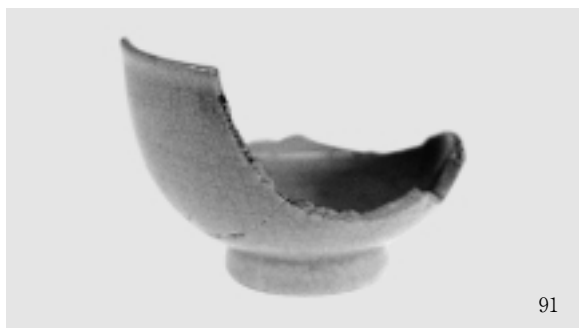
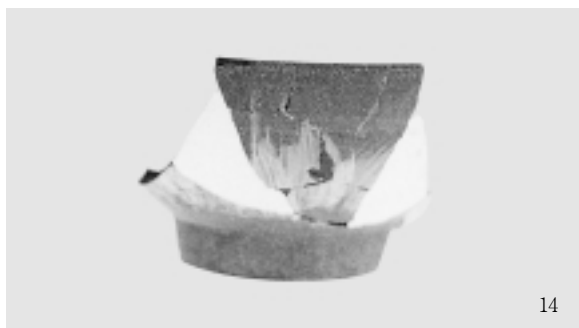
4・5区 出土遺物 土師器(杯)・瓦器(杯)



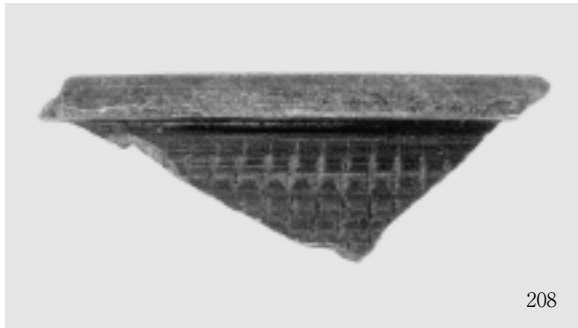
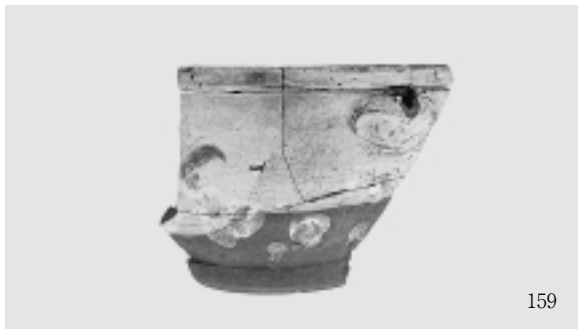
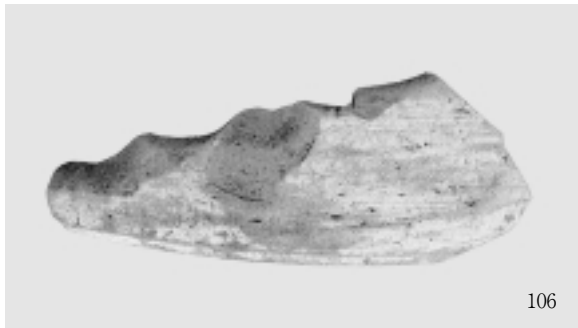
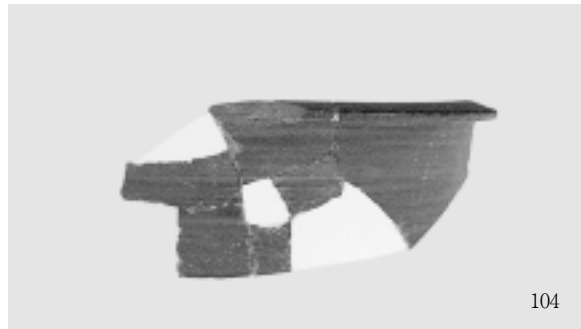
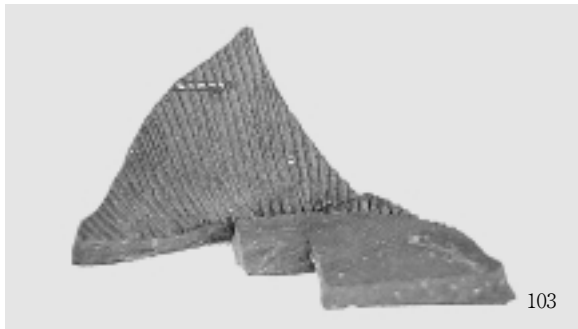
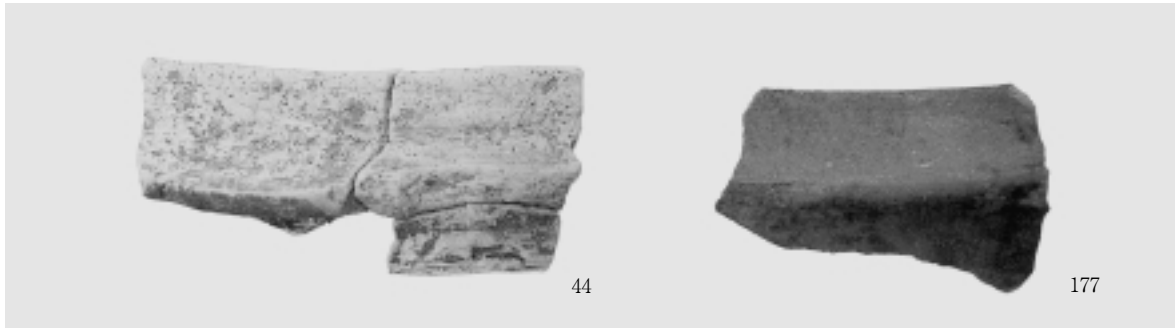
5区 出土遺物 須恵器・石製品(石鍋)・磁器



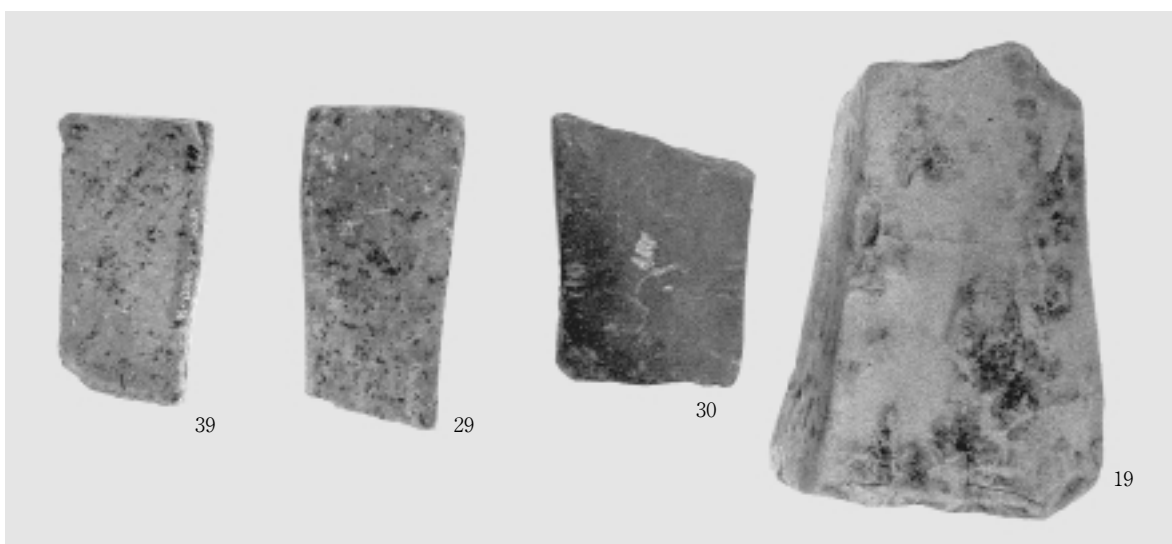
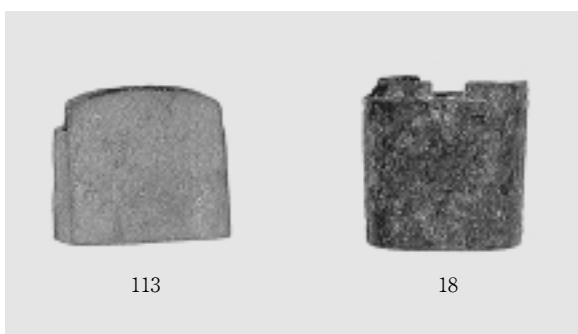
1・5区 出土遺物 陶器・磁器



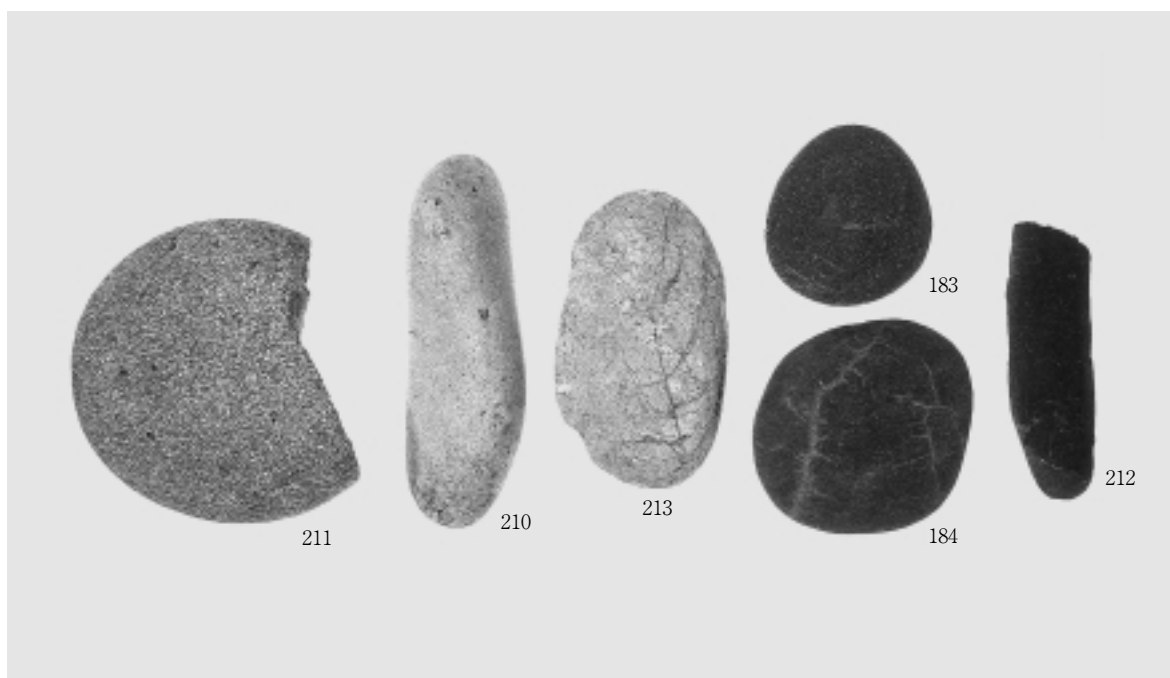
5区 出土遺物 陶器



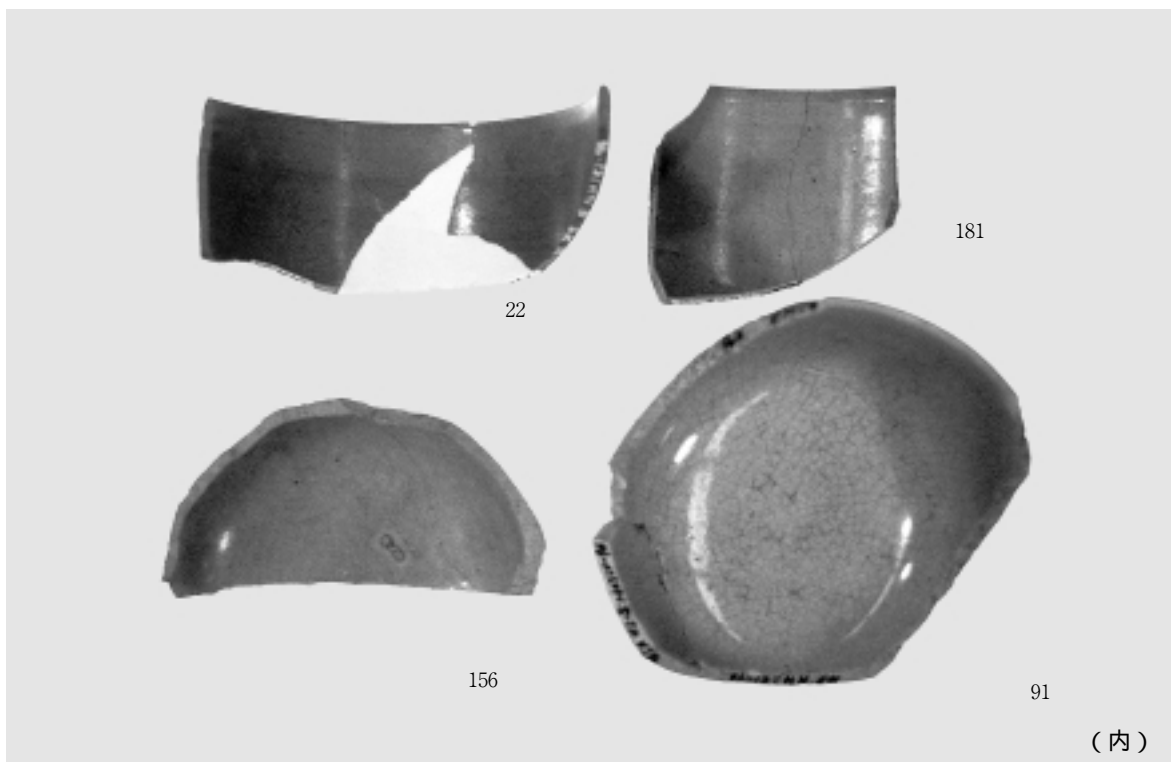
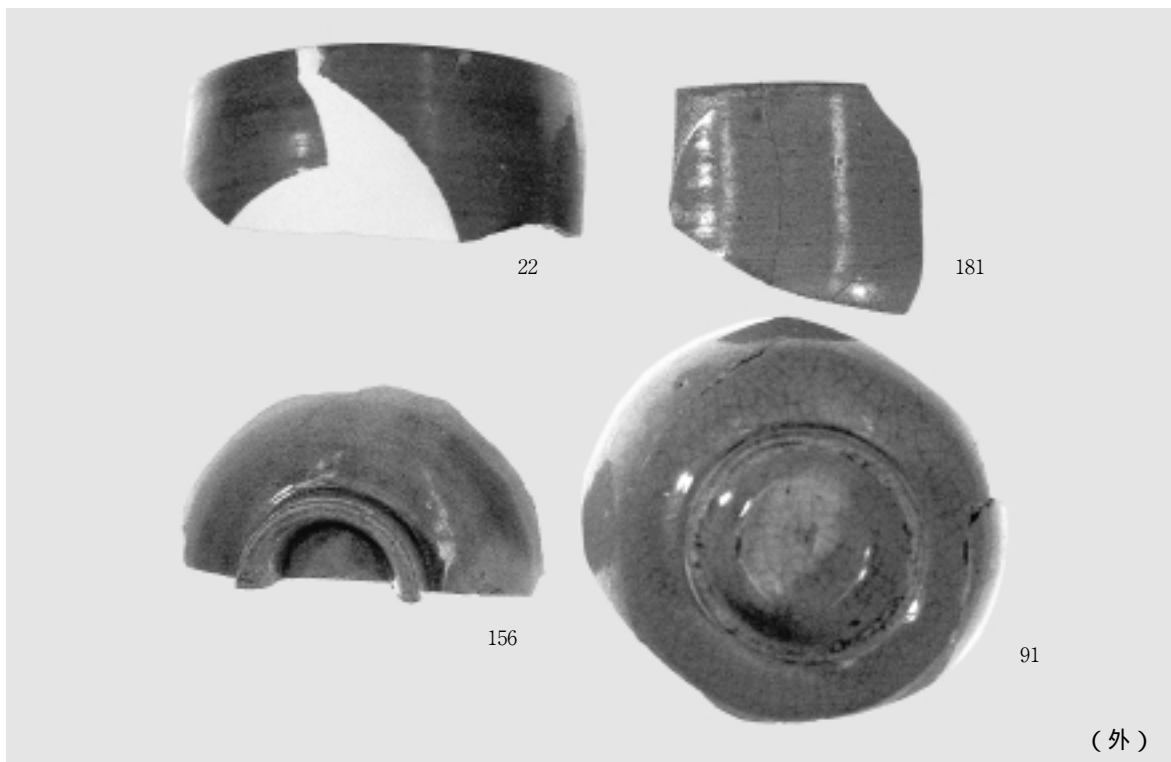
4・5区 出土遺物 土師器(鍋)・陶器



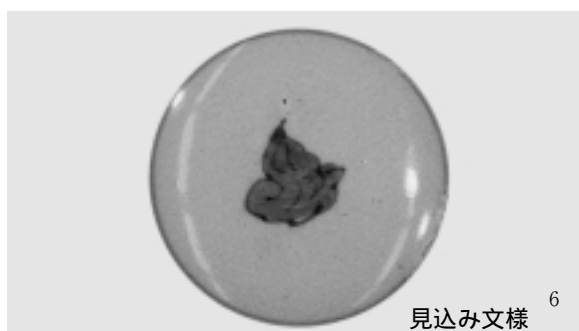
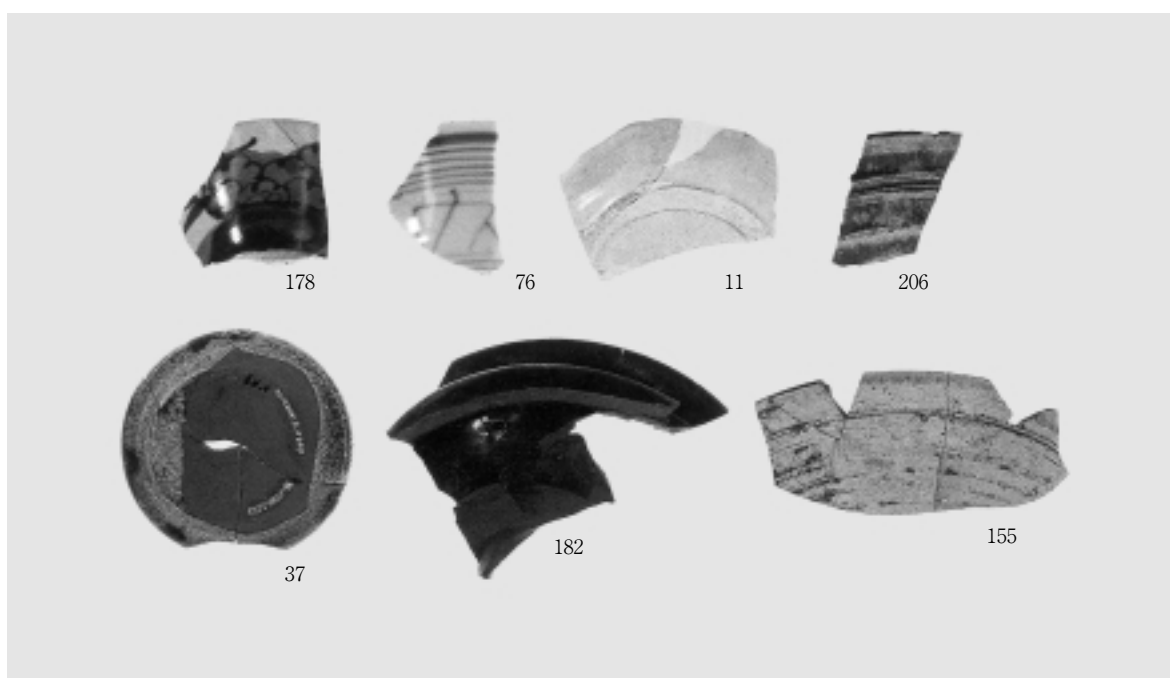
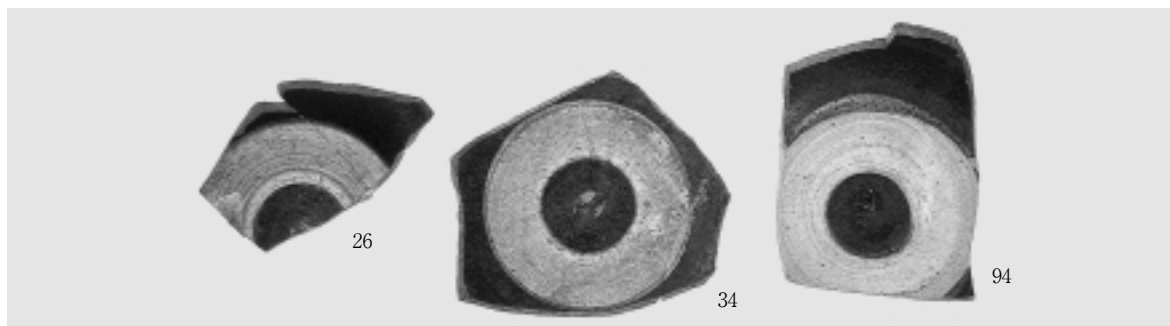
5区 出土遺物 金属製品・石製品(砥石)



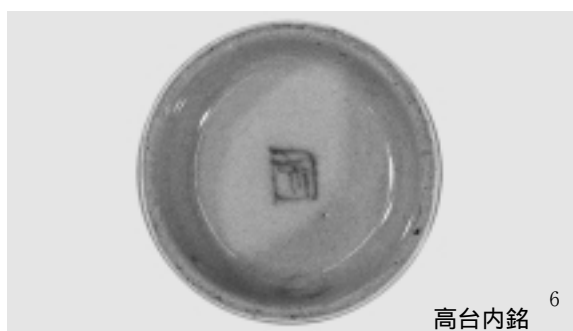
4区 出土遺物 金属製品・石製品・古銭



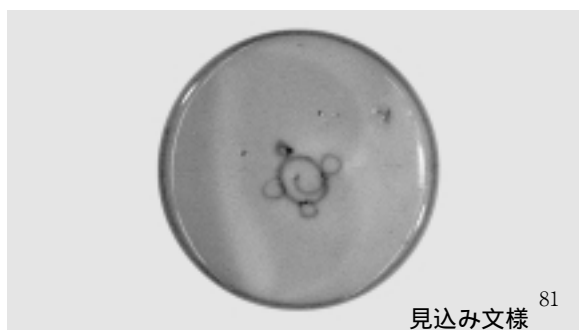
4・5区 出土遺物 灰釉陶器



見込み文様 6



高台内銘 6

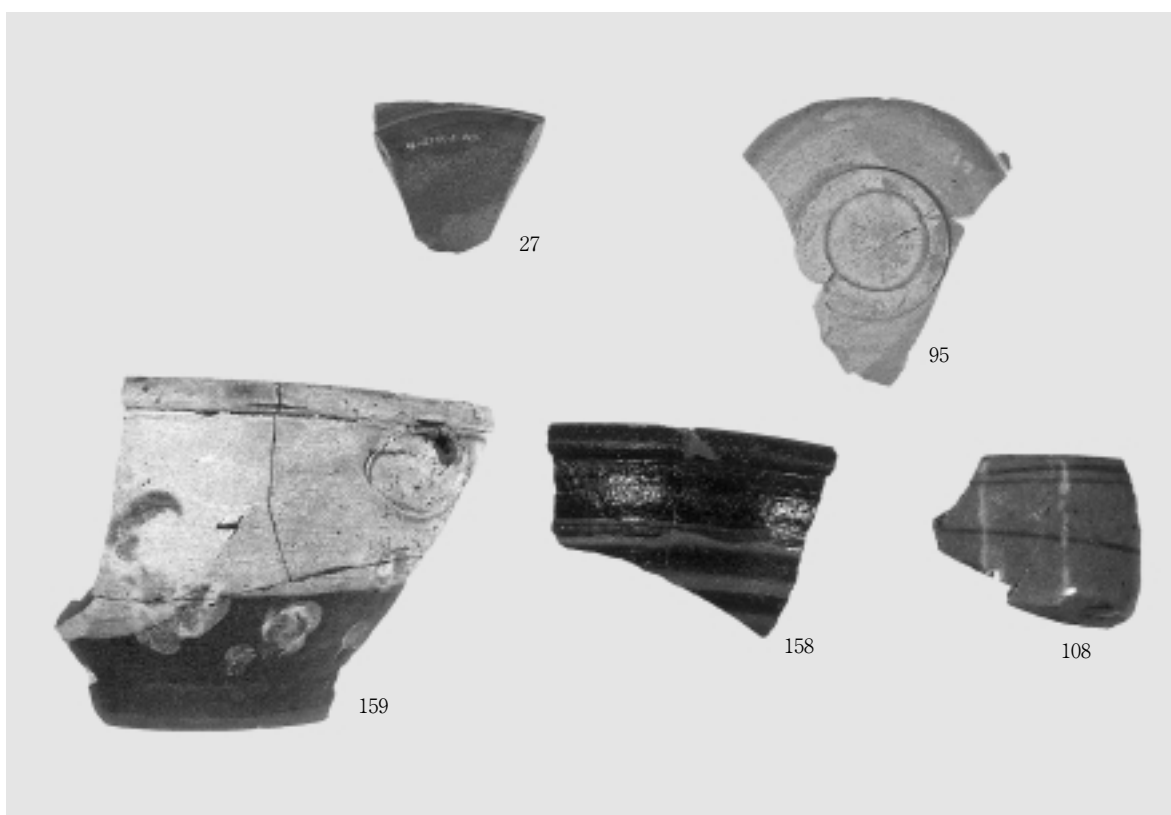
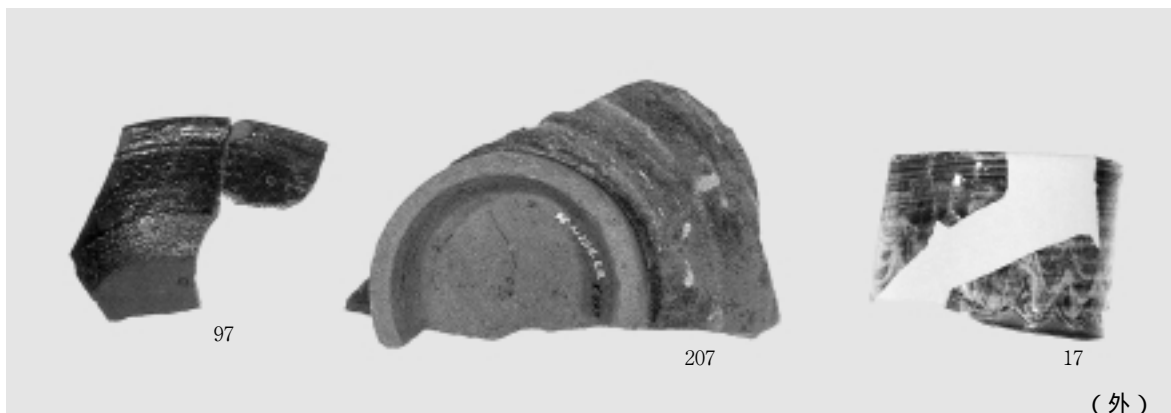


見込み文様 81



高台内銘 81

4・5区 出土遺物 陶器・磁器（能茶山産）



4・5区 出土遺物 陶器(肥前系)

報告書抄録

ふりがな	はたなろいせき							
書名	八田奈呂遺跡							
副書名	四国横断自動車道（伊野～須崎）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第51集							
編著者名	大野佳代子・江戸秀輝							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 - 0006 高知県南国市篠原南泉1437 - 1 TEL(088 - 864 - 0671)							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。	東経 。	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
はたなろ 八田奈呂 いせき 遺跡	こうちけんあがわぐん 高知県吾川郡 いのちよはた 伊野町八田 1464他	39381	320044	33° 30 57	133° 27 00	平成8年 1月 } 平成9年 5月	33,525m ²	四国横断自動車道（伊野～須崎）建設工事に伴う事前の発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
八田奈呂 遺跡	集落	弥生時代 古代～ 近世	中世；堀立柱建物跡、 柱穴、土坑、溝状遺構、 道路状遺構 弥生時代；流路、土坑		弥生土器片 石器 土師器 須恵器 瓦器 瓦質土器 陶磁器 その他			

八 田 奈 呂 遺 跡

四国横断自動車道（伊野～須崎）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 0 年 3 月

発行 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437 - 1
Tel. 088 - 864 - 0671

印刷 共和印刷株式会社